

西日本における土器・陶磁器の諸様相

赤松 和佳

西日本における土器・陶磁器の諸様相

目次

序章	近世考古学における陶磁器の研究	1
1	近世考古学の動向	1
2	考古学的陶磁器の研究	2
3	近世考古学における課題	5
第1章	西日本における土器・陶磁器の出土状況	9
第1節	土器・陶磁器の分析方法	9
1	土器・陶磁器の分析について	9
2	種類の分類基準	9
3	生産地の分類基準	10
4	器種の分類基準	11
5	装飾	13
第2節	近畿地方の出土状況	14
1	大坂城跡・大坂城下町跡	14
2	伊丹郷町遺跡	23
3	京都	30
4	和歌山・奈良	41
5	大阪	50
6	兵庫	67
第3節	四国地方の出土状況	79
1	高松城跡	79
2	徳島城下町跡	84
3	その他の遺跡	89
第4節	中国地方の出土状況	94
1	広島城跡	94
2	四日市遺跡	99
3	米子城跡	105
4	その他の遺跡	108
第5節	北九州地方の出土状況	116

1	小倉城・小倉城下町跡	116
2	長崎	122
3	佐賀	127
4	福岡	132
第2章	近畿における土器・陶磁器の様相	137
はじめに		137
第1節	近畿の都市型遺跡における土器・陶磁器の様相	137
1	大坂城跡	137
2	堺環濠都市遺跡	146
3	京都	148
4	奈良町遺跡	154
5	小結	159
第2節	近畿の城下町型遺跡における土器・陶磁器の様相	160
1	明石城武家屋敷跡	161
2	伏見城跡	164
3	堺環濠都市遺跡	168
4	その他の城下町型遺跡	172
5	小結	176
第3節	近畿の在郷町型遺跡における土器・陶磁器の様相	177
1	伊丹郷町遺跡	178
2	兵庫津遺跡	183
3	その他の在郷町型遺跡	187
4	小結	188
第4節	近畿の集落型遺跡における土器・陶磁器の様相	189
1	中百舌鳥遺跡	190
2	小結	192
第5節	近畿における土器・陶磁器の様相	192
第3章	四国・中国・北九州における土器・陶磁器の様相	197
はじめに		197
第1節	四国における土器・陶磁器の様相	197

1	高松城跡	197
2	その他の遺跡	202
第2節	中国における土器・陶磁器の様相	206
1	広島城跡	206
2	米子城跡	211
3	津和野城下町祇園町遺跡	214
4	四日市遺跡	215
第3節	北九州における土器・陶磁器の様相	218
1	小倉城・小倉城下町跡	218
2	長崎	222
3	その他の遺跡	224
第4節	四国・中国・北九州における土器・陶磁器の様相	227
第4章	西日本における土器・陶磁器流通	231
	はじめに	231
第1節	西日本における陶磁器流通の特徴	231
1	広域流通について	231
2	中規模流通について	234
3	小規模流通について	236
4	嗜好品流通について	238
5	内容物による流通について	240
第2節	土師質土器皿の流通について—伊丹郷町遺跡を例にして—	240
1	伊丹郷町遺跡出土の土師質土器皿について	241
2	分布状況	242
3	伊丹郷町遺跡周辺の土師質土器皿	243
第3節	西日本における土器・陶磁器流通の特徴	246
第5章	近世陶磁器からみる西日本の受容	249
第1節	近畿の都市民の土器・陶磁器の様相差	249
1	兵庫津遺跡について	249
2	分析方法	250
3	各地点の土器・陶磁器の様相	250

① 第2次地点の土器・陶磁器の様相	250
② 第14次地点の土器・陶磁器の様相	255
③ 第36次地点の土器・陶磁器の様相	258
④ 第38次地点の土器・陶磁器の様相	260
4 第2・14・36・38次地点の土器・陶磁器の様相差	263
① 16世紀末～17世紀中期	263
② 17世紀後期～18世紀前期	265
③ 18世紀中期～18世紀後期	267
④ 18世紀後期～19世紀前期	269
第2節 ヨーロッパ磁器の受容	271
1 ヨーロッパ磁器について	271
2 ヨーロッパ磁器の出土状況	272
3 ヨーロッパ磁器の変遷	272
4 ヨーロッパ磁器の受容	273
第3節 広島藩大坂蔵屋敷跡出土の砥部焼	274
1 砥部焼について	274
2 近畿における砥部焼の出土状況	275
3 広島藩大坂蔵屋敷跡での砥部焼の受容	275
第6章 総括	279
参考文献	288

挿 図 目 次

第1章	297
第2節	297
第1図 近畿主要遺跡位置図	第4図 大坂城跡用途別組成
第2図 大阪府遺跡位置図	第5図 大坂城跡食膳具組成
第3図 大坂城跡産地別組成	第6図 大阪城跡調理具組成

- 第 7 図 大阪城跡貯蔵具組成
- 第 8 図 大阪城跡調度具組成
- 第 9 図 住友銅吹所跡産地別組成
- 第 10 図 住友銅吹所跡用途別組成
- 第 11 図 住友銅吹所跡食膳具組成
- 第 12 図 住友銅吹所跡貯蔵具組成
- 第 13 図 住友銅吹所跡調度具組成
- 第 14 図 伊丹郷町遺跡産地別組成
- 第 15 図 伊丹郷町遺跡用途別組成
- 第 16 図 伊丹郷町遺跡食膳具組成
- 第 17 図 伊丹郷町遺跡調理具組成
- 第 18 図 伊丹郷町遺跡貯蔵具組成
- 第 19 図 伊丹郷町遺跡調度具組成
- 第 20 図 京都府遺跡位置図
- 第 21 図 公家町跡産地別組成
- 第 22 図 伏見城跡産地別組成
- 第 23 図 伏見城跡用途別組成
- 第 24 図 伏見城跡食膳具組成
- 第 25 図 伏見城跡調理具組成
- 第 26 図 伏見城跡貯蔵具組成
- 第 27 図 伏見城跡調度具組成
- 第 28 図 左京三条三坊十一町
土坑 101 産地別組成
- 第 29 図 左京三条三坊十一町
土坑 101 用途別組成
- 第 30 図 左京三条三坊十一町
土坑 101 食膳具組成
- 第 31 図 左京三条三坊十一町
土坑 101 調理具組成
- 第 32 図 左京三条三坊十一町
土坑 101 貯蔵具組成
- 第 33 図 左京三条三坊十一町
土坑 101 調度具組成
- 第 34 図 近畿地方の肥前陶器分布変遷図
- 第 35 図 近畿地方の肥前磁器分布変遷図
- 第 36 図 和歌山・奈良県遺跡位置図
- 第 37 図 奈良県遺跡産地別組成
- 第 38 図 奈良県遺跡用途別組成
- 第 39 図 奈良県遺跡食膳具組成
- 第 40 図 奈良県遺跡調理具組成
- 第 41 図 奈良県遺跡貯蔵具組成
- 第 42 図 奈良県遺跡調度具組成
- 第 43 図 堺環濠都市遺跡産地別組成
- 第 44 図 堺環濠都市遺跡用途別組成
- 第 45 図 堺環濠都市遺跡食膳具組成
- 第 46 図 堺環濠都市遺跡調理具組成
- 第 47 図 堺環濠都市遺跡貯蔵具組成
- 第 48 図 堺環濠都市遺跡調度具組成
- 第 49 図 麻田藩陣屋跡産地別組成
- 第 50 図 麻田藩陣屋跡用途別組成
- 第 51 図 麻田藩陣屋跡食膳具組成
- 第 52 図 麻田藩陣屋跡調理具組成
- 第 53 図 麻田藩陣屋跡貯蔵具組成
- 第 54 図 麻田藩陣屋跡調度具組成
- 第 55 図 中百舌鳥遺跡産地別組成
- 第 56 図 中百舌鳥遺跡用途別組成
- 第 57 図 中百舌鳥遺跡食膳具組成
- 第 58 図 中百舌鳥遺跡調理具組成

第 59 図	中百舌鳥遺跡貯蔵具組成	第 76 図	姫路城跡用途別組成
第 60 図	中百舌鳥遺跡調度具組成	第 77 図	姫路城跡食膳具組成
第 61 図	枚方宿遺跡産地別組成	第 78 図	姫路城跡調理具組成
第 62 図	枚方宿遺跡用途別組成	第 79 図	姫路城跡貯蔵具組成
第 63 図	枚方宿遺跡食膳具組成	第 80 図	姫路城跡調度具組成
第 64 図	枚方宿遺跡調理具組成	第 81 図	明石城武家屋敷跡産地別組成
第 65 図	枚方宿遺跡貯蔵具組成	第 82 図	明石城武家屋敷跡用途別組成
第 66 図	枚方宿遺跡調度具組成	第 83 図	明石城武家屋敷跡食膳具組成
第 67 図	大阪府下京焼系陶器窯分布図	第 84 図	明石城武家屋敷跡調理具組成
第 68 図	兵庫県遺跡位置図	第 85 図	明石城武家屋敷跡貯蔵具組成
第 69 図	兵庫津遺跡産地別組成	第 86 図	明石城武家屋敷跡調度具組成
第 70 図	兵庫津遺跡用途別組成	第 87 図	赤穂城下町跡産地別組成
第 71 図	兵庫津遺跡食膳具組成	第 88 図	赤穂城下町跡用途別組成
第 72 図	兵庫津遺跡調理具組成	第 89 図	赤穂城下町跡食膳具組成
第 73 図	兵庫津遺跡貯蔵具組成	第 90 図	赤穂城下町跡調理具組成
第 74 図	兵庫津遺跡調度具組成	第 91 図	赤穂城下町跡貯蔵具組成
第 75 図	姫路城跡産地別組成	第 92 図	赤穂城下町跡調度具組成
第 3 節		359	
第 93 図	四国地方遺跡位置図	第 104 図	徳島城下町跡貯蔵具組成
第 94 図	高松城跡産地別組成	第 105 図	徳島城下町跡調度具組成
第 95 図	高松城跡用途別組成	第 106 図	四国地方肥前陶器分布変遷図
第 96 図	高松城跡食膳具組成	第 107 図	四国地方肥前磁器分布変遷図
第 97 図	高松城跡調理具組成	第 108 図	小籠遺跡産地別組成
第 98 図	高松城跡貯蔵具組成	第 109 図	小籠遺跡用途別組成
第 99 図	高松城跡調度具組成	第 110 図	小籠遺跡食膳具組成
第 100 図	徳島城下町跡産地別組成	第 111 図	小籠遺跡調理具組成
第 101 図	徳島城下町跡用途別組成	第 112 図	小籠遺跡貯蔵具組成
第 102 図	徳島城下町跡食膳具組成	第 113 図	小籠遺跡調度具組成
第 103 図	徳島城下町跡調理具組成		

第 4 節 371

- 第 114 図 中国地方遺跡位置図
- 第 115 図 広島城跡産地別組成
- 第 116 図 広島城跡用途別組成
- 第 117 図 広島城跡食膳具組成
- 第 118 図 広島城跡調理具組成
- 第 119 図 広島城跡貯蔵具組成
- 第 120 図 広島城跡調度具組成
- 第 121 図 四日市遺跡産地別組成
- 第 122 図 四日市遺跡用途別組成
- 第 123 図 四日市遺跡食膳具組成
- 第 124 図 四日市遺跡調理具組成
- 第 125 図 四日市遺跡貯蔵具組成
- 第 126 図 四日市遺跡調度具組成
- 第 127 図 米子城跡産地別組成
- 第 128 図 米子城跡用途別組成
- 第 129 図 米子城跡食膳具組成
- 第 130 図 米子城跡調理具組成
- 第 131 図 米子城跡貯蔵具組成
- 第 132 図 米子城跡調度具組成
- 第 133 図 富田川河床遺跡産地別組成
- 第 134 図 富田川河床遺跡用途別組成
- 第 135 図 富田川河床遺跡食膳具組成
- 第 136 図 富田川河床遺跡調理具組成
- 第 137 図 富田川河床遺跡貯蔵具組成
- 第 138 図 富田川河床遺跡調度具組成
- 第 139 図 二日市遺跡銭座跡産地別組成
- 第 140 図 二日市遺跡銭座跡用途別組成
- 第 141 図 二日市遺跡銭座跡食膳具組成
- 第 142 図 二日市遺跡銭座跡調理具組成
- 第 143 図 二日市遺跡銭座跡貯蔵具組成
- 第 144 図 二日市遺跡銭座跡調度具組成
- 第 145 図 中国地方肥前陶器分布変遷図
- 第 146 図 中国地方肥前磁器分布変遷図
- 第 147 図 津和野城下町遺跡産地別組成
- 第 148 図 津和野城下町遺跡用途別組成
- 第 149 図 津和野城下町遺跡食膳具組成
- 第 150 図 津和野城下町遺跡調理具組成
- 第 151 図 津和野城下町遺跡貯蔵具組成
- 第 152 図 津和野城下町遺跡調度具組成
- 第 153 図 弓谷たたら遺跡産地別組成
- 第 154 図 弓谷たたら遺跡用途別組成
- 第 155 図 弓谷たたら遺跡食膳具組成
- 第 156 図 弓谷たたら遺跡調理具組成
- 第 157 図 弓谷たたら遺跡貯蔵具組成
- 第 158 図 弓谷たたら遺跡調度具組成

第 5 節 391

- 第 159 図 北九州地方遺跡位置図
- 第 160 図 小倉城跡産地別組成
- 第 161 図 小倉城跡用途別組成
- 第 162 図 小倉城跡食膳具組成
- 第 163 図 小倉城跡調理具組成
- 第 164 図 小倉城跡貯蔵具組成
- 第 165 図 小倉城跡調度具組成
- 第 166 図 長崎産地別組成
- 第 167 図 長崎用途別組成
- 第 168 図 長崎食膳具組成

第 169 図	長崎調理具組成	第 177 図	西中野遺跡調理具組成
第 170 図	長崎貯蔵具組成	第 178 図	黒崎城跡・黒崎宿場町遺跡産地別組成
第 171 図	長崎調度具組成	第 179 図	黒崎城跡・黒崎宿場町遺跡用途別組成
第 172 図	西中野遺跡産地別組成	第 180 図	黒崎城跡・黒崎宿場町遺跡食膳具組成
第 173 図	西中野遺跡用途別組成	第 181 図	黒崎城跡・黒崎宿場町遺跡調理具組成
第 174 図	西中野遺跡食膳具組成	第 182 図	黒崎城跡・黒崎宿場町遺跡貯蔵具組成
第 175 図	西中野遺跡調理具組成	第 183 図	黒崎城跡・黒崎宿場町遺跡調度具組成
第 176 図	西中野遺跡貯蔵具組成		
第 2 章	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		403
第 184 図	近畿の 16 世紀末～17 世紀前期 3 類型遺跡分布図		
第 185 図	近畿の 17 世紀後期～18 世紀前期 4 類型遺跡分布図		
第 186 図	近畿の 18 世紀後期～19 世紀前期 4 類型遺跡分布図		
第 3 章	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		406
第 187 図	西日本の 16 世紀末～17 世紀前期 7 類型遺跡分布図		
第 188 図	西日本の 17 世紀後期～18 世紀前期 7 類型遺跡分布図		
第 189 図	西日本の 18 世紀後期～19 世紀前期 7 類型遺跡分布図		
第 4 章	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		409
第 1 節	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		409
第 190 図	西日本出土 岸岳肥前陶器分布図	第 196 図	近世の陶磁器窯跡
第 191 図	西日本出土 肥前陶器（胎土目）分布図	第 197 図	肥前陶器播鉢・甕分布圏
第 192 図	西日本出土 肥前陶器（砂目）分布図	第 198 図	堺・明石焼播鉢分布圏
第 193 図	西日本出土 初期伊万里分布図	第 199 図	京焼系陶器煮沸具分布図
第 194 図	西日本出土 筒型腰張碗分布図	第 200 図	京焼系陶器色絵碗分布図
第 195 図	西日本出土 肥前磁器（くらわんか碗）分布図	第 201 図	小規模流通品の流通圏
		第 202 図	「桃山陶器」出土遺跡
		第 203 図	備前焼「保命酒」徳利出土遺跡

第 2 節	423
第 204 図	伊丹郷町遺跡と周辺遺跡位置図	第 208 図 18 世紀後期～19 世紀前期
第 205 図	伊丹郷町遺跡土師質土器分類図	土師質土器皿分布図
第 206 図	16 世紀末～17 世紀後期 土師質土器皿分布図	第 209 図 麻田藩陣屋跡出土の土師質土器皿
第 207 図	17 世紀後期～18 世紀前期 土師質土器皿分布図	第 210 図 尼崎城跡出土の土師質土器皿
第 5 章	429
第 1 節	429
第 211 図	兵庫津遺跡調査位置図	第 224 図 第 36 次地点産地別組成
第 212 図	第 2 次地点産地別組成	第 225 図 第 36 次地点用途別組成
第 213 図	第 2 次地点用途別組成	第 226 図 第 36 次地点食膳具組成
第 214 図	第 2 次地点食膳具組成	第 227 図 第 36 次地点調理具組成
第 215 図	第 2 次地点調理具組成	第 228 図 第 36 次地点貯蔵具組成
第 216 図	第 2 次地点貯蔵具組成	第 229 図 第 36 次地点調度具組成
第 217 図	第 2 次地点調度具組成	第 230 図 第 38 次地点産地別組成
第 218 図	第 14 次地点産地別組成	第 231 図 第 38 次地点用途別組成
第 219 図	第 14 次地点用途別組成	第 232 図 第 38 次地点食膳具組成
第 220 図	第 14 次地点食膳具組成	第 233 図 第 38 次地点調理具組成
第 221 図	第 14 次地点調理具組成	第 234 図 第 38 次地点貯蔵具組成
第 222 図	第 14 次地点貯蔵具組成	第 235 図 第 38 次地点調度具組成
第 223 図	第 14 次地点調度具組成	第 236 図 兵庫津遺跡土器・陶磁器変遷図
第 2 節	445
第 237 図	麻田藩陣屋跡出土のヨーロッパ磁器	
第 3 節	446
第 238 図	砥部焼窯跡位置図	第 240 図 SK2056 出土碗類の産地別組成
第 239 図	近畿出土の砥部焼分布図	第 241 図 SK2056 出土の端反碗産地別組成
資料編	449
第 242 図	大坂城下町跡 O J 92-18 S K 505	第 244 図 大坂城下町跡 O J 92-18 S K 330
第 243 図	大坂城下町跡 AZ87-5 土坑 201	第 245 図 住友銅吹所跡妙知焼火災層 ①

- 第 246 図 住友銅吹所跡妙知焼火災層 ②
- 第 247 図 伊丹郷町遺跡第 86 次調査
B-12 区土坑 66
- 第 248 図 伊丹郷町遺跡第 123 次調査
D-7 区土坑 102
- 第 249 図 伏見城跡 2 区土坑 49 ①
- 第 250 図 伏見城跡 2 区土坑 49 ②
- 第 251 図 伏見城跡 2 区土坑 49 ③
- 第 252 図 伏見城跡 1 区土坑 783
- 第 253 図 伏見城跡 1 区土坑 1372 ①
- 第 254 図 伏見城跡 1 区土坑 1372 ②
- 第 255 図 奈良町遺跡第 424 次調査 S E 16
- 第 256 図 奈良町遺跡第 424 次調査
S E 17 ①
- 第 257 図 奈良町遺跡第 424 次調査
S E 17 ②
- 第 258 図 正暦寺 S E 17 ①
- 第 259 図 正暦寺 S E 17 ②
- 第 260 図 堺環濠都市遺跡 SKT959 ①
- 第 261 図 堺環濠都市遺跡 SKT959 ②
- 第 262 図 麻田藩陣屋跡落込 46
- 第 263 図 麻田藩陣屋跡土坑 654
- 第 264 図 麻田藩陣屋跡土坑 26
- 第 265 図 麻田藩陣屋跡落込 5 ①
- 第 266 図 麻田藩陣屋跡落込 5 ②
- 第 267 図 久宝寺寺内町遺跡 SE3102
- 第 268 図 久宝寺寺内町遺跡 SO3102
- 第 269 図 中百舌鳥遺跡 SD002 ①
- 第 270 図 中百舌鳥遺跡 SD002 ②
- 第 271 図 中百舌鳥遺跡 S E001 ①
- 第 272 図 中百舌鳥遺跡 S E001 ②
- 第 273 図 中百舌鳥遺跡 SE001 ③
- 第 274 図 中百舌鳥遺跡 SE001 ④
- 第 275 図 宮町遺跡
- 第 276 図 志紀遺跡南北溝 ①
- 第 277 図 志紀遺跡南北溝 ②
- 第 278 図 馬立遺跡
- 第 279 図 高松城跡 8 A・C 区 II 層 ①
- 第 280 図 高松城跡 8 A・C 区 II 層 ②
- 第 281 図 高松城跡 A 区 SK08・09 ①
- 第 282 図 高松城跡 A 区 SK08・09 ②
- 第 283 図 米子城跡 SK49 ①
- 第 284 図 米子城跡 SK49 ②
- 第 285 図 米子城跡 6 次 SK02
- 第 286 図 長門国府遺跡宮の内地区 ①
- 第 287 図 長門国府遺跡宮の内地区 ②
- 第 288 図 弓谷たたら遺跡 ①
- 第 289 図 弓谷たたら遺跡 ②
- 第 290 図 弓谷たたら遺跡 ③
- 第 291 図 弓谷たたら遺跡 ④
- 第 292 図 小倉城新馬場跡 1 号井戸 ①
- 第 293 図 小倉城新馬場跡 1 号井戸 ②
- 第 294 図 築町遺跡 2 区 12 号土坑 ①
- 第 295 図 築町遺跡 2 区 12 号土坑 ②
- 第 296 図 築町遺跡 2 区 12 号土坑 ③
- 第 297 図 築町遺跡 1・3 区焼土 1 層 ①
- 第 298 図 築町遺跡 1・3 区焼土 1 層 ②
- 第 299 図 築町遺跡 1・3 区焼土 1 層 ③
- 第 300 図 万才町遺跡土坑 1 ①
- 第 301 図 万才町遺跡土坑 1 ②

- 第 301 図 万才町遺跡土坑 1 ③
 第 302 図 寺小路遺跡 SD2002 ①
 第 303 図 寺小路遺跡 SD2002 ②
 第 304 図 寺小路遺跡 SD2002 ③
 第 306 図 西中野遺跡Ⅱ 3 区 SD3007 ①
 第 307 図 西中野遺跡Ⅱ 3 区 SD3007 ②

- 第 308 図 西中野遺跡Ⅱ 3 区 SD3007 ③
 第 309 図 博多遺跡第 96 次 19 号土坑
 第 310 図 黒崎城跡 2 区 2 号井戸 ①
 第 311 図 黒崎城跡 2 区 2 号井戸 ②
 第 312 図 黒崎城跡 2 区 2 号井戸 ③

表 目 次

- 表 1 土器・陶磁器分類表 ①
 表 1 土器・陶磁器分類表 ②
 表 1 土器・陶磁器分類表 ③
 表 1 土器・陶磁器分類表 ④
 表 1 土器・陶磁器分類表 ⑤
 表 1 土器・陶磁器分類表 ⑥
 表 1 土器・陶磁器分類表 ⑦
 表 1 土器・陶磁器分類表 ⑧

- 表 1 土器・陶磁器分類表 ⑨
 表 1 京焼系陶器碗・肥前磁器碗分類 ⑩
 表 1 肥前磁器皿分類 ⑪
 表 2 各遺跡遺構年代表 ①
 表 2 各遺跡遺構年代表 ②
 表 3 ヨーロッパ磁器出土一覽
 表 4 近畿出土の砥部焼一覽

序章 近世考古学における陶磁器の研究

1 近世考古学の動向

近世考古学は、1970年代以前の調査例は、1965年に日本の磁器生産の起源を探るという目的で佐賀県有田町の天狗谷窯跡群の調査が有名である。この他にも瀬戸・美濃・肥前などの「桃山陶器」と呼ばれる窯跡での発掘調査が主で、これらは考古学的というよりは美術・工芸史的観点も混ざる調査が多かった。窯跡以外の調査については、近世の遺構を対象とすることはほとんどなく、複合遺跡などで近世の遺構・遺物が検出されても調査対象外となる例が大半を占め、稀に研究者の裁量により報告する程度であった。

1970年代に入ると、高度経済成長の影響で、全国各地で開発が進み、開発を前提とする発掘調査が行なわれるようになり、全国各地で大規模な調査をされるが、近世の遺構・遺物は調査対象外のままであった。その中で、動坂遺跡や都立一橋高校遺跡などの江戸遺跡での発掘調査において、江戸市中で重層的に良好な遺構・遺物が残存することがわかり、近世の大都市の構造が浮き彫りになり、近世都市研究に大きく寄与した。これを機に江戸時代（近世）の成果が注目されることとなった。古泉弘氏はこれらの江戸遺跡での調査成果が日本における近世考古学の出発点であると述べられている¹。

1980年代では、江戸遺跡での調査成果を受けてか、大坂・堺などの近世上方の大都市での本格的な調査が行なわれ、古代から重層的に良好な遺構が残存することがわかり、近世初期の上方の都市構造を知る大きな手がかりとなった。一方、陶磁器の生産地である瀬戸・美濃・肥前などの大窯業地では考古学的方法による調査が主体となり、技術的系譜やその影響が明らかとなった。

これら調査成果のもと、1986年に江戸遺跡での情報交換の場として江戸遺跡研究会が発足し、これを機に各地で研究会活動が活発となり、1988年には関西近世考古学研究会、1990年に九州近世陶磁学会などが発足された。これらは近世考古学の情報交換の場として活用され、その研究成果は考古学界に近世考古学の重要性を大きく示した。

このように、江戸や大坂などの大都市遺跡や窯業地での発掘調査、さらに、近世考古学の研究会が盛んに行われるなかで、福岡県北九州市の小倉城跡や香川県高松市の高松城跡、神奈川県小田原市の小田原城などの地方都市でも1990年代以降、活発に発掘調査がなされ、これにより近世の地方都市構造が少しではあるが分かり始めた。

¹ 古泉 弘『江戸を掘る 近世都市考古学への招待』柏書房 1988年

しかし、都市以外については詳細な調査事例は乏しく、偶発的に近世の遺構を発見し、調査することもあるが、それを主体に調査された例は、1990年代迄は少なかった。その中で、兵庫県伊丹市の有岡城跡・伊丹郷町遺跡、大阪府枚方市の枚方宿遺跡、大阪府泉佐野市の若宮遺跡などでは断続的に調査がなされ、伊丹郷町遺跡や枚方宿遺跡では町屋の構造が復元され、大都市以外の町屋の実態が明らかとなった。

伊丹郷町遺跡は酒造業を主体とする在郷町で、発掘調査の際に酒造遺構が多く検出する。その調査成果により工程別にその変遷が判明し、近世の酒造工程を知る上で多分野に影響を与えた。近世の産業遺跡の調査は、陶磁器の窯業地での窯跡調査が中心であった。この伊丹郷町遺跡での酒造遺構の研究は、近世の「産業遺跡」の重要性を根付かせ、その影響で住友銅吹所跡の精錬遺跡、石見銀山遺跡・多田銀銅山代官所跡などの鉱山遺跡、石切場など次々と調査する契機となった。

1990年代後半に至ると、近世考古学の認識が深まり、さらに、バブル成長における開発事業の影響で、江戸・大坂の大都市はもちろんのこと、仙台城跡、徳島城下町跡、広島城跡などの地方都市の調査が増え、地方都市研究が盛んとなる。また、古代以降の遺構の重複が激しいため、近世を主体とした調査が乏しかった京都市内でも、迎賓館建設に伴う発掘調査で、江戸時代を通して調査され、公家町の様相の一部がわかった。さらに、この調査成果を主体として京都における近世陶磁器の編年研究がなされ、江戸・大坂との比較研究が可能となった。

2000年に入ると、全国的に近世の調査は激減する。その中であって、江戸・京都・大坂等の大都市遺跡や瀬戸・肥前などの大窯業地では断続的に発掘調査が進められ、研究も大都市の社会構造や陶磁器の生産地での研究に縮小される。

近世の遺跡は、現在の都市内に継続されている場合が多い。発掘調査も遺跡保存を目的とした学術的な調査はごく僅かに過ぎず、大半は開発事業に伴うものであり、近世考古学研究は景気の動向に連動するように変化するといっても過言ではない。

2 考古学的陶磁器の研究

近世陶磁器の研究といえば、古くは美術史、工芸史的観点から研究が行われていた。先にも述べたが、1965～1970年に行われた佐賀県有田町の天狗谷窯跡の発掘調査は、磁器生産の起源をさぐる重要なものであった。この調査により考古学的手法による陶磁器研究の重要性を大きくアピールし、これを機に、肥前を始め瀬戸・美濃・常滑などで窯跡の調

査が活発に行われるようになった。

1970年代に入ると、瀬戸で檜崎彰一氏を中心に中世陶器研究がまとまり、続いて近世窯の研究に着手し始めた。1987～1989年に藤澤良祐氏が瀬戸本業焼の編年研究を発表された。また、肥前でも天狗谷窯跡調査後も有田町周辺はもちろん武雄・伊万里地域など肥前各地で発掘調査が行なわれ、1989年に大橋康二氏が調査成果から、肥前陶磁器の編年研究を発表された。この藤澤・大橋両氏の研究は消費地遺跡の陶磁器研究に採用され、近世遺跡で陶磁器研究が活発に行われることになった。

その中でも、江戸遺跡や大坂城跡・大坂城下町跡は、大都市ということで莫大な遺物が出土し、また、頻繁に起こった大火災や土地利用の変化などが多く、層位的検証が可能であるという特徴を有することから標識的な調査・研究が進められた。

江戸遺跡では1992・1996年に江戸陶磁器土器研究グループが行なったシンポジウム『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ』、『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』で、実年代資料や層位的検証ができる遺構を選別し、そこから出土した陶磁器は生産地編年のできる遺物の組成変化、土器については個々の形態変化から、江戸遺跡出土の陶磁器の段階設定をおこない、江戸遺跡の統一編年が確立した。さらに、2000年、堀内秀樹氏の「江戸遺跡出土陶磁器の段階設定とその画期」では、最近の江戸遺跡での追加資料を加えて、江戸遺跡出土陶磁器の段階設定を再類型化され、陶磁器の様相から、江戸遺跡における大きな変化期は、元禄と化政期にあると発表した。

大坂城跡・大坂城下町跡においても、16世紀後期～17世紀前期迄は、火災層や大規模な盛土が各所で検出されており、そこから出土した陶磁器や木簡資料などから、鈴木秀典氏、森毅氏らによって、石山本願寺期、豊臣前期、豊臣後期古、豊臣後期新、徳川1期、徳川2期に編年され、また、積山洋氏によって江戸期を14期にそれぞれ時期区分された。この江戸遺跡、大坂城跡・大坂城下町跡の遺物編年は、他の近世遺跡の年代決定や解釈に大きく寄与することとなった。

遺物編年が各所で行われる中で、陶磁器から生活用具の復元について、1988年、新宿区生涯学習財団が挑んだ四谷三丁目遺跡では、出土資料を機能的側面から分類し、推定個体数・器種組成を出し、必要最低限の生活道具を把握する試みが行なわれた。この器種分類は、異なる遺跡間の遺物を相互比較する上で、有効性が高く、遺構の性格、階層性を知る上で大きな成果となった。計測分類は基本設定が若干異なるが、1990年代以降、各所で試みられ、兵庫県伊丹市の伊丹郷町遺跡、徳島県徳島市の徳島城下町遺跡などで行われ、遺

跡の特徴が述べられている。

1980年後半には、各地での陶磁器編年や器種組成が確立すると、陶磁器研究はさらに踏み込んだ研究へと進んでいった。まず、陶磁器の流通については、遺跡の状況を述べたのは、1989年に森本伊知郎氏「江戸における陶磁器流通について」、1989年の長佐古真也氏「江戸市場の動向と窯業生産に与えた影響」などがある。

それ以外では、産地ごとに取り上げられたものが多く、肥前陶磁器は大橋康二氏が中心となって活動する九州近世陶磁学会で2001年『国内出土の肥前陶磁器(東日本編)』、2002年『国内出土の肥前陶磁器(西日本編)』で肥前陶磁器の全国での流通状況がまとめられた。瀬戸焼は藤澤良祐氏の「近世瀬戸焼の流通」や「西日本における瀬戸・美濃大窯製品の受容」など多々発表され、生産地の状況だけでなく、消費地での状況や文献資料も含めて検討されている。備前焼は、乗岡実氏「近世の備前焼播鉢について」がある。備前焼窯跡採集資料と消費地の実年代資料から備前焼播鉢の流通、編年作業を行った。丹波焼の流通については、川口宏海氏、長谷川 眞氏の研究が有名だが、2007年、両氏も研究報告されているが、大手前大学史学研究所が発表した『近世丹波焼の流通』は全国各地から出土した丹波焼の状況をまとめもので、考古学的に生産・流通の両面から研究されたものとしては初めての研究集である。信楽焼でも、畑中英二氏の『信楽焼の考古学的研究』があり、全国の消費地での状況、窯跡の採取資料から研究報告されている。

このように、陶磁器の大生産地や大消費地の状況をまとめた研究が落ち着きを見せ始めると、地方窯の研究が着目される。2000年に四国城下町研究会で行われた「四国・淡路の陶磁器—生産と流通 I」では、四国の陶磁器窯の実体を消費地資料から研究され、主に流通圏についてまとめられた。また、この研究会で、地方窯製品の特定付けが容易でないことが改めて認識された。その後、地方窯研究がさらに注目を浴び、関西陶磁史研究会で2003年に「近世後期における関西窯業の展開—国焼と京焼—」で全国の地方窯の実態を、2005年の「窯構造と窯道具からみた窯業—関西窯場の技術的系譜をさぐる—」では曖昧に分類される地方窯を窯構造や窯道具から技術的系譜について研究発表され、地方窯研究に大きく寄与した。

個々の生産地での研究が多いなか、2006年に瀬戸市文化財振興財団埋蔵文化財センターが行なった「江戸時代のやきもの—生産と流通—」では、近世陶磁器を生産と消費の両側面から取り上げられたのは初めてであり、大雑把ではあったが垣間見ることができた。

陶磁器の用途については、長佐古真也氏の「日常茶飯事のこと」で、江戸遺跡から出土

した碗類の量産器種の変遷と使用痕から碗類の用途を指摘された。陶磁器の組成から使用者の性格を考えたものとして、赤松和佳「近世土器・陶磁器からみた都市住民の階層性ー関西を中心にー」、水本和美氏の「‘ごみから読み解く商いー茶屋と宿場ー」などがある。

近年では、江戸遺跡で陶磁器の廃棄状態から都市住民の生活スタイルなどを考えたものやその廃棄の方法から生活を復元したものが活発に行なわれている。

このように、陶磁器における考古学的研究は、各陶磁器の生産地での編年・流通研究を基本とし、江戸・大坂などの大消費地である都市構造を中心に研究が行われている。

3 近世考古学における課題

先章までに、近世考古学及び考古学的陶磁器研究の動向を述べた。1980年代以降、80年後半～90年をピークに各地で発掘調査・調査報告がなされ、これにより学会内で近世考古学の重要性の認識は高まったといえる。また、陶磁器研究も遺構年代を決める尺度となり、陶磁器の分布状況により幕藩体制の実態を探る手がかりとなった。しかし、次の段階である広域的・多角的な研究については希薄と言っても過言ではない。実際に筆者も以前に「近畿の都市住民の陶磁器受容について」述べたことがあり、近畿の都市遺跡を中心に比較し、その特徴を論じた。だが、近畿の都市住民の陶磁器受容を示すには近畿の都市部以外はもちろんのこと近畿以外の地域も含めて比較してこそ、その特徴が明確になると思ったが、それを試みるには問題も多かった。

その第一の理由に上げられるのが、近世を通して層位毎に調査される遺跡が少ないため、研究対象となる遺跡・遺構が偏ることである。また広域に調査される例が少なく、都市及び集落の極一部を調査しても遺跡の特徴とはいいい難いことと、発掘調査の大半が開発事業に伴うため限られた期間内での調査が多く、複数期の遺構面を同時に調査する例が多いため、良好な一括廃棄土坑が限られた遺跡に偏ることである。

第二は遺物の出土量である。遺跡にもよるが、都市部の遺跡だと1ヶ所の廃棄土坑からコンテナ箱30個にも及ぶことは珍しいものではなく、膨大な量の資料を扱わなければならないこと。それに加えて、近世土器・陶磁器は器種が多種であり、産地別でも肥前や瀬戸などの大生産地は、ある程度識別は可能であるが、それらをコピーした地方窯の製品については、見分け方が研究者の裁量に委ねられており、不十分な識別を行うと分析結果も不十分なものとなる。それゆえに、取り上げられる資料も比較的識別が可能なものに集中し、それ以外は報告されない場合が多く、種類や量などの全体像が不明な遺跡が多い。限

られた時間内での調査成果を求められる行政調査の多い近世遺跡では、難しい問題である。

このようなことから、研究者の多くは感覚として掴んでいるものの、先に上げた理由から取扱う遺跡や遺物が偏るのである。また、各遺跡で研究された資料を参考にするにあたっては、分析方法が異なる場合が多いため、安易に採用できない。そのため広域にみるのではなく、遺跡内もしくは限られた遺物を対照とした一点集中的な研究が多いのが現状である。しかし、広域的に多数の遺跡を取り上げ、そのすべての遺物を分類し、その組成変化を検討しなければ、その遺跡・遺物を特徴付けられない。

本論は、近畿の近世遺跡を中心に、西日本から出土した土器・陶磁器を統一した方法により計測分析する。その産地別組成・用途別組成の特徴から遺跡を分類し、それらの土器・陶磁器の様相を明らかにする。

第1章では、西日本の土器・陶磁器の出土状況を述べる。まず第1節は土器・陶磁器を分析するうえで分類基準を設定する。今まで多くの研究者が分類および分析方法を発表されたが、地方に限定された産地・器種、広域に出土しない器種を省く場合がある。本分類はそれらも含めて西日本の遺跡で共通する分類基準を設ける。また、肥前陶器・肥前磁器は生産地で型式編年がされているため、細かい器形分類をすることにより、その組成変化から遺構年代が特定できる。さらに、施釉陶器・磁器の装飾を分類し、それらの組成から出土地点の陶磁器受容や地域性を掴むことができると考えられ新たに基準を設ける。

この分類基準を基に、第2節では近畿地方、第3節は四国地方、第4節は中国地方、第5節は北九州地方の土器・陶磁器の分析結果を述べる。

第2章では近畿の41遺跡を分析し、これらの産地別組成・用途別組成の特徴から、I都市型遺跡・II城下町型遺跡・III在郷町型遺跡・IV集落型遺跡の4タイプにわかれることがわかり、第1節～第4節で各タイプの代表的な遺跡を取り上げ土器・陶磁器の出土状況とその特徴を述べる。第5節では各タイプを比較し、その特徴から近畿の土器・陶磁器の様相を考察する。

第3章は、四国・中国・北九州を対象とし、20遺跡の土器・陶磁器を分析した。これらの分析結果を地域別に代表的な遺跡を取り上げ、その出土状況を検討し、最後に、四国・中国・北九州の土器・陶磁器の様相を考察する。

第4章は、土器・陶磁器の流通を検討する。西日本の土器・陶磁器の産地別組成・用途別組成の特徴から、土器・陶磁器は異なる流通であることがわかり、別節で検討する。土器は伊丹郷町遺跡出土の土師質土器の分布状況からその流通圏を見つめる。陶磁器は産地

別組成・用途別組成の特徴から、陶磁器流通は5類型に分かれることがわかり、その特徴と生産地の状況も含めて検討する。

第5章は、一都市内に流通した土器・陶磁器がどのように受容されているかを検討し、陶磁器受容を考える。さらに、今回計測分析をおこなった中で、特異な例を取り上げ、陶磁器の受容のあり方も考える。

第6章の総括では、先の研究成果をまとめる。

第1章 西日本における土器・陶磁器の出土状況

西日本各地の土器・陶磁器の出土状況を述べるが、地域を分けるにあたっては現在の地方ごとにしたが、現在の一県の範囲が近世と同一でないところが多い。このため江戸時代の国も視野に入れ、偏りのないようにそれらに属する遺跡を取り上げた。

分析にあたっては、近世を通して土器・陶磁器の変遷がわかる遺跡を中心に実施したが、条件を満たす遺跡は極僅かである。そのため、検討できる遺跡は個別に取り上げ、それに準じる遺跡や一時期でも良好な資料を提示できる遺跡については地域ごとにまとめた。

第1節 土器・陶磁器の分析方法

1 土器・陶磁器の分析について

近世遺跡ではその性格にもよるが、他の時代と比べると出土遺物が膨大であり、都市遺跡では一遺構内から十数箱に及ぶ例は常である。これら出土遺物について最善の分析方法を見出し、遺跡・遺構の特徴をどのように示すかは、研究者の間で議論される。

しかし、近世遺跡の場合、諸事情によって限られた遺物のみを取り上げて報告する例が多い。それは他の時代と比べると種類が多種あり、分析するのに膨大な時間と労力を必要とするためである。本論の対象とする土器・陶磁器においても材質を取り上げても、土器、陶器、磁器と大別でき、これらは製作技法の違いからもさらに分けられる。たとえば陶器は施釉陶器、焼締陶器があり、施釉陶器はこれと軟質施釉陶器、陶胎などに細分できるが、研究者によって分類基準は統一されていない。また、数量的な把握も総破片数や口縁部復元数など様々な算定方法を考案されているが、遺跡によってその方法は異なり、それらを比較しても無意味である。

そこで、本論では土器・陶磁器の分析研究の成果と問題点を踏まえ、新たな分類基準を設けることとした。

2 種類の分類基準（表1 ①～⑪）

分析方法は、土器・陶磁器を、1. 種類、2. 生産地、3. 器形、4. 装飾の分類の基準を定めておこなった。

¹ 出土量の多い遺構は、遺物を調査時にある程度選別し、それ以外の遺物は見学不可能な保管所に置かれたり、場合によっては調査時に廃棄する事例もある。

種類は材質から、土器・陶器・磁器に大別した。分類基準については、細かく規定すると、かえって正確さを欠くと考え下記に示す通りに分類した。

土器 (earthenware) ー素地は陶土。原則として軟質で、無釉のもの。

陶器 (pottery) ー素地は陶土。土器よりも硬質で、無釉・施釉は原則として問わず、焼締陶器、施釉陶器のもの。

磁器 (china) ー素地は陶石。土器・陶器より硬質である。

















3 生産地の分類基準

生産地は種類ごとに分類した。近世の土器・陶磁器の場合、大生産地の瀬戸や肥前などの製品をコピーしたのものが、それは成形技法や調整までも忠実に真似たものもあり、中には陶土も同じものを使用するものもあるため、安易な特定は混乱を招く。このことから、同じ技術的系譜を引くものは同類とした。また、土器については陶磁器よりさらに複雑で、大和産の瓦質土器や大坂産の焙烙など広域流通品は先学の研究により特定は可能であるが、それ以外のものについては製作地・窯は不明である。広域流通品以外のものの分布圏を検討すると、小規模に分布することから「在地」の可能性が高いと考えられている。しかし、その傾向は地域によって様々であり、限定することができないので、今回は「土器」してまとめた。以上のことから、生産地はまず下記の通りに分類した。





土器 (earthenware)

土師質土器  瓦質土器  東播系須恵器 

陶器 (pottery)

備前焼  常滑焼  丹波焼  信楽焼  堺・明石焼² 、軟質施釉陶器 、瀬戸美濃陶器 、肥前陶器 、上野・高取焼 、萩焼 、京焼系陶器  中国在地陶器³  大谷焼 、中国製陶器 、東南アジア陶器 、産地不明陶器 

磁器 (china)

中国製磁器  朝鮮王朝磁器  ベトナム磁器 、ヨーロッパ磁器 

² 堺焼は 17 世紀末、明石焼は 18 世紀後期に堺焼の陶工の指導により開窯したと考えられている。このことから、18 世紀後期以前の製品については堺焼製品と分類するべきだが、18 世紀後期から出現する明石焼と堺焼の製品の識別が困難であり同類とした。

³ 島根県の布志名焼、石見焼をはじめとして、島根・鳥取県などの日本海側で小規模な窯が 18 世紀前期以降に点在する。発掘調査されていない窯が多く、はっきりとした技術的系譜は不明であるが、製品にみられる窯道具の痕跡や施釉の特徴から、肥前陶器もしくは京焼系などの技術が少なからず導入された窯と考えられるが、これら窯毎に分類できないため中国在地陶器としてまとめた。

肥前磁器 、瀬戸美濃磁器 、京焼系磁器 、産地不明磁器 

4 器種の分類基準

近世の土器・陶磁器は、古代や中世のものに比べると器形が多種にわたり、これらを細分すればきりが無い。そのため使用方法が明確であるものに重点をおき分類した。まず、材質に関係なく、器形の特徴から、碗類・皿類・鉢類・甕類・壺類・瓶類・鍋類・器台類・その他と9類に分類し、それらを使用痕や装飾の特徴などから食膳具の皿、調度具の灯明皿などと用途別に器種分類した。個々の分類規準に関しては、以下に掲げた。

① 食膳具

原則として食事をする際に使用する器。碗類・皿類・鉢類などがある。

碗類一 底部から湾曲して立ち上がるもの。使用時に口に付けるため手軽に手に持てる大きさと重量であるもの。材質は陶器・磁器質のものが中心である。装飾は主文様を外面部部に描く。飯碗・茶碗・小坏・猪口・湯呑など多種におよぶ。また、肥前磁器碗は、文様の描き方、高台つくりの特徴から有田町で生産された高級品と波佐見町周辺で生産された量産品に分けられる。京焼系陶器碗と肥前磁器碗については、器形の特徴から細かく分類した⁴。

京焼系陶器碗の分類基準は、丸碗・平碗・筒型碗・小杉碗・端反碗に分けた（表1-⑩）。肥前磁器碗の分類基準は器形以外に⁵、高台及び口縁部の特徴から、初期伊万里碗・高台無釉碗・腰張筒型碗・高台U字高台径広碗・高台U字高台径狭碗・高台U字高台高低・くらわんか手碗・半球碗・腰張碗・筒型碗・望料碗・小広東碗・広東碗・端反碗・うがい碗・小丸碗・湯呑み碗に分けた（表1-⑩）。但し、上記に分類できないものは「碗」と分類した。

皿類一 底部から湾曲して立ち上がり、見込みが浅いもの。口径：高台径の値は3：2のものが多い。装飾は、内面に主文様を描く。大きさは口径5cm前後、10～12cm前後、15cm以上に大別される。また、肥前磁器皿は、碗と同様に、文様の描き方、器形の特徴から有田町で生産された高級品と波佐見町周辺で生産された量産品に分けられる。材質は土器・陶器・磁器がある。

⁴ 分類・名称は執筆者の基準による。

⁵ 4と同じ。

また、肥前磁器皿については、さらに細かく器形分類した。分類基準は器形以外に高台作りの特徴から⁶、初期伊万里皿・高台三角皿・蛇ノ目釉剥ぎ高台無釉皿・U字高台皿・蛇ノ目釉剥ぎ高台径小皿・U字高台器厚皿・蛇ノ目高台高皿・深皿に分けた(表1-⑪)。但し、上記に分類できないものについては「皿」に入れた。

鉢類一 底部から湾曲して立ち上がり、碗・皿類を除いたもの。器形は輪花型や八角型など多種に及ぶ。装飾は、内面に主文様を描くものが多いが、外面に描くものもある。また、段重・蓋物もこれに属する⁷。材質は陶器・磁器がある。

② 調理具

食べものを調理するための道具で、鍋類・鉢類・水注・瓶類がある。

鍋類一 鉢形で、底部からの加熱に耐えるように薄手に作る。材質が陶器の場合は、外面底部は無釉で、内面から外面体部にかけて施釉する。土鍋・行平・焙烙があり、土鍋は木蓋を伴うため口縁部を施釉するが、行平は陶器質の蓋を伴うため無釉である。材質は、土鍋は土器・陶器、行平は陶器、焙烙は土器である。

鉢類一 鉢形で、内面に挿目が施される挿鉢と挿目のない捏ね鉢がある。材質は、土器・陶器・磁器がある。

水注類一 水を注ぐもので、急須・土瓶などがある。土瓶は底部からの加熱に耐えるように薄手に作る。急須は加熱しないが、土瓶は加熱するため底部に煤が付着するものがある。急須・土瓶ともに外面体部に施釉するが、体部内面、底部外面は無釉である。材質はそれぞれ陶器・磁器のものがある。

瓶類一 袋状の器形で、内面無釉を呈し、徳利・爛徳利がある。材質は陶器と磁器がある。

③ 貯蔵具

物を保管する器種で、甕類・壺類・瓶類がある。

甕類一 底部から湾曲して立ち上がり、わずかに肩部をもつもの。大きさは器高が 15cm～30cm 前後のもの、器高が 30cm 以上のものに大別され、前者のものは内面に白い付着物があるものが多く、便甕として使用したと考えられる。後者は肩部に「二石入り」「三石入り」などの刻印を施すものがあり、水などの貯蔵用に使用したと思われる。

⁶ 4と同じ。

⁷ 段重・蓋物については、江戸時代の文献資料や絵画資料をみると行楽時の祝宴時の容器や食べ物を入れる容器として使用する一方で、白粉入れなどの化粧具として使用される例もある。出土資料の場合、内容物が残存していない限り、特定は困難である。ただ、比較的大型のものは食膳具として、一方、小型のものは化粧具として使用されることから、口径 15cm 以上のものは食膳具とし、それ以下のものは調度具に分類した。

壺類— 底部から湾曲して立ち上がり、肩か頸部をもつ。器高が 20cm 以上のものが中心。
材質は陶器がある。

瓶類— 袋状の器形を呈するもの。貯蔵具に分類されるものとして中瓶・大瓶がある。材質は陶器・磁器がある。

④ 調度具

食膳具・調理具以外の日常に使う道具。皿類・鉢類・焜炉類・壺類・器台類がある。

皿類— 皿形で、口縁部に煤が付着するものは灯明皿と考えられる。灯明皿は見込みに灯芯を受ける受けをもつものもある。大きさは時代によって異なるが、口径が 5 cm 前後、10cm 前後、15cm 以上のものに大別される。材質は土器・陶器がある。この他、紅皿がある。材質は磁器のみで、見込みに紅が残るものが多い。

鉢類— 材質・器形および付着物の組合せから、口縁に灯火芯を残すものは乗燭・蠟燭立・瓦灯などの灯火具、土器で内面に煤が付着するものは火鉢・火入れなどの暖房具、陶磁器で内面無釉のものは香炉がある。それ以外に、仏飯具・餌鉢・植木鉢・段重・蓋物・鬢水入れなどの嗜好品が含まれる。材質は土器・陶磁器がある。

焜炉類— 基本的に無釉。内面に煤が付着し、内面体部に鍋や土瓶を支える受けを施すもの。材質は土器である。

壺類— 底部から湾曲して立ち上がり、肩か頸部をもつ。油壺・お歯黒壺・火消壺がある。材質は土器・陶磁器がある。

瓶類— 袋状の器形で、内面無釉を呈するもの。神仏具のお神酒徳利・仏花瓶・花瓶などがある。材質は陶器・磁器がある。

水注類— 器面の 1ヶ所に穿孔を設けているもの。文具の水滴。

器台類— 容器などを上部に乗せるもの。有脚灯明台が属し、材質は土器・陶器がある。

5 装飾

施釉陶器・磁器には器面に釉薬で文様を施す。陶磁器は釉薬のみ、文様を施したものは下絵付けし透明釉をかけているものと、上絵付けしたものなど様々である。その装飾に分類基準を設けたが、すべての遺物を細かく分類してもかえって複雑になるだけであるが、分類することによって意味があると考えたものについては細かく分類した。

① 釉薬

藁灰釉・天目釉。

② 絵付

銚絵・銚絵染付・鎧文・掛分・織部・絵唐津・刷毛目・三島手・二・三彩手・呉器手・京焼風陶器・蛸手・内野山・ピラカケ・貫入・染付・青磁染付・色絵・太白・陶胎染付。

以上の分類基準に従い計測を行なった。なお、数量の算出方法については、網羅的に算出できる破片計測方法を採用した。また、灯火具、神仏具、化粧具、文具に属するものの数値が1%未満であるため、個別の説明が必要な場合以外は、灯火具、化粧具としてまとめて表示した。

第2節 近畿地方の出土状況（第1図）

近畿地方の江戸時代は、摂津、河内、和泉、山城、近江、伊賀、伊勢、志摩、大和、紀伊、丹波、丹後、播磨、但馬などにわかれる。

近世遺跡は、大坂城跡・大坂城下町跡を中心に堺環濠都市遺跡、京都など近世の大都市や摂津の伊丹郷町遺跡、播磨の明石城武家屋敷跡、姫路城跡など地方都市でも活発に調査されている。ただ、広域に調査する例は少なく、建物の建て替えによる調査が中心なものと調査条件の制約から層位的に実施する例は少なく、そのため江戸時代を通して土器・陶磁器の変遷がわかる遺跡は限られる。そのような状況ではあるが大坂城跡・大坂城下町跡や伊丹郷町遺跡などで詳細な遺物検討がされている。それ以外の遺跡でも時代は限られるが一括性の高い遺構をいくつか計測分析できたので、それらを中心に近畿の状況を検討する。

1 大坂城跡・大坂城下町跡（第1・2図 - 1）

大坂城跡・大坂城下町跡（以下、大坂城跡と略す）は大阪府大阪市に所在する。戦国時代の石山本願寺寺内町に始まり、豊臣期には政権の中心地となり、元和元年（1615）の大坂夏の陣以降は、江戸時代は商業都市として栄える。発掘調査は三の丸内を中心に始められたが、近年では商業の中心地であった船場地域まで範囲を広げている。

また、大坂城は江戸時代の三大都市の1つであり、近畿の他遺跡とは異なり人口が多く、調査地点によって身分・経済格差による遺物の様相が大きく異なると想定される。そのため広範囲の資料を分析し、遺跡の特徴を見出せる資料を提示する。

① 17世紀代

16世紀末～17世紀前期

OJ92-18SK505 は元和元年（1615）の大坂夏の陣に伴う廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 31%、瓦質土器 1%、備前焼 4%、丹波焼 2%、信楽焼 0.4%、軟質施釉陶器 6%、瀬戸美濃陶器 15%、肥前陶器 16%、中国製磁器 22%、朝鮮王朝陶磁器 2.6%と土師質土器が一番高く、これに中国製磁器、瀬戸美濃陶器、肥前陶器などの施釉陶器・磁器が続く（第3図）。用途別組成は食膳具 86%、調理具 7%、貯蔵具 1%、調度具 6%と食膳具が半数以上を占める（第4図）。

この時期の大きな特徴としては肥前陶器の出現である。大坂城跡は慶長3年（1598）の三の丸築造に伴う盛土が各所で検出し、その下層及びそれに伴う遺構を豊臣前期、その上層から大坂夏の陣に伴う火災層までを豊臣後期と時期区分している。豊臣前期に属する遺構では肥前陶器はほとんど出土しない。それが盛土直上層の豊臣後期の遺構では一気に出土量が増え、産地別組成において肥前陶器が中国製磁器や瀬戸美濃陶器と近接する比率にまで上がる。また、地点によっては肥前陶器が先の陶磁器より高い比率を示す場合もあり、この時期に一気に流入したことがわかる。

また、大坂夏の陣後で 1620 年代前期と考えられる **AZ87-5SX201** の産地別組成をみると（土師質土器・瓦質土器省く）、備前焼 13%、丹波焼 5%、瀬戸美濃陶器 9%、肥前陶器 48%、上野・高取焼 0.15%、中国製磁器 18%、朝鮮王朝陶磁器 0.05%と肥前陶器はさらに比率を上げており、17世紀初頭以降、上昇することがわかる（第3図）。

土師質土器は皿・羽釜・焙烙・焼塩壺・甕・火入れが出土する。このうち皿が圧倒的に多く、成形は手づくねが中心である。胎土の色調や詳細な成形方法からいくつかに分類されるが遺跡全体に共通するものが少ないため、小さな分布圏がいくつもあったと想定できる。羽釜は大和型が多いが播磨型も若干含まれる。

焼締陶器は、豊臣前期では丹波焼、信楽焼は僅かで備前焼が多い。しかし、豊臣後期に属する **OJ92-18SK505** の状況を見ると備前焼 4%、丹波焼 2%と丹波焼が若干増えている（第3図）。さらに、**AZ87-5SX201** では備前焼 13%に対して、丹波焼 10%と比率幅は縮まる。備前焼、丹波焼などの焼締陶器の主な器種は播鉢・甕である。また、**OJ92-18SK505** や **AZ87-5SX201** などでは、大平鉢や水指などの「桃山陶器」に分類され高級品も含まれる。また、先に上げた遺構では出土していないが、道修町や伏見町などの城下町では東南アジア陶器の長胴壺が出土する。

施釉陶器・磁器は肥前陶器の主な器種は碗・皿などの食膳具である。これの出現により豊臣前期では食膳具が 50%を示すが、豊臣後期には 86%と比率が上昇し、これは陶磁器の用途別組成に大きな影響を与える（第4図）。肥前陶器以外には瀬戸美濃陶器、上野・高取焼、中国製磁器、朝鮮王朝陶磁器が出土する。瀬戸美濃陶器は OJ92-18SK505 や AZ87-5 SX201 では量産品の皿や天目碗が目立ったが、黄瀬戸・志野焼・織部焼などの「桃山陶器」と呼ばれる上質の鉢も一定量出土する。上野・高取焼は他の産地に比べると少ないが皿・鉢・瓶類がみられる。中国製磁器、朝鮮王朝陶磁器は碗・皿が多く、道修町や伏見町などの町屋、三の丸内の武家屋敷においては施釉陶器・磁器組成でこれらが高い比率を示す場合もある。

17 世紀前期～中期

大坂夏の陣の火災後、1630～40 年代の資料と考えられる OJ92-18SK330 の産地別組成をみると（第3図）、土師質土器 38.6%、備前焼 3.2%、丹波焼 5%、信楽焼 0.3%、軟質施釉陶器 0.2%、瀬戸美濃陶器 2.7%、肥前陶器 34%、上野・高取焼 1%、東南アジア陶器 3%、中国製磁器 5%、肥前磁器 7%と、前代まで中心であった土師質土器と肥前陶器が近接する値となり、さらに施釉陶器・磁器の占める割合が多くなる。用途別組成をみると食膳具 72%、調理具 15%、貯蔵具 8%、調度具 5%と食膳具の比率が高い（第4図）。

土師質土器は前代と組成に変わりなく、皿を中心とし、羽釜・焙烙などの土鍋類が出土する。また、焙烙がこの時期には羽釜より出土量を増やす。皿は手づくねが多く、数値は出せなかったが灯火芯を残すものが多い。羽釜は、播磨型はほとんど見られず大和型が中心である。焙烙の器形は難波分類の A 類・D 類である。焼締陶器は前代までは備前焼が主体であったが、本時期には丹波焼に移行する。これらの主な製品は播鉢・甕であるが、この中で丹波焼播鉢の比率が突出しており、これにより主体が変わったと考えられる。また、これら産地では「桃山陶器」に分類する鉢や水指なども出土する。

施釉陶器・磁器は、肥前陶器が産地別組成でさらに比率を上げる。また、本時期から肥前磁器が出現し、中国製磁器や瀬戸美濃陶器より比率が高い。肥前磁器の主な器種は碗・皿などの食膳具で、その組成では肥前陶器 46.5%、肥前磁器 10%とこれら肥前産の製品で半数以上を占める（第5図）。その一方、前代まで一定量出土した中国製磁器や瀬戸美濃陶器は比率を下げる。さらに、1640～50 年代と考えられる OJ92-33. 6 層では施釉陶器・磁器の比率をみると瀬戸美濃陶器 9%、肥前陶器 51%、中国製磁器 14%、肥前磁器 26%で、肥前陶器が依然として高い比率であるが SK330 段階と比べると陶器と磁器の比率幅

が縮まる。1650～1660年代と考えられる OJ92-15. 5層では瀬戸美濃陶器 9%、肥前陶器 51%、中国製磁器 16%、肥前磁器 24%と続き、OJ92-33. 6層の組成と大きな変化がない(第3図)。したがって、これら施釉陶器・磁器の主な器種は碗・皿・鉢などの食膳具であることから、施釉陶器・磁器の食膳具の主体が陶器質と磁器質が近接する様相に変化することが明らかである。但し、地点によって中国製磁器が肥前陶器を上回るか近接した比率を示す地点もある。

② 18世紀代

17世紀後期～18世紀前期

この時期には、産地別組成において大きな変化がみられる。広島藩蔵屋敷跡 SK2018の産地別組成を見てみると土師質土器 46%、備前焼 1.8%、丹波焼 3%、堺・明石焼 2%、軟質施釉陶器 0.08%、瀬戸美濃陶器 3.2%、肥前陶器 12%、京焼系陶器 3.1%、中国製磁器 0.02%、肥前磁器 32%と土師質土器が一番高い比率を示す(第3図)。これは皿・焙烙などの破損が著しかったためで、個体数では肥前磁器が半数近い比率を示し、本時期には肥前磁器を中心とする組成に変わる。用途別組成は食膳具 52%、調理具 17%、貯蔵具 3%、調度具 28%と食膳具が大半を占める(第4図)。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・ミニチュア土製品などが出土する。皿はロクロ成形が中心で、多くには灯火芯が残る。焙烙の器形はすべて難波分類のD類である。また、この時期には羽釜は減少する。軟質施釉陶器は皿・鉢などがあり、皿は灯火芯を残すものが多く、灯火具として使用したと思われる。但し、具体的な数値は示せないが灯火具の主体はあくまで土師質土器皿である。

焼締陶器は備前焼、丹波焼、堺・明石焼が出土し、丹波焼が高い比率を示す。これらの主な器種は前代と変化なく播鉢・甕である。播鉢は調理具組成をみると堺・明石焼 12.4%と独占する(第6図)。ただ、本遺構では堺・明石焼播鉢が多いが、旧中央体育館 SK705をはじめとする同時期の遺構では丹波焼播鉢が 80%を示す。甕は貯蔵具組成をみると丹波焼甕 75%と依然として比率が高い(第7図)。

施釉陶器・磁器は、肥前磁器が圧倒的に高い比率を示す(第3図)。主な器種は碗・皿などの食膳具で、その組成では 53%まで上昇し、本時期にこれが大量に受容されたことにより、産地別組成で高い比率を示したことがわかる。また、食膳具以外の瓶類や香炉などの調度具も本時期に増加しており、これらの影響もあったと考えられる。肥前磁器に次ぐ

のが肥前陶器である。肥前磁器の増加により前代より比率を下げるが器種組成に大きな変化はなく碗・皿などの食膳具が主に出土する。この他に瀬戸美濃陶器、京焼系陶器がある。瀬戸美濃陶器は伝世品と考えられる「桃山陶器」、御深井の皿や鬚水入れなどが僅かに出土する。京焼系陶器も比率は低く碗がみられる。

18世紀前期

本時期の資料は享保9年(1724)の妙知焼の火災関係資料がある。旧中央体育館SK764の産地別組成は土師質土器14%、丹波焼3%、堺・明石焼4%、軟質施釉陶器1%、肥前陶器13%、肥前磁器65%と、肥前磁器が本時期でも大半を占める(第3図)。用途別組成は食膳具73%、調理具16%、貯蔵具4%、調度具7%と食膳具が多い(第4図)。

土師質土器の器種は皿・焙烙・火鉢が中心で、その様相は前代と大きな変化はない。軟質施釉陶器は皿が主な器種で、その多くに灯火芯がみられる。焼締陶器は丹波焼、堺・明石焼がある。丹波焼の主な製品は甕である。播鉢は調理具組成をみると堺・明石焼35%のみで、播鉢の主体は丹波焼から堺・明石焼へ移行する(第6図)。但し、甕については依然として丹波焼甕が高い比率のため、その出土量に大きな影響がなかったと考えられる。

施釉陶器・磁器は先に述べた通り、肥前磁器が産地別組成で高い比率を示し、その比率は前代より上昇する(第3図)。主製品は碗・皿で、それらのタイプをみると長崎県波佐見町周辺で生産された量産品の「くらわんか手」が出現し、高級品碗が40%に対して「くらわんか手」60%と後者が多く、この量産品の受容増大により、前代より全体量がさらに増えたと考えられる。

但し、「くらわんか手」碗・皿は地点によってその比率は異なる。その状況を見てみると、住友銅吹所跡の妙知焼に伴う焼土層の産地別組成では、京焼系陶器3%、中国製陶器0.2%、その他国産陶器1.8%、中国製磁器58%、肥前磁器37%で、中国製磁器が高い比率を示す(第9図)。用途別組成は食膳具94%、貯蔵具1%、調度具5%と食膳具が大半を占める(第10図)。

高い比率である中国製磁器は碗・皿・鉢などの食膳具をはじめとして、蓋物・瓶類などの調度具がある。食膳具については多くは組物である。製品は明末清初の青花大皿・鉢を含むが、大半は清朝磁器の色絵で最新の製品を受容する。次に続く、肥前磁器も器種組成は中国製磁器と共通し、装飾も色絵が大半でしかも金襴手が目立ち、当時の最新・最高級の製品が出土する。したがって、大坂城跡では本時期に肥前磁器の量産品が多量に受容される一方で、高級品の陶磁器を受容する地点もあり、地点によって陶磁器の品質に受容差

があった。

18 世紀中期～18 世紀後期

NW04-1 SK603 は廃棄土坑である。産地別組成をみると土師質土器 33%、瓦質土器 0.2%、備前焼 0.9%、丹波焼 10%、信楽焼 0.8%、堺・明石焼 7%、瀬戸美濃陶器 1%、肥前陶器 6%、京焼系陶器 15%、中国製磁器 0.1%、肥前磁器 23%と、土師質土器・肥前磁器が依然として高い比率を示す（第3図）。これらに続くのが京焼系陶器で17世紀末～18世紀前期より比率が倍増する。用途別組成は食膳具 41%、調理具 31%、貯蔵具 3%、調度具 25%にわかれる（第4図）。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・焼塩壺・ミニチュア土製品などが出土する。焙烙の器形は難波分類のD類のみで、瓦質土器は火鉢・焔炉などが主体である。軟質施釉陶器は前代と変わらず灯火具の皿・受皿が出土する。焼締陶器は、丹波焼が依然として出土量が多い。前代まで一定量出土した播鉢は、調理具組成をみると堺・明石焼 25%、丹波焼 1.8%で堺・明石焼播鉢が主体となる（第6図）。さらに、前代では甕も丹波焼が独占したが信楽焼が本時期から出現する（第7図）。このように丹波焼播鉢・甕の比率が各用途別組成で下降する中で、徳利がこの時期から急増し、丹波焼の主製品となる。徳利のタイプは体部に屋号を釘彫りした「貧乏徳利」と呼ばれるもので、この徳利が丹波焼の主製品となる。備前焼はこの時期にはごく僅かに匣鉢型の鉢が出土する。

施釉陶器・磁器は肥前磁器が産地別組成で一番高い比率であり、組成は食膳具の碗・皿を中心とし、その状況は前代と大きな変化はない。肥前陶器は碗・鉢などの食膳具が出土するが前代より比率を下げる。その一方で京焼系陶器は比率を上げる。主な器種は碗・土瓶・土鍋である。碗の器種は丸碗・筒型碗・半筒碗・小杉碗と多種となり、陶器碗では肥前陶器碗より比率が高い。また、土瓶・土鍋などの調理具も本時期から一気に急増する。

③ 19 世紀代

18 世紀後期～19 世紀前期

NW04-1 SK01 は大型の廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 9%、瓦質土器 1%、備前焼 0.7%、丹波焼 9%、信楽焼 0.9%、堺・明石焼 3%、軟質施釉陶器 3.2%、瀬戸美濃陶器 2.8%、肥前陶器 0.7%、萩焼 0.4%、京焼系陶器 46%、大谷焼 0.15%、中国製磁器 0.1%、ベトナム磁器 0.02%、肥前磁器 21%、瀬戸美濃磁器 2%、京焼系磁器 0.03%と、前代まで産地別組成で高い比率であった肥前磁器に変わり京焼系陶器が主体となる（第

3 図)。用途別組成は食膳具 27%、調理具 53%、貯蔵具 3%、調度具 17%と調理具が食膳具より上回る比率となる（第 4 図）。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・火鉢・焜炉が出土し、前代まで一定量出土していた皿は減る。焙烙の器形は難波分類の D 類と F 類である。瓦質土器は前代と同様に火鉢と焜炉類が多い。軟質施釉陶器は灯火具の皿・受皿が主に出土する。焼締陶器は本時期でも丹波焼が主体である。主な器種は徳利・甕・鉢で、徳利は調理具組成をみると丹波焼 14%、備前焼 0.4%と丹波焼徳利が多い（第 6 図）。播鉢は調理具組成をみると堺・明石焼が 5%と依然として高い比率で、丹波焼は 0.15%と僅かである（第 6 図）。甕は貯蔵具組成をみると信楽焼 32%、丹波焼 30%と信楽焼甕がやや高い比率を示す（第 7 図）。

施釉陶器・磁器は、京焼系陶器以外は前代と比べてやや比率が下がる。これは萩焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などの新たな産地が出現し、陶磁器の全体量が増えたためである。その一方で、京焼系陶器に影響がないのは、器種が多様化するためである。前代までの碗・土瓶・土鍋などの急増に加えて、灯火具が出現・急増し、さらに、餌鉢や火鉢などの多器種の調度具が出現するためである。この京焼系陶器の急増に対して、一番影響を受けるのが土師質土器で、主体であった焙烙・灯火具が京焼系陶器の増加により激減する（第 8 図）。

19 世紀中期

NW04—SD04 は大型の廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 5.2%、丹波焼 4.4%、信楽焼 0.8%、堺・明石焼 1.2%、瀬戸美濃陶器 7%、肥前陶器 4%、京焼系陶器 37%、ヨーロッパ磁器 0.4%、肥前磁器 37.4%、瀬戸美濃磁器 1.6%と前代と大きな変化はない（第 3 図）。用途別組成は食膳具 50%、調理具 34%、貯蔵具 8%、調度具 8%である（第 4 図）。

土師質土器や瓦質土器は前代と大きな変化はなく、火鉢・焜炉などが調度具組成で高い比率を示す（第 8 図）。焼締陶器は丹波焼が高い比率を示す（第 3 図）。主な製品は徳利・甕である。徳利は前代と変わらず「貧乏徳利」が多い（第 6 図）。甕は貯蔵具組成をみると丹波焼 59%、信楽焼 10%と丹波焼甕が高いが、同時期の遺構では信楽焼、大谷焼などが高い場合もあり、遺構によって異なる（第 7 図）。播鉢は調理具組成で堺・明石焼 2%のみである（第 6 図）。

施釉陶器・磁器は肥前磁器、京焼系陶器を中心とする。特に、京焼系陶器は土瓶・土鍋類などの調理具がその組成で前代よりさらに比率を上げる。これは 19 世紀前期から出現する行平の急増の影響による（第 6 図）。肥前磁器は食膳具・調度具を主体とする。また、食膳具組成が示すように、他産地が出現しても、前代と大きな変化がないことがわかる（第

5図)。

④ 小結

大坂城跡は、江戸時代、江戸・京都と並ぶ三大都市に上げられるように、人口が多く、いろいろな階層の人が居住する。この大坂城跡の土器・陶磁器の様相は、江戸時代を通して施釉陶器・磁器を中心とする組成で、土師質土器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、京焼系陶器、中国製磁器、肥前磁器などは出土量に変動はあるが各時代で出土した。用途別組成は常に食膳具が高い比率であり、これを主に受容したことがわかる。大まかな状況をまとめると以下の通りである。

17世紀代の土器・陶磁器の組成は、16世紀末～17世紀初頭に肥前陶器が出現・急増し、それまでの土器・焼締陶器が多い組成から施釉陶器・磁器に主体が変わる。また、器種も播鉢・甕などの調理具・貯蔵具から碗・皿などの食膳具が中心となる組成に変化する。それは17世紀前期に肥前磁器が出現すると同時に、産地別組成で施釉陶器・磁器の比率がさらに高くなっていった。また、肥前磁器が出現すると、食膳具は陶器と磁器が近接する組成となる。このように17世紀前期の肥前陶器、肥前磁器の出現により、土器・陶磁器組成が変化し、その影響によって土師質土器、焼締陶器は急激に減少する。

土師質土器は皿・羽釜・焙烙などの鍋類を中心とし、17世紀初頭までは産地別組成で一番高い比率を示すが、17世紀前期以降は下降する。また、17世紀前期から皿は灯火芯を残すものが目立ち、食膳具よりは灯明皿として使用される。鍋も羽釜は17世紀前期を境になくなり、焙烙が主体となる。瓦質土器も同様に17世紀前期以降、出土量は減り、器種も暖房具が僅かにみられる程度となる。

焼締陶器は、備前焼、丹波焼、信楽焼が出土し、播鉢・甕などが主に出土する。16世紀末～17世紀初頭までは備前焼が高い比率であったが、17世紀前期以降は丹波焼が中心となる。この丹波焼の急増は播鉢によるものであり、甕については17世紀中期まで備前焼と競合する。

施釉陶器・磁器は、先の通り肥前陶器、肥前磁器の食膳具を中心とし、その出土量も増加するが、その一方で中国製磁器、瀬戸美濃陶器は減少していく。中国製磁器は17世紀前期までは地点によっては施釉陶器・磁器で一番高い比率を示すが、17世紀後期には下降する。瀬戸美濃陶器は、肥前陶器が出現するまでは国産の施釉陶の中心であった。主な器種は肥前陶器と同様に食膳具の碗・皿である。17世紀初頭～17世紀前期までは、いわゆ

る「桃山陶器」に分類される志野焼・織部焼の懐石具・茶器を初めとして、見込みに目痕を残す量産品の皿も多く出土する。また、碗は天目碗が中心で、17世紀前期に他の器種が激減しても天目碗については17世紀後期まで出土する。上野・高取焼は播鉢・甕などの日用品をはじめ「桃山陶器」に分類される茶陶器も含むが、他の産地に比べると僅かであり、17世紀前期以降は激減する。

18世紀代に至ると、産地別組成は土師質土器、丹波焼、肥前陶器、肥前磁器が中心で、特に肥前磁器は17世紀代より比率が上昇し、産地別組成で高い比率を示す。主な器種は前代と同様に碗・皿などの食膳具であり、その比率は全体の50～60%台にまで及ぶことから、肥前磁器の食膳具の増加により、比率を上げたことがわかる。食膳具以外に化粧具や文具などの調度具もこの時期から増え始める。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢を中心とし、皿は灯火具としての受容がさらに増える。焙烙も17世紀代より出土量が増え、調理具組成での比率を上げる。焼締陶器は丹波焼を主体とし、前代まで比率が高かった備前焼は激減する。丹波焼の主な製品は播鉢・甕で、このうち播鉢については17世紀後期～18世紀前期をピークに高い比率を示すが、堺・明石焼播鉢の出現・急増によって18世紀前期には激減し、主体は堺・明石焼に移行する。甕については17世紀代と変わらず丹波焼が独占する。ただ播鉢が激減するが全体量に変動しないのは18世紀後期に急増する「貧乏徳利」の出現による。これによって17世紀後期から続く焼締陶器での高い比率をキープする。

肥前陶器は17世紀前期～18世紀前期まで一定量出土する。主な器種は碗・鉢・皿などの食膳具で、これらの器種は肥前磁器も同じである。その中で、碗・鉢については、器形をみると磁器製品と競合関係が認められないため、使い分けしていたと考えられる。それが18世紀前期に京焼系陶器碗の出現・急増により、肥前陶器の出土量が6%台まで激減する。ただ、18世紀後期以降、産地別組成で0.7～4%と僅かではあるが出土し続けるのは鉢の存在である。鉢は京焼系陶器に少ないものであり、競合を避けるもののみが出土したと考えられる。

この他、中国製磁器は17世紀代よりさらに出土量が激減し、明末清初の伝世品と考えるものが主に出土する。ただ、道修町の豪商屋敷跡や住友銅吹所跡などの屋敷跡では清朝磁器が大量に出土しており、出土する地点の性格によっては多く出土する。瀬戸美濃陶器は3%まで落ち込むが、18世紀後期までこの比率を保つ続ける。主な製品は碗で、これ以外には鬚水入れや水滴などの調度具が僅かに出土する。18世紀後期に至ると、これらに加

えて水鉢や火鉢などの大型製品が出現し、19世紀中期には7%台まで比率を上げる。

19世紀代には土師質土器はさらに激減し、施釉陶器・磁器の比率がさらに増える。主な産地は丹波焼、京焼系陶器、肥前磁器が高い比率を示す。用途別組成では食膳具が依然として高いが19世紀前期には調理具が食膳具を上回る。また、調度具も増加し、先の器種に続く一方で貯蔵具は下降する。

土師質土器は先に述べた通り減少する。それは陶磁器全体が増加したことにもよるが、18世紀代まで主製品であった皿・焙烙が激減するためである。皿は軟質施釉陶器や京焼系陶器の灯火具の急増、焙烙は京焼系陶器の煮沸具の増加によるものである。ただ、これに連動するように火鉢・焜炉類などが急増しており、一定量が保たれるのはこのためである。

焼締陶器は、18世紀後期と大きな変化はないが、19世紀中期に大谷焼が出現すると、丹波焼、信楽焼と競合する。

施釉陶器・磁器は先の通りに肥前磁器、京焼系陶器を中心とする。19世紀前期に萩焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器が出現するが、先の産地には大きな影響は与えない。この時期の大きな特徴としては京焼系陶器の急増である。京焼系陶器は、18世紀前期は碗類を中心とし、18世紀後期以降、調理具・調度具の器種が多様化する。その影響で18世紀後期に比率を上げ、特に調理具や調度具は18世紀末～19世紀前期に急増し、これによって用途別組成で比率を上げる。ただ、食膳具については肥前磁器が依然として中心である。

この他、瀬戸美濃陶器は18世紀後期と大きな変化はなく、全体量は少ないが大型製品が主に出土し、肥前陶器も同様に鉢が僅かに出土する。また、上野・高取焼や萩焼も食膳具や播鉢なども僅かに出土するが、一遺構に必ず出土するものではなく全体量は少ない。

磁器については瀬戸美濃磁器、京焼系磁器が出現する。瀬戸美濃磁器は幕末にかけて出土量が増すが、肥前磁器を上回る比率には至らない。主な器種は碗・皿である。京焼系磁器も出土量は僅かで肥前磁器、瀬戸美濃磁器とは器種が異なり調度具を中心とするが量は少ない。

以上のように、大坂城跡は、多産地の製品が出土し、肥前磁器以外は、常に多くの産地が競合する。これは大都市としての特徴なのかもしれない。

2 伊丹郷町遺跡（第1・68図 - 1）

伊丹郷町遺跡は兵庫県伊丹市の南東に位置する。江戸時代、酒造業により発展した在郷町である。これまで300数次を超える発掘調査が行われており、全国的にみてもこれだけ

広範囲に町屋を調査した例は少なく、近世の町屋の様相を知る上で重要な資料を提供する遺跡の一つである。

伊丹郷町遺跡では、実年代資料や層位的検証及び遺物組成から、時期区分しており、この時期区分ごとに土器・陶磁器の分析結果を述べる。

① 17世紀代

16世紀末～17世紀前期

第 51 次調査 B-2-1 区 SK479 は廃棄土坑である。産地別組成を比率の高い順に配列すると肥前陶器 48%、丹波焼 24%、土師質土器 18%、備前焼 5%、瀬戸美濃陶器 5% と続く (第 14 図)。用途別組成は食膳具 57%、調理具 33%、貯蔵具 5%、調度具 5% にわかれる (第 15 図)。

本時期は出土量自体が少なく、遺構によって、その組成は大きく偏る。SK479 では肥前陶器が半数近い比率であるが、土師質土器、備前焼の比率が高い遺構もあり、傾向としては 3 産地が拮抗する。

土師質土器の器種は皿のみ。同時期の遺構では羽釜・播鉢などが出土するが少ない。皿は手づくね成形のみ。焼締陶器は備前焼、丹波焼で、16 世紀後期までは常滑焼や信楽焼がごく僅かに出土するが、本時期では殆ど出土しない。個別の状況は、本遺構では丹波焼は備前焼より高い比率であるが、同時期の遺構でも同じ傾向であり、この時期には有岡城期で焼締陶器の主体であった備前焼から丹波焼に移行する。これらの主な器種は播鉢・甕である。播鉢は調理具組成をみると丹波焼のみである。同時期とする第 123 次 D-7 区 SK622 では備前焼 80%、丹波焼 20% と備前焼播鉢が高い比率を示し (第 17 図)、本時期の播鉢組成は両産地が拮抗すると考えられる。甕は貯蔵具組成では丹波焼のみで (第 18 図)、他産地は出土していない。この他に、大平鉢や鉢なども同時期の遺構から出土する。

施釉陶器は肥前陶器が多く、瀬戸美濃陶器は僅かに出土する。品質は各産地とも量産品が中心で、ただ、主幹通りに面した屋敷では、絵唐津皿・鉢や志野焼鉢などの「桃山陶器」に分類されるものが出土する傾向にあり、地点によって器種組成が大きく異なる。主な器種は肥前陶器が皿、瀬戸美濃陶器は天目碗である。

17世紀前期～17世紀後期

本時期に至ると、遺物量が急増する。前代まで、土器・陶磁器の中心であった備前焼・丹波焼などの焼締陶器は激減し、特に備前焼は顕著に現れる。

第 86 次調査 B-12 区 SK66 は廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 67%、瓦質土器 1%、丹波焼 2%、肥前陶器 20%、中国製磁器 0.1%、肥前磁器 9.9%と土師質土器が高い比率である（第 14 図）。これは焙烙の破片が著しいためこのような数値だが、個体数で表示すると土師質土器 42.93%、肥前陶器 55%と施釉陶器が多い。中国製磁器は前代より比率が減り、備前焼や瀬戸美濃陶器なども出土しておらず中世に高い比率を示した遺物は本時期には激減する。用途別組成は食膳具 65%、調理具 30%、貯蔵具 2%、調度具 3%で食膳具が半数以上を占める（第 15 図）。

土師質土器は皿・焙烙が出土する。皿は手づくね成形のみで、灯火芯を残すものが多い。焙烙はこの時期から出土量が増え、器形は難波分類の A 類と D 類がある。焼締陶器は丹波焼のみで、前代と比べると丹波焼の比率は下降し、同時期の遺構でも 10%以下を示す。これは肥前磁器などの施釉陶器・磁器の比率が上がるためである。丹波焼の主な器種は播鉢・甕で、これらの器種では独占する。備前焼は瓶類や鉢などの小型製品が僅かではあるが出土する。

施釉陶器・磁器は肥前陶器が主体で、産地別組成でも一番高い比率を示し本時期に増加したことがわかる（第 14 図）。主な器種は碗・皿・鉢などの食膳具である。これらは見込みに砂目積みを残す量産品が多く、他に刷毛目や三島手を施す鉢も出土し、これらの受容拡大により比率が上がったと考えられる。肥前磁器は肥前陶器と比べると少ないが、食膳具を中心に出土する。主な器種は皿で碗は少ない。器形は 1637 年の窯場統合後の製品が多い。中国製磁器は食膳具の皿と鉢が出土し、景德鎮窯の青花と漳州窯系の青花が出土する。また、本遺構では出土していないが瀬戸美濃陶器は天目碗を中心とし、志野焼・織部焼皿が極僅かに出土する程度となる。このように施釉陶器・磁器は食膳具を主体とすることから、用途別組成でのこの比率が上がるのは施釉陶器・磁器の増加によると考えられる。

② 18 世紀代

特徴としては、肥前磁器の急増である。前代まで産地別組成の主産地であった肥前陶器は激減し、これに変わり肥前磁器が中心となる。

17 世紀後期～18 世紀前期

この時期の遺構として元禄 12 年（1699）もしくは元禄 15 年（1702）の火災に係る遺構が多数ある。第 123 次調査 D-7 区 SX01 は醸造遺構で埋土から被災した陶磁器が

大量に出土した。

産地別組成は土師質土器 37%、備前焼 7%、丹波焼 10%、堺・明石焼 1%、軟質施釉陶器 2%、瀬戸美濃陶器 1%、肥前陶器 11%、肥前磁器 32%と肥前磁器の比率が上がる（第 14 図）。本遺構も焙烙の破損が著しいため土師質土器の比率は高いが、個体数でみると肥前磁器 60%と半数以上を示す。用途別組成は食膳具 38%、調理具 34%、貯蔵具 12%、調度具 3%と食膳具が前代に引き続き高い比率である（第 15 図）。

土師質土器の主な器種は皿・焙烙・火鉢が出土する。皿は手づくね成形で、灯火芯を残すものが多い。本時期、軟質施釉陶器灯明皿が出現し、調度具組成をみると軟質施釉陶器 9%に対して、土師質土器 5%と圧倒的に前者の比率が高いが、同時期の遺構では土師質土器灯明皿が中心である（第 19 図）。焙烙の器形は難波分類の D 類・E 類が出土する。焼締陶器は備前焼と丹波焼が出土する。備前焼の器種は瓶類のみである。一方、丹波焼の器種は豊富で、このうち調理具の播鉢（第 17 図）、貯蔵具の甕は本産地が各組成で高い比率を示す（第 19 図）。

施釉陶器・磁器は肥前磁器を中心とし肥前陶器が続く。肥前磁器の主な器種は食膳具の碗・皿で、その組成をみるとこれらで半数以上を占める（第 16 図）。食膳具以外に化粧具や瓶類などの調度具も僅かに比率を上げる（第 19 図）。肥前陶器の主な器種は、京焼風陶器碗や呉器手碗などの碗類と刷毛目・三島手の鉢類である。

18 世紀前期～18 世紀後期

本時期、肥前磁器の比率はさらに上がる。その一方で、前代まで肥前磁器に続いて多く出土した肥前陶器は激減する。遺構として第 123 次調査 D-7 区 SK102 がある。産地別組成は土師質土器 24.5%、備前焼 3.5%、丹波焼 17%、堺・明石焼 3%、軟質施釉陶器 1.5%、瀬戸美濃陶器 0.5%、肥前陶器 5%、京焼系陶器 2%、肥前磁器 43%で、肥前磁器の比率が高く、さらに個体数だと 65.2%と半数以上の値である（第 14 図）。用途別組成は食膳具 60%、調理具 16%、貯蔵具 14%、調度具 10%と続く（第 15 図）。

土師質土器は前代より比率を下げ、これは肥前磁器の増加によるためである。主な器種は前代と大きな変化はなく皿・焙烙である。皿は手づくね成形のみで、灯火芯を残すものが多い。焙烙の器形は難波分類の E 類のみである。軟質施釉陶器は灯明皿が出土し、調度具組成では土師質土器 11%、軟質施釉陶器 40%と、本時期には軟質施釉陶器皿が中心となる（第 19 図）。焼締陶器は前代と変わらず丹波焼が多いが、前代まで主製品であった播鉢は、調理具組成をしてみると堺・明石焼 22%、丹波焼 18%と堺・明石焼播鉢に主体が

移行する（第 17 図）。しかし、産地別組成で比率が高いのは播鉢以外の甕・鉢類が一定量出土したためである。

施釉陶器・磁器は肥前磁器を中心とし、これに肥前陶器、京焼系陶器、瀬戸美濃陶器が続く。肥前磁器の器種組成は前代と変わりなく、食膳具組成では前代と同様に高い比率を示す（第 16 図）。肥前陶器の主な器種は刷毛目や三島手の鉢で、前代で多く出土した碗はほとんどみられない。これに変わり急増するのが京焼系陶器碗である。丸碗・筒型碗と器種は豊富である。京焼系陶器は碗以外に火鉢や鉢類がみられる。瀬戸美濃陶器は碗が僅かに出土する。

③ 19 世紀代

19 世紀代に至ると、各地点で陶磁器の出土量が 18 世紀代より増加し、良好な一括廃棄土坑が増える。

18 世紀後期～19 世紀前期

第 51 次調査 B-2-2 区 SK722 は大型の廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 15%、瓦質土器 0.03%、備前焼 0.07%、丹波焼 11%、堺・明石焼 2%、軟質施釉陶器 4%、瀬戸美濃陶器 0.05%、肥前陶器 0.04%、萩焼 0.01%、京焼系陶器 29.8%、肥前磁器 38% と京焼系陶器が肥前磁器と近接する値を示す（第 14 図）。用途別組成は食膳具 34%、調理具 34.6%、貯蔵具 9.4%、調度具 22% で、食膳具の比率が下がり、調理具、調度具の比率が上がる（第 15 図）。

土師質土器は 18 世紀代よりさらに比率を下げる。主な器種は皿・焙烙・火鉢・焜炉類で、18 世紀代まで中心であった焙烙は調理具組成をみると激減し、その一方で、火鉢や焜炉類は調度具で高い比率を示すことから、これが土師質土器の主体となる（第 19 図）。焼締陶器は前代と変化なく、播鉢は堺・明石焼播鉢が独占し、丹波焼は播鉢以外の甕・鉢・徳利など豊富な器種が出土する。

施釉陶器・磁器は京焼系陶器が急増するが、依然として肥前磁器が高い比率を示す。肥前磁器の主な器種は食膳具の碗・皿である。その組成では肥前陶器 1.8%、萩焼 0.2%、京焼系陶器 17%、肥前磁器 79% と前代と変化なく肥前磁器が高い比率を示し（第 16 図）、このことから産地別組成において肥前磁器が減少するのは、京焼系陶器の食膳具以外の器種の増加によることがわかる。京焼系陶器は、食膳具の碗、調理具の土瓶・土鍋、調度具の灯火具・化粧具・餌鉢と豊富な器種組成である。土瓶や土鍋などの調理具は本時期から

出現する。調理具組成では土師質土器焙烙 10%、堺・明石焼播鉢 7.7%、京焼系陶器土瓶 41.7%、京焼系陶器土鍋 21%と(第 17 図)、前代まで調理具の中心であった焙烙は激減し、土瓶・土鍋が主体となる。この調理具の増加により京焼系陶器の比率が上昇したことがわかる。また、灯火具も本時期に出現・急増する。灯火具は調度具組成をみると京焼系陶器 16%、土師質土器 13%、軟質施釉陶器 10%と主体が京焼系陶器灯火具に移行する(第 19 図)。この他に、瀬戸美濃陶器も出土量が若干ではあるが増える。これは 17 世紀代に出土した天目碗や量産品の皿ではなく、火鉢や水鉢などの大型製品の需要が増えたため、前代とは器種組成が異なる。このほかには萩焼などの新たな産地が加わるが、数値が示す通りその量はごく僅かである。

19 世紀前期～19 世紀後期

第 17 次調査 S K 31 は廃棄土坑である。産地別組成を見てみると土師質土器 5%、瓦質土器 0.7%、丹波焼 12.1%、信楽焼 2.4%、堺・明石焼 2.9%、軟質施釉陶器 0.4%、瀬戸美濃陶器 1%、肥前陶器 1%、京焼系陶器 38%、肥前磁器 26%、瀬戸美濃磁器 7%、京焼系磁器 3%と、前代に比べて京焼系陶器以外の産地は比率が下降するが、これは均一的に各産地の出土量が増えたことと、新たな産地が加わったことによる(第 14 図)。用途別組成は食膳具 35%、調理具 44%、貯蔵具 11%、調度具 10%と調理具が食膳具を上回る(第 15 図)。

土師質土器は産地別組成が示すように前代より比率を下げる。主な器種は皿・焙烙・火消し壺・火鉢・焜炉である。焼締陶器は丹波焼が本時期でも主体である。前代では主な製品は甕であった。しかし、19 世紀前期から信楽焼甕が出現し、貯蔵具組成では丹波焼 69%、信楽焼 24%、瀬戸美濃陶器 7%と丹波焼甕が独占する状況にはならない(第 18 図)。また、19 世紀中期からは大谷焼甕が出現し、甕の比率は除々に丹波焼からそれらに移行する。主製品である甕が他産地へ移行する中で、焼締陶器の主体を保てた要因は、どれも突出する比率ではないが、植木鉢・徳利・火鉢・瓶類・播鉢など多種の製品が出土するためである。

施釉陶器・磁器は本時期でも肥前磁器が高い比率を示す。また、この時期から瀬戸美濃磁器・京焼系磁器が加わるが肥前磁器が圧倒的に多い。主な製品は碗・皿などの食膳具であり、前代と同様にその組成の 70%を示す(第 16 図)。この他に、調度具は紅皿や鬚水入れなどの化粧具、水注や瓶などの文具と豊富な器種組成である。京焼系陶器は、土瓶・土鍋などの比率がさらに上昇し、それに加えて行平が本時期から急増する。この影響で用途別組成において調理具の全体量が増え、前代まで用途別組成において食膳具が半数を占め

ていたが、この京焼系陶器の煮沸具の急増により、食膳具と拮抗する。また、碗や調理具、灯火具以外に、餌鉢や神仏具、文具などの調度具が増え、この影響により京焼系陶器の比率がさらに高くなる。

④ 小結

伊丹郷町遺跡では、土師質土器・焼締陶器が高い比率を占める 16 世紀末～17 世紀前期以降は、幕末期まで、肥前陶磁器が常に高い比率を示す。

17 世紀前期～後期に肥前磁器が出現すると、それまで焼締陶器が中心であった遺物組成から施釉陶器・磁器を主とするものに変化する。また、この時期に肥前磁器が出現するが、出現と共に高い比率を示すのではなく、主体はあくまで肥前陶器である。土師質土器は前代に比べると比率は下がり、この様相は 18 世紀後期まで下降し続ける。主な器種は皿と焙烙である。皿は、大半が灯火芯を残すもので、灯火具として使用したと考えられる。焙烙は 18 世紀後期に施釉陶器の土瓶・土鍋が出現するまで調理具組成で播鉢と拮抗する。このように土師質土器は灯火具、調理具で高い比率を示す製品を含むため、18 世紀後期まで一定量を維持したと考えられる。

また、17 世紀前期～後期には、それまで一定量出土した備前焼がほとんど出土なくなり、丹波焼が独占状態になる。主な製品は、播鉢と甕で前代まで備前焼と競合した製品である。また、それ以外に徳利や花瓶などの瓶類や鉢類など豊富な器種がこの時期以降出現する。

17 世紀後期～18 世紀前期では肥前磁器が急増する。前代と比べるとさらに比率を上げ、大量に流入することがわかる。主な器種は、前代と同様に碗・皿などの食膳具で、その組成で 70%は肥前磁器が占める。また、前代まで多く出土した肥前陶器は減少するが 10%をキープする。主な器種は本時期でも食膳具の碗・皿・鉢である。しかし、碗・皿については肥前磁器の影響で激減するが、鉢類については肥前磁器よりも高い比率を示すことから出土量を維持したと考えられる。

18 世紀前期～後期に至ると、肥前磁器はさらに出土量が増し、産地別組成で依然として 70%台を示す。それは主製品であった食膳具はもちろんのこと、神仏具、化粧具などの調度具の出土量が増える。また、それまで一定量出土した肥前陶器は、この時期には激減し、これに変わるように京焼系陶器が増加する。さらに、それまで焼締陶器を独占した丹波焼は、主製品である播鉢が堺・明石焼の出現・急増により、播鉢の主体がそちらに移行する。

しかし、播鉢以外の製品が依然として高い比率を示すため、全体量に変化はみられない。

18世紀後期～19世紀初頭に至ると、産地・器種別組成に大きな変化がみられる。京焼系磁器、萩焼などの新しい産地の出現、信楽焼、瀬戸美濃陶器の復活や京焼系陶器の新器種出現・急増により、肥前磁器の食膳具独占から多種多様な産地・器種がみられることである。この状況は、19世紀後期まで続く。但し、産地別組成をみると、幕末まで肥前磁器の食膳具が高い比率し、変化がみられても肥前磁器の様相には変化はなかった。また、丹波焼も同じで、播鉢は18世紀前期以降、堺・明石焼に主体が移行し、さらに甕も19世紀前期に信楽焼、19世紀中期には大谷焼などと競合する。しかし、焼締陶器全体では幕末まで依然として高い比率を占める。それは完全に移行するのではなく、10%台はキープすることと、播鉢・甕以外に豊富な器種が一定量出土するためである。

3 京都（第1・20図）

京都府の江戸時代は、山城、丹後、丹波にあたる。京都の近世遺跡の調査は、17世紀初頭までは比較的多く点在するが、それ以降については京都市内に集中する。ただ、江戸時代を層位的に調査される例は僅かであり、総合的な検討もしていない。そのような状況であるが、平安京左京北辺四坊の公家町跡（以下公家町跡と略す）、伏見城跡で土器・陶磁器の検討がおこなわれており、これを分析することができた⁸。なお、公家町跡は取り上げる遺構のすべてにおいて、保管の関係で一部の陶磁器を細部まで器種分析ができなかった。また、土師質土器については出土する土器・陶磁器の90%が土師質土器皿で、これが本遺跡の特徴であることがわかる。しかし、それを含めて産地別組成を示すと土師質土器以外の数値が0.1%以下を示すため、本分析ではそれを省き陶磁器を中心に実施し、数値化は産地別組成のみに止めた。また、伏見城跡についても一部分類できない器種もあり、一括に分類している。

① 17世紀代

16世紀末～17世紀前期

肥前磁器を含まない時期である。資料として公家町跡と伏見城跡がある。

公家町は（第20図 - 1）、豊臣秀吉によって整備が行われた。天正13年（1585）に院

⁸ 大都市の調査において、一調査区での土器・陶磁器の変遷がその都市の様相を示すことは難しいことはわかっているが、特別な製品以外は大まかな組成は大差ないと考えられる。

御所造院に始まり、それに伴って皇族や公家の屋敷地再編が進められる。それは江戸時代も継承し、慶長10年(1605)の院御所建設に始まる公家町の事業でほぼ完了する。

公家町跡土坑 C548 は廃棄土坑である。産地別組成は中国製磁器 62%、肥前陶器 22%、瀬戸美濃陶器 7%、備前焼 2%、朝鮮王朝陶磁器 1.5%、丹波焼 1%、信楽焼 0.5%、軟質施釉陶器 0.4%、産地不明陶器 3.6%と続く(第21図)。

土師質土器は皿・鍋類・焼塩壺が出土する。皿はすべて手づくね成形で灯火芯を残すものは少ない。鍋は大和型の羽釜と焙烙で、羽釜が圧倒的に多い。羽釜は瓦質土器もあるが、土師質土器が中心である。瓦質土器は羽釜・火鉢で、土師質土器と比べると少ない。信楽焼は搦鉢・鉢・甕で、甕はこの他に備前焼も出土するが、同時期の遺構では信楽焼甕が多い。搦鉢は備前焼、丹波焼、信楽焼が出土し、備前焼と信楽焼が拮抗する。備前焼は先に述べた器種以外に壺がある。

施釉陶器・磁器は中国製磁器が多く出土する。瀬戸美濃陶器は碗・皿・鉢と食膳具が中心で、志野焼、織部焼などの「桃山陶器」に分類する懐石具や茶器が多く、量産品は少ない。肥前陶器は碗・皿・鉢が出土し、これも瀬戸美濃陶器と同様に食膳具が中心である。絵唐津が多く量産品は少ない。中国製磁器は碗・皿・鉢などの食膳具が多く、他に瓶類・合子などの調度具も一定量出土する。

伏見城跡は(第20図-4)、京都市伏見区に所在する。伏見城は、文禄元年(1592)に豊臣秀吉によって構築する。しかし、慶長の大地震で倒壊するが、すぐに大規模な城郭として再建する。秀吉は慶長3年(1598)に本城で終焉し、その後、関ヶ原の合戦(1600)により落城するが、京都・大坂を結ぶ交通の要所であるため、慶長6年(1601)に再建され、徳川氏の拠点として整備される。しかし、二条城の造営により元和9年(1623)には政治的な意義が失われ落城するが、城下町は江戸時代には商業都市として栄える。

2区土坑 49の産地別組成は、土師質土器 77%、瓦質土器 2.2%、備前焼 2.5%、丹波焼 1.2%、信楽焼 3%、瀬戸美濃陶器 5%、肥前陶器 2.3%、中国製磁器 6%と続く(第22図)。用途別組成は食膳具 60%と半数を占め、調理具 35%、貯蔵具 3%、調度具 2%にわかれる(第23図)。

土師質土器は、産地別組成で高い比率を示す。その主となるのが皿で、これに鍋類・焼塩壺が続く。皿は手づくね成形とロクロ成形がある。灯火芯を残すものもあるが、多くは食膳具で、その組成では 37.5%と高い比率を示す(第24図)。鍋類は羽釜で、同時期の遺構では焙烙も出土する。調理具組成で羽釜は 51%と高い比率で、タイプは大和型である(第

26 図)。瓦質土器は羽釜・焜炉があり、器種組成は土師質土器と共通するものが多いが、その量比はそれに比べると僅かである。備前焼は鉢・播鉢・甕が出土する。本遺構では播鉢は備前焼のみであるが、他遺構からは信楽焼も出土する。

瀬戸美濃陶器の主な器種は食膳具の碗・皿・鉢である。皿の特徴は無文で、見込みに目痕を残す量産品が目立つ。碗は天目碗が多く、鉢は志野焼、黄瀬戸など「桃山陶器」に分類される懐石具・茶器が出土し、量産品が多いが高級品も一定量含む。肥前陶器は碗・皿のみで、品質は無文の量産品が主である。中国製磁器は食膳具組成で土師質土器に次いで23%と高い比率で、これに瀬戸美濃陶器22%、肥前陶器8%と続き、施釉陶器・磁器の食膳具では一番高い比率を示す（第24図）。

17 世紀中期

17 世紀中期は肥前磁器を含む資料である。公家町跡土坑 F 1244 は廃棄土坑である。産地別組成を見てみると備前焼 0.99%、丹波焼 1.6%、信楽焼 8%、軟質施釉陶器 0.01%、瀬戸美濃陶器 0.7%、肥前陶器 6%、京焼系陶器 12%、中国製磁器 2%、肥前磁器 62%、産地不明陶器 6%と（第22図）、肥前磁器が新たに出現し高い比率を示す。ただ、同時期の遺構では中国製磁器が40%近い比率を示す場合もあり、遺構によって組成が異なる。

土師質土器は皿・鍋類・焼塩壺が出土する。皿は手づくね成形とロクロ成形があり、胎土の色調も多種にわたる。主に食膳具として受容したと考えられるが、灯火芯を残すものも僅かにある。鍋類は羽釜・土鍋・焙烙にわかれ、本時期から焙烙が高い比率を示す。焙烙の器形は難波分類のA類と京都産である。瓦質土器は羽釜と火鉢で、前代と組成に変化はない。備前焼は17世紀初頭と比べると激減する。器種は播鉢と甕である。播鉢は丹波焼が圧倒的に多く、本時期には播鉢の主体が丹波焼へ移行する。甕も丹波焼、信楽焼が出土するが前者が多い。

瀬戸美濃陶器は碗・皿・鉢などの食膳具が中心だが、前代より産地別組成での比率を下げる。製品は志野焼、織部焼が多く、御深井製品も一定量含む。肥前陶器は瀬戸美濃陶器と器種が重なる。碗・鉢などは装飾にバリエーションがみられる。京焼系陶器はこの時期から出現するが比率は低く、色絵の丸碗が出土する。中国製磁器は碗・皿・鉢などの食膳具を中心とし、瓶類・合子などの調度具もある。このうち食膳具は、土師質土器に次いで多く、この時期でも施釉陶器・磁器の中心である。ただ、前代では他の産地と大差があったが、本時期では次の肥前磁器と近接する。肥前磁器の主な器種は碗・皿・鉢・小坏で、中国製磁器と器種組成が共通する。

17 世紀代の他遺跡の状況は、洛中を中心に述べる。産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、常滑焼、丹波焼、信楽焼、軟質施釉陶器、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、中国製陶器、東南アジア陶器、中国製磁器、朝鮮王朝陶磁器、ベトナム磁器と 17 世紀前期から肥前磁器が加わる。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具があり、食膳具を中心とする遺跡が多い。

土師質土器の出土量が多い遺跡が多く、特に、洛中での比率は公家町跡の状況と共通する。器種は皿・鍋類が中心で、洛中では焼塩壺も一定量出土する。皿は洛中では手づくね成形とロクロ成形があり、法量にバリエーションがある。長岡京（第 20 図 - 5）の神足二丁目溝 S D 16305 では手づくね成形の皿が多い。鍋類は、公家町跡や伏見城跡で 16 世紀末～17 世紀前期に大和型の羽釜が出土し、17 世紀中期には焙烙が増加するが、洛中でも同様である。焙烙の器形は、17 世紀初頭は難波分類の A 類、17 世紀前期以降は京都産が主である。また、焼塩壺は洛中の状況は、「堺湊」の銘をもつものが多いが、京都産と考えられるダルマ型の製品も 17 世紀前期以降に急増する。

焼締陶器は備前焼、常滑焼、丹波焼、信楽焼が出土する。左京三条三坊十一町土坑 101 は洛中の資料で 16 世紀末～17 世紀前期の年代観を示す（第 20 図 - 2）。破片計測されており、産地別組成を見てみると備前焼 0.4%、信楽焼 4%、常滑焼 0.1%と信楽焼の比率が高い（第 28 図）。信楽焼は播鉢と壺で、このうち播鉢は信楽焼のみである。公家町跡では備前焼播鉢が多かったが、他の洛中遺跡では信楽焼播鉢が多い。それが 17 世紀前期に至ると、信楽焼播鉢は減りそれに変わって丹波焼播鉢が中心となる。この状況は 17 世紀後期まで続く。備前焼は播鉢以外に甕・鉢類が出土する。土坑 101 の貯蔵具組成では備前焼 72%、土師質土器 14%にわかれ（第 34 図）、依然として陶器甕の主体である。丹波焼は先にも述べたが 17 世紀前期に洛中で播鉢が急増し、それに共伴して鉢や瓶類なども出土する。洛中以外に、京都府宮津市の宮津城跡は京極高国の居城である（第 20 図 - 6）。江戸時代は丹後にあたる。3 次調査では 16 世紀末～17 世紀前期の遺物が出土し、焼締陶器は丹波焼のみで生産地に近い製品が流入すると考えられる。

施釉陶器・磁器は肥前陶器が広域に出土する。この肥前陶器の出現時期は洛中では 16 世紀末～17 世紀初頭と考えられる。その分布状況は、初期の岸岳系は洛中を中心に出土する（第 34 図）。増加するのは胎土目段階からで先に述べた丹後の宮津遺跡や山城の長岡京遺跡でも確認できる（第 35 図）。瀬戸美濃陶器は 16 世紀末～17 世紀前期までは国産の施釉陶器・磁器の主体である。洛中の状況を見てみると、志野焼や織部焼の「桃山陶器」に

分類される懐石具や茶器が多く出土する。**弁慶石町遺跡**は瀬戸物問屋と考えられており（第 20 図 - 7）、ここからは大量の瀬戸美濃陶器の懐石具や茶器が出土し⁹、洛中にこれらを専門とする問屋があったことがわかっている。洛中以外では長岡京や大山崎町で志野焼鉢や天目碗などがみられ、丹後の宮津城跡では茶入れが出土する。

肥前磁器の出現時期については京都府下では良好な資料がない。初期伊万里の分布状況は都市部に集中する（第 35 図）。次の 17 世紀中期～後期と考えられる腰張筒型碗の状況は、洛中では出土量が一気に増える（第 35 図）。洛外は京都大学構内遺跡などの集落跡での出土例が増えるが、その出土量は少ない。貿易陶磁器は、中国製磁器を中心にベトナム陶磁器、朝鮮王朝陶磁器などが出土するが、中国製磁器以外は洛中以外での出土例はない。また、中国製磁器は 16 世紀末～17 世紀前期まで公家町跡や洛中のいくつかの遺跡で施釉陶器・磁器内において一番高い比率を示すが、洛中以外ではそのような組成を示す例はない。

② 18 世紀代

17 世紀後期～18 世紀前期

公家町跡の穴蔵 F 1387 は、宝永 2 年（1705）の大火に伴う整地層に覆われた廃棄土坑である。産地別組成を見てみると肥前磁器 55%、京焼系陶器 18%、肥前陶器 11%、信楽焼 7%、軟質施釉陶器 1.4%、瀬戸美濃陶器 1.3%、中国製磁器 0.7%、備前焼 0.6%、丹波焼 0.3%、その他 4.7%と続く（第 21 図）。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・火消し壺が出土する。皿はロクロ成形を中心とし、手づくね成形もある。また、大きさにバリエーションがみられる。焙烙は京都産のみ。焼塩壺は焙烙に次いで高い比率を示す。輪積み成形と板作り成形があり「御壺塩師/堺湊伊織」の銘がみられるものが多い。瓦質土器の器種は火鉢である。信楽焼は播鉢・甕・壺が出土する。播鉢は備前焼、丹波焼、信楽焼があり、信楽焼播鉢が圧倒的に多く、前代では丹波焼播鉢が独占したが、本時期には再び信楽焼播鉢が主体となる。甕は備前焼、丹波焼、信楽焼があり、やや信楽焼が優勢である。備前焼は、産地別組成をみると前代よりさらに比率を下げる（第 21 図）。主器種は前代と変わりなく播鉢・甕だが、本時期から「伊部手」の徳利が僅かに出土する。丹波焼は先に述べたとおり播鉢が激減する。その影響で全体数

⁹ 永田信一「洛中出土の桃山陶器」『第 13 回土岐市織部の日 特別展 三条界限のやきもの屋』土岐市美濃陶磁歴史館 2001 年

値も下がる。

京焼系陶器は施釉陶器でもっとも高い比率を示す。食膳具の碗・鉢、調度具の鬚水入れが出土する。碗は丸碗・筒型碗・平碗があり、装飾も色絵・錆絵・錆絵染付と多彩である。また、本遺構からは出土していないが同時期の遺構では土鍋も出土する。肥前陶器は17世紀代と比べると激減する。器種は碗・鉢と前代と変わらないが、食膳具の陶器の主体は京焼系陶器に移行する。瀬戸美濃陶器は肥前陶器よりさらに比率を下げ、食膳具が僅かに出土する。肥前磁器は、産地別組成で高い比率を示す。器種は食膳具の碗・皿・鉢・猪口、調度具の瓶類などと豊富である。本時期でも食膳具組成で肥前磁器の比率が一番高い。その主な器種が碗・皿であることから、これらの急増により施釉陶器・磁器の中心となったと考えられる。一方、中国製磁器は先のとおり激減し、主な器種は前代と同じ碗・皿である。

伏見城跡 1 区土坑 1313は17世紀後期～18世紀前期の廃棄土坑である。産地別組成は、土師質土器 42%、瓦質土器 0.2%、信楽焼 16%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 15%、京焼系陶器 0.4%、肥前磁器 23%である（第22図）。用途別組成は食膳具 63%を中心とし、調理具 25%、調度具 8%、貯蔵具 4%にわかれる（第23図）。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢が出土し、その中で皿は食膳具組成において10%と依然して高い比率を示す（第24図）。また、皿は大きさにバリエーションがあり、灯火芯を残すものもある。焙烙の器形は京都産のみ。瓦質土器は羽釜が出土する。信楽焼の主な器種は播鉢・甕・壺である。播鉢は調理具組成をみると信楽焼 66%とこれのみである（第25図）。甕は貯蔵具組成をみると、信楽焼 91%と大半を占め、これに備前焼 9%と僅かに出土する（第26図）。

肥前陶器は碗・皿・鉢などの食膳具を中心とし、瓶類も僅かに出土する。食膳具組成を見ても土師質土器 10%、瀬戸美濃陶器 6.5%、肥前陶器 31%、京焼系陶器 3%、肥前磁器 49.5%で、肥前磁器とは差異があるが、施釉陶器の中では瀬戸美濃陶器、京焼系陶器より比率が高い（第24図）。主な器種である碗の装飾は京焼風陶器・刷毛目・呉器手と多種である。京焼系陶器は鉢のみだが、同時期の遺構からは量は少ないが色絵碗が出土する。肥前磁器は食膳具組成において一番高い比率を示す。この急増により施釉陶器・磁器の中心となったと考えられる。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の瓶類である。碗の主タイプは量産品の「くらわんか手」碗である。中国製磁器は皿のみで、16世紀末～17世紀前期の伝世品が出土する。

18 世紀中期

公家町跡土坑H271 は大型の廃棄土坑である。産地別組成をみると（第 21 図）、備前焼 0.3%、信楽焼 2%、堺・明石焼 0.3%、軟質施釉陶器 0.1%、瀬戸美濃陶器 0.2%、肥前陶器 0.6%、京焼系陶器 51.5%、肥前磁器 41%、産地不明陶器 4%と京焼系陶器が肥前磁器に変わって陶磁器の中心となる。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・ミニチュア土製品などが出土する。皿が依然として多いが、18 世紀前期より出土量は減少する。成形は手づくねとロクロがある。焙烙の器形は京都産を中心とし難波分類のD類・E類も含む。瓦質土器は火鉢のみである。信楽焼は播鉢・鉢・甕があり前代と組成に大きな変化はない。播鉢は信楽焼、堺・明石焼があり、堺・明石焼は出現と同時に高い比率で、信楽焼を抜いて播鉢の主体となる。甕は備前焼、信楽焼、丹波焼があり、信楽焼甕が高い比率を示す。

京焼系陶器は産地別組成で一番高い比率である。器種は食膳具の碗・鉢、調理具の土瓶・土鍋が出土する。その主な器種は食膳具の碗で、この受容が増えたことにより一気に陶磁器の主体となる。器形は平碗を主とし丸碗・筒型碗がある。装飾は色絵・錆絵・錆絵染付と多種にわたり、文様の配置にもバリエーションがみられる。他に瀬戸美濃陶器は水鉢・火鉢などの大型製品が出現する。肥前陶器は碗・皿・鉢が出土する。主な器種は前代と異なり鉢に変わる。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の瓶類・蓋物・水滴が出土する。

伏見城跡土坑 1372 は大型の廃棄土坑である。産地別組成を見てみると土師質土器 29%、瓦質土器 1%、信楽焼 9%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 5%、京焼系陶器 11%、肥前磁器 42%にわかれる（第 22 図）。用途別組成は食膳具 70%、調度具 12%、調理具 10%、貯蔵具 8%と続く（第 23 図）。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・ミニチュア土製品などが出土する。皿は依然してと多いが、18 世紀前期より出土量が減少する。成形は手づくねとロクロがある。灯火芯を残すものも多い。焙烙の器形は京都産を中心に難波分類のE類も含む。瓦質土器は火鉢のみである。信楽焼は播鉢・鉢・甕が出土し、前代と組成に大きな変化はない。備前焼は灯明皿が出土し、前代までの播鉢・甕を主とする器種組成から一変する。

瀬戸美濃陶器は碗・鉢などの食膳具と、新たに水鉢・火鉢などの大型製品が出現する。肥前陶器は碗・皿・鉢があり、食膳具組成をみると前代と異なり鉢が中心となる（第 24 図）。京焼系陶器は比率を上げるが肥前磁器とは大差がある。器種は食膳具の碗・鉢、調理具の土瓶・土鍋が出土する。食膳具組成では土師質土器 10%、瀬戸美濃陶器 1.5%、肥前

陶器 5%、京焼系陶器 16%、肥前磁器 65%と前代より比率を上げる（第 24 図）。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の瓶類・蓋物・水滴と豊富な器種組成である。

18 世紀代の他遺跡の状況は、洛中を中心に述べる。産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、信楽焼、軟質施釉陶器、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、京焼系陶器、中国製磁器、肥前磁器で、土師質土器・瓦質土器は 18 世紀代には出土量が減少する遺跡が多い。逆に、施釉陶器・磁器は増え、その主体となるのが肥前磁器・京焼系陶器である。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具があり、食膳具を中心とする遺跡が多い。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・火鉢が出土する。皿は洛中では 17 世紀代と同様に圧倒的に多いが、18 世紀前期以降減る。大きさにバリエーションがみられ、用途によって使い分けしたことが察しえる。鍋類は洛中では焙烙が主で、器形は京都産が中心だが難波分類の D 類・E 類も僅かに含む。焙烙以外に大和型の羽釜が伏見城跡で出土するが、長岡京や洛中でも 18 世紀前期までは僅かにある。焼締陶器の状況は、18 世紀前期に堺・明石焼が新たに加わる。洛中の状況をみると、先に述べた公家町跡と共通し、17 世紀後期までは播鉢・甕は信楽焼が独占したが、18 世紀前期に至ると播鉢は堺・明石焼に主体が変わる。その一方、甕は信楽焼が優勢であるが備前焼、丹波焼なども僅かに出土する。

施釉陶器・磁器は、洛中の状況をみると肥前磁器が大量に出土する遺跡が多く、17 世紀後期～18 世紀前期以降にその量はさらに増加する。肥前磁器の主な器種は食膳具の碗・皿である。洛中でも出土地点によって品質の差異はあるが、総じて量産品は少ない。その一方、洛外の京都大学構内遺跡（第 20 図-3）では「くらわんか手」などの量産品が多く出土する。本遺跡では 18 世紀前期以降に肥前磁器が急増することから、都市部とそこから離れた遺跡では時期差があることがわかった。肥前磁器に続くのが、18 世紀初頭までは肥前陶器、18 世紀前期以降は京焼系陶器で主な器種は碗である。ただ、公家町跡のように肥前磁器を上回る比率ではないが近接する値を示す。この京焼系陶器碗の急増は洛中にみられるもので、洛外の京都大学構内遺跡、長岡京では肥前磁器と大差があり、京焼系陶器碗の増加は洛中に限られる。碗以外の土瓶・土鍋などの調理具は、洛中では 18 世紀前期までは一定量出土し、18 世紀中期に急増し、それ以外の遺跡では 18 世紀後期以降と差異がある。肥前陶器は 17 世紀後期までは碗・皿などが食膳具において肥前磁器に次いで多く出土する。しかし、18 世紀前期に京焼系陶器が急増すると極端に減少する。瀬戸美濃陶器は洛中では 10%未満だが出土する。しかし、それ以外の遺跡ではほとんどみられない。中国製磁器の出土例は少なく都市部で僅かに出土する程度で 17 世紀前期の伝世品が多い。

③ 19 世紀代

19 世紀前期以降の資料は乏しい。**公家町跡土坑 B716** は、天明 8 年（1788）の大火の整地層を掘り込む廃棄土坑である。産地別組成を比率の高い順に配列すると京焼系陶器 59%、肥前磁器 31%、瀬戸美濃陶器 6%、信楽焼 1%、丹波焼 0.9%、中国製磁器 0.3%、肥前陶器 0.2%、備前焼 0.07%、堺・明石焼 0.03%、その他 1.5%と前代と同様に京焼系陶器が半数を占める（第 21 図）。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・蓋・火消し壺・火鉢・焜炉・ミニチュア土製品が出土する。皿はこの時期も他の器種と大差はあるが、18 世紀代より比率を下げる。焙烙の器形は京都産が多い。瓦質土器は本時期も火鉢が出土する。焼締陶器は産地や器種組成は前代と大きな変化はないが、全体量が減る。施釉陶器・磁器の比率が上がることに要因があると考えられる。焼締陶器の主な器種は播鉢と甕である。播鉢は信楽焼、堺・明石焼があり、堺・明石焼が前代に引き続き主体である。甕は丹波焼、信楽焼があり、これも前代と変わらず信楽焼が多い。この他、丹波焼の徳利は本時期から増加する。いわゆる「貧乏徳利」と呼ばれるもので、徳利は他に備前焼の「伊部手」と呼ばれるものが僅かに出土する。瀬戸美濃陶器は碗・鉢などの食膳具もみられるが、中心は火鉢・水鉢などの大型製品である。肥前陶器は鉢が僅かに出土する。京焼系陶器は、食膳具の碗・鉢、調理具の汁注ぎ・土瓶・土鍋・行平、調度具の灯火具・神仏具・化粧具と豊富な器種組成である。前代まで碗が主であったが、本時期には土瓶・土鍋・行平などの煮沸具が総数にした場合、碗を大きく上回る。また、調度具も出土量が増え、18 世紀中期より全体量が増えるのは煮沸具、灯火具の増加によるものと考えられる。

肥前磁器は、食膳具の碗・皿・鉢・小坏、調度具の化粧具・神仏具・蓋物・瓶類と豊富な器種組成である。本時期でも碗・皿などの食膳具を主とし、碗・皿ともに大きさ、器形にバリエーションがみられ、皿は組物が目立つ。

伏見城跡 1 区土坑 783 は大型の廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 69%、瓦質土器 0.5%、備前焼 0.5%、信楽焼 3.5%、堺・明石焼 2%、軟質施釉陶器 8%、瀬戸美濃陶器 0.2%、肥前陶器 0.5%、京焼系陶器 0.8%、肥前磁器 8%とわかる（第 22 図）。用途別組成は食膳具 26%を中心とし、調理具 4%、貯蔵具 2%、調度具 68%がある（第 23 図）。

土師質土器は皿 92.3%、焙烙 0.7%、焜炉 7%と皿が圧倒的に高い比率である。成形は手づくねとロクロがあり、大きさにバリエーションがみられる。焙烙の器形は京都産のみ

である。焜炉は本時期から急増し、この中には涼炉などの嗜好品も含む。信楽焼は前代と同様に焼締陶器の主体で播鉢・甕・壺・鉢がある。このうち播鉢については調理具組成をみると、信楽焼 34%、堺・明石焼 34%、備前焼 14%と前者 2 つが競合する（第 25 図）。

京焼系陶器は碗と土鍋で、碗は色絵碗と端反碗が出土する。同じ施釉陶器である瀬戸美濃陶器、肥前陶器でも碗が出土するが、後で述べる肥前磁器碗とは大差がある。肥前磁器は施釉陶器・磁器では圧倒的に高い比率を示す。器種は碗・皿などの食膳具を中心とし、瓶類や神仏具などの調度具も出土する。碗・皿などの食膳具は、土師質土器 69%、肥前磁器 25%、京焼系陶器 2%、瀬戸美濃陶器 1.5%、肥前陶器 1%と土師質土器とは大差があるが、他の施釉陶器とも数値に開きがあり（第 24 図）、依然として食膳具の中心である。

19 世紀代の他遺跡の状況は、洛中を中心にしてみる。産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、信楽焼、堺・明石焼、軟質施釉陶器、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、萩焼、京焼系陶器、中国製磁器、肥前磁器、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器と、萩焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などの新たな産地が出現する。その反面、土師質土器は比率を下げる遺跡が増える。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具がみられ、食膳具を中心とする遺跡が多い。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・焜炉などが共通してみられる。土師質土器の全体量は 18 世紀代より下がる。下がるとはいえ産地別組成では施釉陶器・磁器より高い比率を示す遺跡が多い。皿はロクロ成形と手づくね成形があり、洛中では大きさにバリエーションがあるが、京都大学構内遺跡の状況をみると、器種にバリエーションは少なく、量も施釉陶器・磁器と近接する比率である。鍋類は焙烙が多い。洛中の遺跡では器形は京都産が中心であるが、19 世紀前期～中期の遺構では難波分類の G 類が出土する。洛外でも京都大学構内遺跡では G 類が出土することから、19 世紀前期には洛中及びその近郊に G 類が流入すると思われる。この他、火鉢や焜炉などが 19 世紀代から洛中及びその近郊で出土例が増える。また、焼塩壺は洛中では出土例が多いが、それ以外では僅かである。焼締陶器の状況は、播鉢は洛中や近郊で堺・明石焼が主体で、これに続くのも信楽焼である。丹後の宮津城跡の 19 世紀代と考えられる遺構では播鉢は丹波焼であり、生産地に近いため信楽焼や堺・明石焼の製品は流入しなかったと考えられる。甕は洛中では信楽焼が多い。

施釉陶器・磁器は、京焼系陶器・肥前磁器の比率が高い。特に洛中では 18 世紀後期に引き続いて京焼系陶器が施釉陶器・磁器において半数近い比率を示すが、このような状況は洛中のみで京都大学構内遺跡では肥前磁器が主であり組成が異なる。京焼系陶器は食膳

具の碗、調理具の土瓶・土鍋が多い。碗は洛中では器種も多彩で出土量も多い。洛外でも量は少ないが丸碗が出土する。調理具は洛中では 18 世紀中期から出土量が増加するが、洛外では 18 世紀後期～19 世紀前期と時期差がある。また、公家町跡では豊富な器種が出土するが、このような組成を示すのは洛中に限られる。施釉陶器は、肥前陶器が 18 世紀代より激減するが、瀬戸美濃陶器は大型製品の急増により比率を上げる。また、洛中では碗や鉢などの食膳具も僅かに増える。これら以外に萩焼が 19 世紀に出現し、その分布は都市部に集中する。肥前磁器は洛中では京焼系陶器より低い比率であったが、それ以外の地域では肥前磁器を中心とする遺跡が多い。器種は碗・皿・鉢などの食膳具が大半を占める。碗の器形は「くらわんか手」が多く出土するが、広東碗・筒型碗・端反碗など器形にバリエーションが増え、蓋物の数も目立ち、用途に応じて使い分けすることが察しえる。また、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などが 19 世紀前期に出現するが、京焼系陶器や肥前磁器などに影響ない程度に留まる。ただ、瀬戸美濃磁器は都市部に限らず周辺の集落でも出土例はあるが、京焼系磁器については集落での出土例は少ない。

④ 小結

京都府では、近世遺跡を主とする遺跡は少なく。洛中と伏見城跡を中心に検討した。土器・陶磁器の様相は、土師質土器の皿・焙烙などの成形やその変化、焼締陶器の産地組成の変遷、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、肥前磁器などの施釉陶器・磁器の広域流通品は出現時期や大まかな器種組成などは各地で共通する。その一方で、京焼系陶器・中国製磁器の量比やその変遷は地域によって差異がある。まとめると、以下の通りである。

17 世紀代は、産地別組成は、17 世紀初頭は土師質土器、瀬戸美濃陶器、中国製磁器、17 世紀前期には瀬戸美濃陶器から肥前陶器に施釉陶器の主体が変わる。用途別組成は食膳具が多く、これに調理具、貯蔵具が続き、調度具は僅かである。

その中で洛中及び都市部では土師質土器が圧倒的に高い比率を示し、その主体なのが皿であり、この組成は江戸時代を通して変化はない。鍋類については 17 世紀前期に羽釜から焙烙に主体が移行する。焼締陶器は洛中では 17 世紀前期に備前焼から信楽焼に、17 世紀中期には播鉢のみ丹波焼に主体が変化するが、丹波地域は一貫して丹波焼が中心である。施釉陶器・磁器は 17 世紀初頭に肥前陶器の出現・急増により、産地別組成で施釉陶器・磁器が大半を占める遺跡が増加する。さらに、17 世紀前期に肥前磁器の出現・急増により、17 世紀中期には国産の施釉陶器・磁器が主体となる様相に変化する。ただ、公家町跡や一

部の町屋では引き続き中国製磁器が多い遺跡もあり、洛中においては遺跡の性格によって陶磁器受容が異なっていた。

18 世紀代の産地別組成は、土師質土器、肥前陶器、京焼系陶器、肥前磁器が中心で、特に肥前磁器は 17 世紀代より比率を上げる遺跡が多い。用途別組成は食膳具が主体で、都市部では調度具の比率が上がる。

産地別組成は土師質土器を中心とし、肥前磁器がこれに続く。土師質土器は 17 世紀代と大きな変化はないが、焼締陶器は 18 世紀前期に堺・明石焼播鉢の出現、備前焼甕の減少と変化がみられる。施釉陶器・磁器は肥前磁器を主体とするが、洛中では 18 世紀中期～後期に京焼系陶器が急増し、産地別組成が変化する。

19 世紀代は、土師質土器が主体だが、肥前磁器・京焼系陶器の比率はさらに上昇する。特に京焼系陶器は洛中では 18 世紀後期～19 世紀前期には肥前磁器を上回り、陶磁器全体で一番高い比率を示すが、洛中以外では肥前磁器と京焼系陶器が二分するか肥前磁器がやや多い比率となる。この他、萩焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などの新たな産地も増える。用途別組成は食膳具を中心とするが、都市部では 18 世紀後期～19 世紀前期に調理具が食膳具を上回る。これは京焼系陶器の煮沸具の増加によるもので、産地別組成で京焼系陶器が増加するのはこの影響による。都市部以外の遺跡でも調理具は増えるが、依然として食膳具が中心で受容差がある。

4 和歌山・奈良（第 1・36）

これら地域の江戸時代は紀伊・大和にあたる。近世遺跡の調査は、紀伊の和歌山城跡、根来寺跡、大和の奈良町遺跡、大和郡山城下町跡などが挙げられるが、多くの遺跡では江戸時代を通して、土器・陶磁器の変遷がわかる遺跡はほとんどない。このような状況であるが一部の一括廃棄土坑の組成と広域流通品による分布状況から、陶磁器の様相を雑駁ではあるが掴むこととする。また、一部の遺跡で計測分析できた資料もあり、この結果も含めて検討する。

① 17 世紀代

16 世紀末～17 世紀前期

平城京第 424 次調査(左京四條六坊十四坪)は、近世は奈良町に属する(以下、奈良町遺跡と略す)(第 36 図 - 1)。SE16 は 16 世紀末～17 世紀前期の資料である。産地別組成は土

師質土器 67%、瓦質土器 28%、備前焼 0.6%、常滑焼 0.16%、信楽焼 0.8%、瀬戸美濃陶器 1.9%、肥前陶器 0.7%、中国製磁器 0.84%である(第 37 図)。用途別組成は食膳具 29%、調理具 36%、貯蔵具 1%、調度具 34%にわかれる(第 38 図)。

土師質土器は皿 25.6%、釜 10.2%、焼塩壺 0.1%が出土する。皿は灯火芯を残すものもあるがごく僅かで、多くは食膳具に属する。その比率は高く、食膳具組成で 87.8%と大半を占める(第 39 図)。鍋類は、焙烙はなく土釜で器形は大和型のみ。瓦質土器は播鉢 4.5%、捏鉢 0.5%、鉢 23.2%、壺 2.7%、風炉 0.1%、蓋 0.1%、瓦燈蓋 0.1%、不明 0.4%と豊富な器種組成で、播鉢は調理具組成で瓦質土器 12%、信楽焼 1%とあり、瓦質土器播鉢が圧倒的に高い比率を示す(第 40 図)。備前焼は甕・播鉢が出土する。甕は貯蔵具組成で備前焼 38%、信楽焼 32%、常滑焼 11%、土師質土器 9%、瓦質土器 2%にわかれ、備前焼甕が高い比率を示す(第 42 図)。信楽焼は甕・播鉢がある。両器種とも各組成で主体という状況ではないが一定量出土する。

瀬戸美濃陶器は碗・皿・鉢などの食膳具、調度具の壺が出土する。このうち食膳具が多いが、その組成では土師質土器や肥前陶器と比べると出土量は僅かである。品質は志野焼、黄瀬戸などの「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器が多く、量産品は少ない。肥前陶器は食膳具の碗・皿・鉢が中心である。その組成を見ても土師質土器皿 87.8%、肥前陶器碗 1%、肥前陶器皿 0.6%、肥前陶器鉢 0.2%、中国製磁器碗 2%、中国製磁器皿 1.1%と他の産地に比べて比率は低い(第 39 図)。

和歌山県和歌山市の神前遺跡は集落跡で(第 36 図 - 8)、SD-25 は 17 世紀前期の溝跡である。計測分析できなかったが、産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、中国製磁器が出土する。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具で、このうち食膳具と調理具が多い。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺が出土する。皿は手づくね成形とロクロ成形がある。皿の一部には灯火芯を残すものもあり、灯火具として使用したことがわかる。焙烙の器形は難波分類の A 類・C 類がある。瓦質土器は火鉢のみである。備前焼は播鉢・鉢があり、播鉢は備前焼のみである。瀬戸美濃陶器は皿が出土し、肥前陶器に比べると僅かであり、「桃山陶器」に分類される高級品はない。肥前陶器は碗・皿が出土する。品質は量産品が主体だが絵唐津も僅かに含む。

17 世紀後期

大和郡山城下町旧奥野家 SX-01 は 17 世紀中期～後期の廃棄土坑である。大和郡山城は

柳沢氏 15 万 1 千石の城下町である。旧岡田家は紺屋が集住した「紺屋町」に所在する（第 36 図 - 3）。

産地別組成を見てみると土師質土器 59%、瓦質土器 7%、信楽焼 14%、堺・明石焼 1.2%、瀬戸美濃陶器 0.5%、肥前陶器 2.3%、肥前磁器 15%にわかれる（第 37 図）。用途別組成は調理具 59%を中心とし、食膳具 24%、調度具 11%、貯蔵具 6%が続く（第 38 図）。

土師質土器は皿・土釜である。皿は手づくね成形で灯火芯を残すものが目立つ。鍋類は焙烙がなく、土釜が出土する。瓦質土器は火鉢がみられる。信楽焼は播鉢である。17 世紀前期の奈良町遺跡では瓦質土器が目立ったが、本遺跡では信楽焼播鉢が多く出土する（第 40 図）。肥前磁器は食膳具の碗・皿が中心で、その組成で本産地が 57%を示す。器種は碗・皿以外に小坏や鉢が出土する。肥前陶器は皿が僅かみられる（第 39 図）。

17 世紀代の他遺跡の状況は、土師質土器、瓦質土器の出土量が奈良県、和歌山県ともに多い。これら土器類は皿・鍋類の特徴から在地産が中心である。鍋類は、奈良県は奈良町遺跡の資料が示すとおり土釜が主流で、その一方、和歌山県は 17 世紀初頭から焙烙が多い。奈良県で焙烙が出現する時期は不明だが、増加するのは 17 世紀後期からである。焼締陶器については、奈良県は 17 世紀前期までは備前焼、信楽焼が拮抗する。17 世紀中期に至ると、大和郡山城下町跡の SD-2 の状況を見ると備前焼より信楽焼が多くなる。奈良県で信楽焼の出土例が増えるのもこの時期からであり¹⁰、17 世紀中期～後期に焼締陶器の主体が信楽焼に移行すると考えられる。和歌山県は備前焼、丹波焼、信楽焼が出土するが、和歌山城跡の資料から備前焼が圧倒的に多い。

施釉陶器・磁器は肥前陶器の分布状況を見ると（第 34 図）、奈良町遺跡、和歌山城跡（第 36 図 - 6）、根来寺跡（第 36 図 - 7）などの都市部を中心に、初期のものとする岸岳系の皿が僅かに出土する。胎土目段階に至ると、馬司遺跡（奈良県大和郡山市 第 36 図 - 4）や秋月遺跡（和歌山県和歌山市 第 37 図 - 9）などの集落でも出土し、広域に流通する。また、先に上げた奈良町遺跡や和歌山城跡のように肥前陶器が施釉陶器・磁器の中心となるが、その組成は和歌山・奈良県とも同じである。

その後、17 世紀前期に肥前磁器が出現すると考えられるが、それを示す資料はない。初期伊万里の分布状況を見ると都市部に集中する（第 35 図）。17 世紀中期～後期と考えられる腰張筒型碗の分布状況を見ると、集落でも出土例があることから、おそらくこの時期から広く流入すると考えられる。また、同じ施釉陶器・磁器である瀬戸美濃陶器は和歌山県・

¹⁰ 山川 均・中島和彦氏よりご教示を得た。

奈良県ともに出土量は少ない。出土状況も共通し、器種は「桃山陶器」に分類される志野焼、織部焼などの懐石具や茶器で、これらは都市部に集中する。しかし、奈良県大和郡山市の馬司遺跡は大和郡山城下町跡に近接する集落遺跡である。ここのSD-02から志野焼、織部焼の鉢が出土し、集落にも僅かに流入することがわかる。ただ、瀬戸美濃陶器が出土するのは17世紀中期迄であり、17世紀後期にはほとんどみられず、肥前陶器、肥前磁器が施釉陶器・磁器の主体となる。この組成は他の和歌山・奈良県の遺跡でも共通する。

② 18世紀代

17世紀後期～18世紀前期

本時期の資料として平城京第424次調査(奈良町遺跡)のSE17が挙げられる。産地別組成を見てみると土師質土器37%、瓦質土器19%、備前焼2%、信楽焼12%、軟質施釉陶器0.7%、肥前陶器9%、京焼系陶器1%、中国製磁器4.3%、肥前磁器15%にわかれる(第37図)。用途別組成は調度具51.5%、食膳具30%、調理具9%と続く(第38図)。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺が出土する。皿の成形は手づくねのみである。食膳具に属するものが多く、その組成で46.3%を示す(第39図)。焙烙の器形は難波分類のF類が多く、本時期には鍋類は焙烙に主体が移行する。瓦質土器は鉢類・風炉・壺・釜がある。このうち鉢類は大きさ・器形にバリエーションがみられ分類するのに困難なものがあり、多くは調度具に分類した。そのために調度具の比率が高くなった。

信楽焼は播鉢と甕が出土する。調理具組成では信楽焼播鉢が独占し(第40図)、17世紀代では備前焼、丹波焼が出土したが、本時期にはほとんどはみられない。また、甕は備前焼が15%と前代より減る。肥前陶器は食膳具の碗・皿・鉢が出土する。この中で碗はその組成で13%と肥前磁器碗に続くが、それ以外は肥前磁器と大差がある(第39図)。京焼系陶器は本時期から出現する。全体の比率は低いが、食膳具の碗、調理具の鍋がみられる。肥前磁器は施釉陶器・磁器で一番高い比率を示す。食膳具の碗・皿・鉢、調度具の瓶類があり、食膳具組成では土師質土器に次いで高い比率である(第39図)。また、施釉陶器・磁器ではもっとも高い比率であることから、本時期に食膳具の急増により、施釉陶器・磁器の主体となったことがわかる。

大和郡山城下町跡紺屋町・新紺屋町地区SK-103は18世紀前期の資料である(第36図-3)。計測分析資料ではないが、産地別組成では土師質土器、瓦質土器、信楽焼、肥前陶器、肥前磁器が出土し、このなかで肥前磁器が多い。用途別組成は食膳具を中心とし、こ

れに調理具、調度具、貯蔵具が続く。

土師質土器は皿と焙烙がある。皿は灯明芯を残すものが多い。焙烙の器形は難波分類のF類のみで、前代では土釜が出土したが、本時期にはない。瓦質土器は火鉢が出土する。信楽焼は播鉢・甕が出土する。播鉢は信楽焼、堺・明石焼が出土し、主体は信楽焼播鉢である。甕は信楽焼が独占する。肥前陶器は食膳具の鉢・皿がみられる。同時期の遺構からは京焼風陶器碗、内野山窯の碗、刷毛目碗なども出土する。肥前磁器は食膳具の碗・皿が中心である。碗・皿の品質は「くらわんか手」などの量産品が中心で、高級品は少ない。食膳具以外に蓋物や神仏具などの調度具も僅かに含む。

18世紀後期

奈良県の状況としては筒井城跡7次調査SK-03をみると(第36図-5)、産地別組成は土師質土器、信楽焼、京焼系陶器、肥前磁器が出土する。土師質土器は皿・焙烙で、皿は手づくね成形が多い。焙烙の器形は難波分類のFb類がみられる。肥前磁器の主な器種は碗・皿で、京焼系陶器は色絵碗で、施釉陶器・磁器は食膳具が多い。

和歌山県の状況として、秋月遺跡8次調査SK-84がある。産地別組成は土師質土器、瓦質土器、堺・明石焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、京焼系陶器、肥前磁器が出土する。用途別組成は食膳具を中心とし、調理具、調度具、貯蔵具と続く。

土師質土器は皿・焙烙・焜炉が出土する。焜炉は本時期からみられる。焙烙の器形は難波分類のD類である。瓦質土器は火鉢・火入れが出土する。堺・明石焼は播鉢で、前代では和歌山城跡で備前焼、丹波焼が拮抗する値であったが、本遺構では堺・明石焼播鉢が独占する。瀬戸美濃陶器は食膳具の碗・皿が出土するが肥前磁器や京焼系陶器と比べると僅かである。肥前陶器は食膳具の鉢、調理具の片口など大型製品が中心である。京焼系陶器は碗が出土する。丸碗・小杉碗・端反碗と器形にバリエーションがある。肥前磁器は食膳具の碗・皿を中心とし、神仏具・化粧具・文具・壺などの調度具も出土する。品質は量産品の「くらわんか手」が多い。

18世紀代の他遺跡の状況は、産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、信楽焼、堺・明石焼、肥前陶器、肥前磁器が挙げられる。産地別組成は2県とも土師質土器、肥前陶器、肥前磁器は共通して出土量が多い。土師質土器は皿や焙烙の特徴から2県とも在地産が中心である。また、奈良県では依然として瓦質土器が大量に出土する。

焼締陶器は奈良県では信楽焼が中心で僅かに堺・明石焼が見られる。信楽焼は、18世紀前期では奈良町遺跡の状況のように、播鉢・甕を主とし各用途別組成で独占する。18世紀

後期に堺・明石焼播鉢が出現するが僅かで信楽焼播鉢を上回ることはない。和歌山県の 18 世紀初頭は備前焼、丹波焼が出土し、後者の出土量がやや多い。主な器種は播鉢・甕である。それが 18 世紀前期に堺・明石焼播鉢が出現すると一気にそれが主体となり、備前焼、丹波焼は僅かとなる。但し、甕については備前焼、丹波焼が多く 18 世紀初頭と変化がない。

③ 19 世紀代

18 世紀後期～19 世紀前期

奈良県奈良市の正暦寺境内 1・2 次調査 SX05 の (第 36 図 - 2) 産地別組成を見てみると、土師質土器 37%、瓦質土器 4%、備前焼 0.2%、信楽焼 8%、瀬戸美濃陶器 0.2%、肥前陶器 1.4%、京焼系陶器 32.2%、肥前磁器 15%にわかる (第 37 図)。用途別組成は食膳具 42%、調理具 18%、貯蔵具 8%、調度具 32%である (第 39 図)。

土師質土器は 18 世紀代の奈良町遺跡と同様に皿が中心である。皿は手づくね成形のみである。また、灯火芯を残すものが多い。調理具組成をみると土鍋類は瓦質土器羽釜 18%で、焙烙は出土していない (第 40 図)。瓦質土器は調理具の羽釜、調度具の火鉢、貯蔵具の甕がある。信楽焼は調理具の播鉢、貯蔵具の甕で、播鉢は調理具組成をみると信楽焼のみで、本産地が主体である (第 40 図)。

京焼系陶器は食膳具の碗・鉢、調理具の土鍋・土瓶・爛徳利、貯蔵具の壺、調度具の灯火具・尿瓶と豊富な器種組成である。特に、煮沸具は調理具組成をみると京焼系陶器土瓶 32%、京焼系陶器土鍋・行平 21%と高い比率を示す (第 40 図)。18 世紀代の奈良町遺跡の資料で土鍋は出土したが、本時期には土鍋より行平が多い。また、土瓶も鍋類に近接する比率であることから、煮沸具が一気に上昇したことがわかる。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の蓋物である。食膳具組成をみると肥前磁器 60%と半数以上を示し、その多くが碗である (第 39 図)。この他、瀬戸美濃磁器はこの時期から出現するが、器種は碗のみで量も僅かである。肥前陶器は鉢、堺・明石焼は播鉢が出土するが僅かである。

奈良県大和郡山市の筒井城跡 7 次調査 SX-04 は 19 世紀前期～中期の一括廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 7%、瓦質土器 0.3%、堺・明石焼 16%、瀬戸美濃陶器 6%、肥前陶器 0.7%、京焼系陶器 29%、肥前磁器 30%、瀬戸美濃磁器 11%とあり、京焼系陶器・肥前磁器が高い比率を示す (第 37 図)。用途別組成は食膳具 57%と高く、これに調理具 27%、貯蔵具 3%、調度具 32%にわかる (第 38 図)。

土師質土器は皿・焙烙・焜炉が出土する。皿の成形は手づくねのみである。焙烙の器形は前代と変わらず難波分類のFb類で、18世紀代に比べると出土量は減る。焜炉は本時期から出現するが、瓦質土器の方が多い。瓦質土器は焜炉・火鉢がある。信楽焼は貯蔵具の甕が出土する。貯蔵具組成をみると信楽焼甕100%と高い比率を示す(第41図)。前代まで多く出土した播鉢は調理具組成をみると堺・明石焼播鉢35%のみだが(第40図)、同時期の遺構からは信楽焼播鉢の出土例がある。

京焼系陶器は食膳具の碗・皿、調理具の土瓶・行平・徳利、調度具の灯火具・火鉢と豊富な器種組成である。碗・皿の中には地元の赤膚焼の製品が僅かに含まれる。刻印を施すものについて分類は可能であるが、ないものは困難であり、どの程度含まれるかは不明である。京焼系陶器の片口・土鍋などの調理具は、その組成をみると京焼系陶器片口18%、京焼系陶器土鍋29%とこれらを合わせると半数が京焼系陶器の調理具が占める(第40図)。灯火具は18世紀後期から出現するが、増加するのは本時期からであり、また、本遺構では皿のみであるが受付・台付なども出土する。

肥前磁器は、食膳具の碗・皿、調度具の神仏具・化粧具・文具が出土する。碗は、食膳具組成をみると56%と半数を占める(第39図)。品質は量産品が大半で高級品はほとんど含まれない。器形は広東碗・端反碗・望料碗などが中心で、小型の端反碗が僅かに出土する。また、碗に比べて皿は1%と少ない。瀬戸美濃磁器は本時期から出現する。器種は端反碗のみである。食膳具組成をみると28%と高い比率を示す(第39図)。

19世紀代の他遺跡の状況は、主な産地は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、信楽焼、堺・明石焼、肥前陶器、京焼系陶器、肥前磁器が出土する。産地別組成は2県とも肥前磁器、京焼系陶器が共通して出土例が増える。その一方で、18世紀代に出土量が多かった土師質土器や瓦質土器は施釉陶器・磁器より減る。

土師質土器は2県とも前代より出土量が激減する。器種は皿・焙烙・焜炉が中心である。皿・焙烙の成形・器形の特徴から在地産と考えられる。皿は2県とも減少するが、奈良町遺跡では依然として半数近い比率を示す¹¹。一方で、焜炉と火鉢は、和歌山県は土師質土器であるのに対して奈良県では瓦質土器が主体で材質に違いがある。信楽焼は奈良県では焼締陶器の中心であり、主な器種は播鉢・甕で、これらの用途別組成で信楽焼が独占する。和歌山県では焼締陶器は備前焼、丹波焼、信楽焼、堺・明石焼と多種にわたり、器種によ

¹¹ 未報告の為分析できなかったが、奈良町遺跡で19世紀前期～中期の一括廃棄土坑が検出され、奈良市教育委員会の中島和彦氏のご厚意により全出土遺物を実見させていただき、19世紀代も引き続き土師質土器皿が多いことがわかった。

って主産地が異なる。播鉢は堺・明石焼が多く、これに備前焼がごく僅かに出土する。甕は湊焼、備前焼、丹波焼が競合し、地域によってその組成は異なる。

京焼系陶器は、都市部では先の正暦寺の器種組成が示すとおり食膳具、調理具、調度具と豊富な器種組成である。18世紀代では国産陶器は肥前陶器が2県ともに高い比率を示したが、本時代には激減し、京焼系陶器が主体となる。本産地の主な器種は調理具の土瓶・土鍋などの煮沸具で、これらは時代の経過とともに出土量が増えていく。肥前磁器は食膳具を中心とし、その組成でこれが大半を占める遺跡が多い。また、和歌山城跡など都市部では神仏具・化粧具・文具などの調度具の出土例が増える。

この他に、19世紀前期には和歌山城下町跡で南紀男山焼、大和郡山城跡では赤膚焼など地元の陶磁器窯が出現し、周辺の遺跡で出土する。ただ、数値には示せないが、先に述べた大生産の製品を脅かすには至らない。また、萩焼の碗、瀬戸美濃陶器の碗は奈良・和歌山両県から、瀬戸美濃陶器の水鉢・火鉢、備前焼の小型製品・徳利は和歌山城跡で出土し、産地別組成が増える。

④ 小結

和歌山・奈良県の近世遺跡は、江戸時代を通して土器・陶磁器の変遷を検討できる遺跡はなく、奈良町遺跡、筒井城跡など単発の一括廃棄土坑を中心に雑駁ではあるが検討した。

土器・陶磁器の様相は、肥前陶器、京焼系陶器、肥前磁器などの出現時期や品質の差異はあるが、和歌山・奈良県において大まかな器種組成は共通する。その一方で、土師質土器、瓦質土器などの在地土器は器種・材質の変化や焼締陶器の産地別組成が異なり地域性がみられた。まとめると、以下の通りである。

17世紀代は、和歌山・奈良県ともに、16世紀末～17世紀前期の産地別組成は土師質土器、瓦質土器、肥前陶器が中心で、17世紀中期からは肥前陶器に変わって肥前磁器が施釉陶器・磁器の主体となる。用途別組成は調理具、食膳具が拮抗もしくは後者が多く、これに貯蔵具が続き、調度具は2県とも少ない。

土師質土器は皿・鍋類、瓦質土器は火鉢で、それらの成形、胎土の色調から在地産が中心であり、この組成は江戸時代を通して変化はない。また、奈良県の土師質土器鍋類は17世紀前期までは土釜が主流で、焙烙が多くなるのは17世紀後期に至ってからである。その一方、和歌山県は17世紀初頭から焙烙が中心である。焼締陶器は両県で異なる組成を示す。奈良県は17世紀前期までは信楽焼が多く、これに備前焼が加わる。17世紀中期に

至ると備前焼は減り、信楽焼がほぼ独占する。一方、和歌山県の 17 世紀代は備前焼が圧倒的に多く、それに丹波焼、信楽焼が僅かに加わっていた。

施釉陶器・磁器の肥前陶器、肥前磁器は食膳具を中心に出土する。また、これらの分布状況をみると（第 36・37 図）、肥前陶器は奈良町遺跡、和歌山城跡などでは初期の製品が出土するが、出土例が増えるのは 17 世紀前期以降である。その後は初期伊万里の分布状況をみると、やはり都市部に集中する。都市部以外では 17 世紀中期～後期と考えられる筒型腰張碗の出土例が増えてからで、都市部とそれ以外の地域では時期差がみられる。また、瀬戸美濃陶器は和歌山・奈良県ともに出土量は少なく、出土するのは「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器が都市部に集中して出土する。

18 世紀代の産地別組成は、2 県とも土師質土器、肥前陶器、肥前磁器が中心で、前代で多く出土した瓦質土器は減少する。ただ、奈良県では瓦質土器は前代より比率を下げるが肥前磁器と拮抗もしくは近接する比率であり、依然として高い。用途別組成は 2 県とも共通し、食膳具が主体となる。これに調理具、貯蔵具、調度具が続き、また、都市部では調度具の比率が僅かに上がる。

土師質土器は皿・焙烙の特徴から 2 県とも在地産が中心である。また、奈良県では本時期から土鍋に変わり焙烙が中心となる。焼締陶器の主な器種は播鉢・甕と変化はないが、産地別組成は両県で異なる。奈良県は信楽焼が高い比率を示す。播鉢は信楽焼が半数以上を占め、これに堺・明石焼が僅かに出土する。甕については信楽焼がほぼ独占である。和歌山県は、18 世紀初頭は備前焼と丹波焼、18 世紀前期以降は堺・明石焼が出現し、先の産地に加わる。これらは器種によって組成が異なり、播鉢は堺・明石焼が中心で、これに備前焼、丹波焼がごく僅かに出土する。一方、甕は備前焼、丹波焼が競合する組成で、焼締陶器は 17 世紀代と同様に 2 県でその組成が異なる。

肥前陶器、肥前磁器は前代に引き続き食膳具を中心とし、特に、都市部では食膳具組成で肥前磁器が半数以上を示す。「くらわんか手」碗が 2 県で広域に分布し（第 35 図）、その範囲は 17 世紀代よりさらに広がり、陶磁器の受容が増えたと考えられる。さらに、18 世紀前期には都市部を中心に京焼系陶器が出現し、その範囲は除々に広がり、18 世紀末から都市部以外でも碗・土瓶・鍋類などが出土する。特に煮沸具は 2 県で急増し、これにより産地別組成で肥前磁器と近接する値を示す。

19 世紀代は、産地別組成は 2 県とも肥前磁器、京焼系陶器は共通して高い比率で、その一方で、18 世紀代に比率の高かった土師質土器や瓦質土器は先に述べた施釉陶器・磁器よ

り比率を下げる。また、萩焼や大谷焼（和歌山県のみ）などをはじめ、和歌山県の南紀男山焼、奈良県の赤膚焼など地元の陶磁器も加わる。

用途別組成は食膳具が2県とも高い比率で、これに調理具、調度具、貯蔵具という組成である。2県とも共通するのは調理具が食膳具に近接することと、調度具が貯蔵具より上回ることである。変化の理由も共通し、調理具は京焼系陶器の煮沸具の増加、調度具は在地土器の厨房具・暖房具、京焼系陶器の灯火具の急増による。また、地点の性格により受容差はあるが肥前磁器の神仏具・化粧具・文具などの影響もある。

土師質土器は2県とも前代より出土量が激減し、主な器種は皿・焙烙が中心であることも共通する。異なる点として、厨房具・暖房具である焜炉・火鉢は、和歌山県は土師質土器であるのに対して奈良県では瓦質土器が主体で材質に違いがある。焼締陶器は、2県とも18世紀代と状況に変化はなく。主産地が異なる。肥前磁器は18世紀代と変わりなく食膳具を中心とし、食膳具組成でもこれが大半を占める遺跡が多い。この時期に奈良・和歌山両県で瀬戸美濃磁器や京焼系磁器の食膳具が出現するが、肥前磁器に大きな影響はない。京焼系陶器は、先の通りに煮沸具、灯火具が急増するが、それ以外に食膳具の碗、調度具の尿瓶や香炉など豊富な器種が出土する。

5 大阪（第1・2図）

大阪府の江戸時代は摂津、河内、和泉にあたる。近世遺跡を代表する大坂城跡、堺環濠都市遺跡をはじめ、麻田藩陣屋跡、枚方宿遺跡、久宝寺寺内町遺跡、若宮遺跡、岸和田城跡が挙げられる。しかし、江戸時代を通して土器・陶磁器の変遷を検討できる遺跡は少ない。その中で麻田藩陣屋跡、堺環濠都市遺跡¹²は計測分析することができ、その成果を中心に検討する。それ以外の地域についても一括廃棄土坑や広域流通品の分布状況から、土器・陶磁器の様相を述べる。

① 17世紀代

16世紀末～17世紀前期

本時期は、肥前磁器を含まない時期で、堺環濠都市遺跡、枚方宿遺跡などで良好な一括資料がある。

¹² SKT959の資料をもとにその変遷を述べるが、堺環濠都市遺跡は中・近世を代表する大都市であり、一部の資料でその都市の様相を判断するのは難しいと考えるが、他の調査地点から検出した遺物組成と検討しても高級品の受容差はあれど、それ以外は大差ないと考えられる。

堺環濠都市遺跡は南北朝からの港湾都市である（第2図-11）。15世紀後期からは国際貿易都市として発展し、織豊期には信長・秀吉の支配下のもとで、千利休や古田織部などの茶人を生み繁栄する。天正14年（1586）に秀吉によって外堀は埋め戻され、それに追い討ちをかけるように元和元年（1615）の大坂夏の陣によって町は焼失する。その後、江戸時代は徳川氏の支配のもと近世都市として再興され商業都市として栄える。

SKT959 地点 014 井戸の産地別組成は、土師質土器 41%、瓦質土器 4%、備前焼 7%、丹波焼 4%、瀬戸美濃陶器 0.7%、肥前陶器 18%、上野・高取焼 6%、中国製磁器 17.1%と土師質土器が半数近い比率を示す（第43図）。用途別組成は食膳具が 49%と中心で、これに調度具 20%、調理具 19%、貯蔵具 12%が続く（第44図）。

土師質土器は皿・焙烙・甕などが出土する。その中で皿と焙烙は各用途別組成で高い比率を示す。皿は手づくね成形とロクロ成形がある。口縁部に灯火芯を残すものが多く、調度具組成をみると 100%と高い比率を示す（第48図）。また、胎土やその成形の特徴から皿は在地産と考えられる。焙烙の器形はすべて難波分類のA類である。鍋類は他の遺構で瓦質土器羽釜があるが主体は焙烙である。備前焼は調理具の播鉢・徳利、貯蔵具の甕が出土する。このうち甕は貯蔵具組成をみると備前焼 60%、土師質土器 40%にわかれ、備前焼が独占する（第47図）。他の地点では丹波焼や常滑焼が出土するが圧倒的に備前焼甕が多い。

肥前陶器は食膳具のみで、その組成は土師質土器皿 35%、瀬戸美濃陶器碗 1.5%、瀬戸美濃陶器皿 1.5%、肥前陶器碗 3%、肥前陶器皿 20%、肥前陶器鉢 1.5%、肥前陶器小坏 1.5%、中国製磁器碗 6%、中国製磁器皿 26%、中国製磁器小坏 4%と、土師質土器、中国製磁器より比率は低い、同じ国産陶器である瀬戸美濃陶器と比べると大差があり、国産陶器では肥前陶器が主体であることがわかる（第45図）。瀬戸美濃陶器は他の遺構では少し高い比率を示す場合もあるが、総じて 10%台と肥前陶器より比率は低い。本遺構では量産品皿が中心だが、他の遺構では志野焼、織部焼などの「桃山陶器」に分類される懐石具が目立つ。上野・高取焼は播鉢のみである。本遺構の調理具組成では本器種が 32%と高い比率を示すが（第46図）、他の遺構では圧倒的に備前焼播鉢が多い。中国製磁器は食膳具のみで碗・皿・小坏がある。景德鎮窯が中心だが、皿については漳州窯系が目立つ。本産地は食膳具組成で土師質土器に次いで高い比率であり、施釉陶器・磁器でも肥前陶器と大差があることから、本時期における食膳具の主器種の一つである。

17世紀中期～後期

麻田藩陣屋跡は、江戸時代は東摂津、現在は豊中市蛍池中町に所在する（第2図 - 4）。1万石の大名青木氏によって営まれた陣屋で、大坂夏の陣（元和元年1615）以後、陣屋を設けたと考えられており、明治4年（1871）の廃藩置県による陣屋の移転までここで営まれる。

麻田藩陣屋跡の土坑1267は17世紀中期～後期の廃棄土坑である。産地別組成を見ると土師質土器19%、丹波焼44%、肥前陶器6%、京焼系陶器9%、中国製磁器3%、肥前磁器19%にわかれる（第49図）。用途別組成は食膳具55%と調理具45%のみである（第50図）。

土師質土器は皿と焙烙が出土する。皿は手づくね成形で、灯火芯を残すものが僅かに含まれる。焙烙の器形は難波分類のD類のみである。丹波焼は調理具の播鉢で、同時期の遺構でも播鉢は本産地以外の製品はみられない。また、甕も同様に丹波焼が独占する。京焼系陶器は碗のみで、装飾は色絵碗である。この時期に大阪府内での出土例は本遺跡のみである。肥前磁器は食膳具の碗・皿で、その組成をみると土師質土器9%、肥前陶器9%、京焼系陶器14.5%、中国製磁器4.5%、肥前磁器63%と肥前磁器が圧倒的に高い比率を示す（第51図）。

堺環濠都市遺跡SKT959の137土坑は17世紀後期の廃棄土坑である。産地別組成は、土師質土器58.5%、瓦質土器2.6%、東播系須恵器0.1%、備前焼7%、丹波焼2.5%、堺・明石焼0.1%、軟質施釉陶器0.4%、瀬戸美濃陶器0.6%、肥前陶器6.8%、中国製陶器0.6%、東南アジア陶器0.8%、中国製磁器1.1%、朝鮮王朝陶磁器0.4%、肥前磁器20%と土師質土器が半数以上を占め、陶磁器では肥前磁器が高い比率である（第43図）。用途別組成は食膳具32%、調理具17%、貯蔵具6%、調度具45%にわかれる（第44図）。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・火鉢が出土する。皿は手づくね成形のみで、皿の70%に灯火芯が残り、大半は灯火具として使用する。焙烙の器形は難波分類のA・B・C・D・E類がありB類が70%を示す。瓦質土器は火鉢が90%と大半で、この他に鉢・羽釜・風炉・甕がある。備前焼は調理具の播鉢・徳利、貯蔵具の甕・壺、調度具の鉢にわかれる。播鉢は調理具組成をみると備前焼11%、丹波焼9%と両産地が拮抗する（第46図）。一方、甕は貯蔵具組成をみると備前焼42%、土師質土器36%、丹波焼4%、瓦質土器3%と備前焼甕が高い比率である（第47図）。軟質施釉陶器は灯火具と銚子が出土する。

瀬戸美濃陶器は香炉と茶入れが出土し、前代に出土した食膳具はない。肥前陶器は食膳具の碗・皿が出土し、その組成をみると碗9.5%に対して皿6%と碗が多い（第45図）。

装飾は刷毛目、呉器手、京焼風陶器があり呉器手が60%を占める。肥前磁器は施釉陶器・磁器で一番高い比率を示す。器種は食膳具の碗・皿・小坏、調度具の瓶・蓋物・化粧具などである。このうち食膳具組成をみると土師質土器皿37.5%、肥前陶器碗10.5%、肥前陶器皿6%、中国製磁器皿3.1%、中国製磁器鉢0.3%、朝鮮王朝陶磁器皿1.1%、肥前磁器碗32.5%、肥前磁器皿9%にわかれ、肥前磁器碗は土師質土器皿と近接する数値で、それ以外の産地とも大差がある（第45図）。

貿易陶磁器は、中国製磁器が16世紀末～17世紀前期の産地別組成と比べると激減する。器種は皿と鉢で、これらは先の通り肥前磁器に主体が移行する。朝鮮王朝陶磁器は皿で、本遺跡では17世紀初頭まで僅かに出土するが、本時期にはほとんど出土しない。軟質施釉陶器は壺である。東南アジア陶器はベトナム陶器の長胴壺のみで、これも17世紀前期では10%台は出土したが、本時期には減少する。

17世紀代の他遺跡の状況は、産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、軟質施釉陶器、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、中国製磁器と17世紀前期から肥前磁器が加わる。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具が出土し、食膳具を中心とする遺跡が多い。

土師質土器は産地別組成で主体とする遺跡が多く、17世紀代までは都市部でも施釉陶器・磁器より比率が高い。器種は皿・鍋類が主体である。皿は摂津、河内、和泉と大阪府全域において手づくね成形が中心である。ただ、成形方法は同じでも胎土の色調や後処理に違いがあり、同一製品の分布はかなり狭い範囲と考えられる。鍋類は、17世紀初頭は摂津の庄本遺跡(豊中市 第2図-6)では、その器形は難波分類のA類と大和型・播磨型の土釜が出土する。中河内の久宝寺寺内町跡(第2図-8)は難波分類のA類と大和型の土釜があり、和泉の岸和田城跡(第2図-15)では難波分類のA類と大和型、紀伊型の土釜が出土することから地域性がみられる。17世紀中期に至ると、大阪府では共通して焙烙が中心となり土釜は減る。器形は難波分類のB類と、17世紀後期に出現するD類が目立つ。また、北河内の枚方宿遺跡(第2図-7)では難波分類のD類と京都産焙烙が混合し、中河内の久宝寺寺内町跡でも難波分類のD類と奈良産のF類が混合するなど、京都、奈良に隣接する地域はそれら産地の焙烙が流入し、先の土釜の組成と共通する。また、中河内では土師質土器甕の比率が高く、他の地域では焼締陶器甕や陶器甕の比率が高く差異がある。

焼締陶器は備前焼、丹波焼、信楽焼が競合する。17世紀前期までは摂津、河内、和泉ともに備前焼が中心で、これに丹波焼が続く組成である。17世紀中期に至ると、摂津では丹波焼が大量に出土する。河内、和泉でも丹波焼の比率が上がり、備前焼より優勢となる。

各地で丹波焼の比率が上がるのは播鉢の急増によるものである。ただ河内や和泉の甕については依然として備前焼が多い。

施釉陶器・磁器は、肥前陶器は大阪府での出土例が多い。その出現時期は北河内の枚方宿遺跡や河内の堺環濠都市遺跡の層位的検証から、16世紀末にはこれらの遺跡では出土する。その分布状況は、初期の岸岳系の肥前陶器は都市部での出土例が目立つ（第34図）。多くなるのは胎土目段階から摂津、河内、和泉の全域で確認できる。三島手や刷毛目などの肥前陶器も17世紀前期でも初頭に近い時期に大坂城跡、堺環濠都市遺跡などの大都市では出現するが、多く出土するのは17世紀前期で大阪府全域に広がる。その一方で、瀬戸美濃陶器は16世紀末～17世紀前期以降は急激に減る。岸和田城跡では「桃山陶器」に分類される志野焼や織部焼の懐石具や茶器が一定量出土するが、それ以外の遺跡では少なく、集落跡ではほとんどない。肥前磁器の出現時期については、大阪府では大坂城跡以外では良好な資料はない。初期伊万里の分布状況をみると都市部に集中するが、集落でも僅かに出土する（第38図）。次の17世紀中期～後期と考えられる腰張筒型碗の状況を見ると集落での出土例が増え、岸和田城跡、久宝寺寺内町遺跡などの都市部では量が一気に増える。

② 18世紀代

17世紀後期～18世紀前期

本時期は、麻田藩陣屋跡、枚方宿遺跡、堺環濠都市遺跡、久宝寺寺内町遺跡などで一括廃棄土坑がある。

麻田藩陣屋跡落込み46は大型の廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器12%、瓦質土器0.7%、備前焼0.7%、丹波焼4%、軟質施釉陶器1.6%、肥前陶器12%、京焼系陶器19%、肥前磁器50%と肥前磁器が高い比率を示す（第49図）。用途別組成は食膳具76%、調理具14%、調度具10%にわかれる（第50図）。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・焜炉が出土する。皿の成形は手づくねのみである。焙烙の器形は難波分類のD類がみられる。瓦質土器は火鉢であり、本時期以降は減少する。軟質施釉陶器は灯火具のみで18%の比率を示す（第54図）。焼締陶器は丹波焼のみで、器種は鉢・播鉢がある。播鉢は17世紀代に引き続き丹波焼が独占する。本遺構では出土していないが、同時期の遺構からは丹波焼甕が出土し、それ以外の産地はない。

京焼系陶器は食膳具の碗・鉢、調理具の土瓶・土鍋という組成である。食膳具の碗・鉢

ともに色絵製品が中心で、碗は同じ施釉陶器である肥前陶器碗が7%に対して京焼系陶器碗17%と比率が高く（第51図）、その器形は丸碗が主体である。土瓶・土鍋などの煮沸具はこの時期から出土するが量は少ない。肥前陶器は食膳具の碗・皿・鉢で、このうち碗は肥前磁器、京焼系陶器と比べると比率は低い、鉢は食膳具組成をみると肥前陶器鉢8%と本産地のみである（第51図）。肥前磁器は、食膳具の碗・皿・鉢・小坏・猪口、調度具の瓶類・文具と食膳具を中心とする。碗は「くらわんか手」が70%と多く、中・高級品も20%出土する。

堺環濠都市遺跡 SKT959 の136土坑は17世紀後期～18世紀前期の廃棄土坑である。産地別組成は、土師質土器54%、備前焼3.7%、丹波焼2.2%、信楽焼0.4%、堺・明石焼0.5%、軟質施釉陶器0.8%、瀬戸美濃陶器1%、肥前陶器10%、京焼系陶器0.9%、中国製陶器0.6%、東南アジア陶器0.8%、中国製磁器0.8%、肥前磁器23.3%と土師質土器が半数以上を占め、陶磁器では肥前磁器が高く、17世紀後期と大差ない（第43図）。用途別組成は食膳具40%、調理具32%、貯蔵具14%、調度具14%と食膳具が中心である（第44図）。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・甕・火鉢・焜炉・瓦灯・ミニチュア土製品・十能・土錘が出土する。皿はすべて手づくね成形で、灯火芯を残すものが70%含む。焙烙の器形は難波分類のB類・E類を中心とし、C類・D類も出土する。甕は貯蔵具組成をみると、土師質土器58%、肥前陶器14.2%、丹波焼8%、ベトナム陶器7%、備前焼7%、瓦質土器1.8%にわかれ（第47図）、土師質土器甕が主体である。瓦質土器は17世紀代より比率は下がるが、前代と同様に羽釜・火鉢・甕が出土する。備前焼の器種は鉢・播鉢・甕・壺・灯火具・水注がある。播鉢は調理具産組成をみると備前焼9%、丹波焼5%、堺・明石焼1.9%、瀬戸美濃陶器0.3%、肥前陶器0.3%と備前焼播鉢が依然として高い比率である（第47図）。甕は先に示したとおり土師質土器が中心だが、備前焼は焼締陶器では一番高い比率を示す。堺・明石焼は本時期ら出現し、播鉢が僅かに出土する。軟質施釉陶器は調度具のみで灯火具・鬢水入がみられる。

瀬戸美濃陶器は食膳具の碗、調理具の播鉢、貯蔵具の甕・壺、調度具の香炉・水注と器種は多いが全体量は産地別組成が示すように少ない（第43図）。肥前陶器は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢、貯蔵具の甕、調度具の香炉・壺と食膳具を中心とする。この中で碗は装飾も刷毛目・三島手・呉器手・陶胎染付・京焼風陶器と多種にわたる。京焼系陶器は銚子・土鍋などの調理具が出土する。肥前磁器は食膳具の碗・皿・小坏・猪口、調度具

の神仏具・蓋物・瓶類・化粧具・文具など豊富な器種組成である。特に、碗・皿は量も多いが、器形にもバリエーションがある。中国製磁器は食膳具の碗・皿・鉢で、16世紀末～17世紀前期の伝世品が出土する。東南アジア陶器はベトナム陶器で、伝世品と考える長胴壺が出土する。

18世紀中期～後期

麻田藩陣屋跡土坑 654 は廃棄土坑である。産地別組成を見てみると、土師質土器 2.5%、備前焼 1%、丹波焼 7%、堺・明石焼 10%、瀬戸美濃陶器 2.5%、肥前陶器 7%、京焼系陶器 13%、産地不明陶器 3%、中国製磁器 1%、肥前磁器 53%にわかる（第 49 図）。用途別組成は食膳具が 60%と半数以上を占め、これに調理具 24%、調度具 12%、貯蔵具 2%と続く（第 50 図）。

土師質土器は、18世紀前期よりさらに比率を下げる。器種は皿のみで、手づくね成形とロクロ成形があり、本時期から後者が出現する。胎土・底部の糸切りの状況から軟質施釉陶器皿と共通する。本遺構からは焙烙は出土していないが、同時期の遺構からは難波分類のD類が多く出土する。瓦質土器は火鉢がみられる。備前焼は本時期でも出土量は少なく、器種は鉢のみ。丹波焼は鉢・播鉢・徳利がある。播鉢は調理具組成をみると丹波焼 15%に対して堺・明石焼 45%と後者が倍以上あり（第 54 図）、本時期に主体が移行する。また、本遺構からは甕は出土していないが甕は丹波焼が本時期でも多い。

京焼系陶器は食膳具の碗・鉢、調理具の土瓶・土鍋、調度具の蓋物・餌鉢が出土する。このうち土瓶・土鍋などの煮沸具は、18世紀前期と同様に高い比率である（第 52 図）。肥前陶器は鉢のみで、18世紀前期では碗・皿が中心であった。しかし、本遺構では出土しておらず、同時期の遺構でも僅かであり減少する。肥前磁器は前代に引き続いて食膳具を中心とする。器種は碗・皿・鉢、瓶類・水滴が出土する。また、碗・皿ともに組物が多い。中国製磁器は碗で 17世紀前期の伝世品である。

堺環濠都市遺跡 S K T 959 の 122 土坑は廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 51%、瓦質土器 2%、備前焼 2%、丹波焼 0.1%、信楽焼 5%、堺・明石焼 3%、軟質施釉陶器 0.3%、瀬戸美濃陶器 4.5%、肥前陶器 7%、京焼系陶器 4%、産地不明陶器 0.3%、中国製磁器 0.6%、肥前磁器 20.2%と、本時期でも土師質土器が中心である（第 43 図）。用途別組成は食膳具 28%、調理具 33%、貯蔵具 26%、調度具 13%にわかる（第 44 図）。

土師質土器は皿・焙烙・羽釜・甕・火鉢・焜炉・サナ・ミニチュア土製品が出土する。皿は調度具組成をみると、18世紀前期より比率を下げる（第 48 図）。皿の成形は本時期か

らロクロのものが出現するが、手づくねが多い。焙烙は前代と大差なく高い比率を示し、器形は難波分類のB類を中心としD・E・F類が僅かに出土する。火鉢や焜炉などの比率が本時期から上昇する。瓦質土器は焜炉と器台で厨房具が中心である。備前焼は18世紀前期よりさらに比率を下げる。器種は播鉢・徳利・甕・瓶類があり、甕を中心とする。甕は貯蔵具組成をみると土師質土器78%、信楽焼17%、備前焼3%と陶器甕は信楽焼甕が高い比率を示す(第47図)。同時期の遺構からは丹波焼甕も出土するが僅かであり、陶器甕の主体は信楽焼に移行する。丹波焼は播鉢・徳利・お歯黒壺で、このうち徳利が中心である。堺・明石焼は播鉢のみで、調理具組成をみると堺・明石焼13%、備前焼1%と前代と変わらない(第46図)。軟質施釉陶器は鬚水入れが出土する。

瀬戸美濃陶器の器種は碗・片口鉢・香炉・火落とし・水注・壺と調度具が中心である。肥前陶器は18世紀前期より激減する。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢・徳利、貯蔵具の甕と器種組成は前代と大差ない。しかし、中心である食膳具は肥前磁器の急増し、さらに京焼系陶器の出現によって全体量が減少する。京焼系陶器は食膳具の碗、調理具の土鍋、調度具の香炉・蓋物が出土する。碗は食膳具組成をみると、瀬戸美濃陶器5%、肥前陶器6.6%、京焼系陶器11%、肥前磁器35%と肥前磁器に次ぐ(第45図)。また、肥前磁器、肥前陶器共に口径11cm前後の中碗が中心なのに対して、京焼系陶器は端反碗・丸碗・筒形碗と口径8cm前後の小碗が中心であり、用途によって使い分けした可能性がある。また、本時期から調理具の土鍋が出現する。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢・小坏、調度具の神仏具・化粧具・蓋物・瓶類がみられる。食膳具組成では肥前陶器12.6%、京焼系陶器11.4%、肥前磁器51.4%と半数以上を占める(第48図)。中国製磁器は碗と皿が僅かに出土するが、16世紀末～17世紀前期の伝世品である。

18世紀代の他遺跡の状況は、産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、信楽焼、軟質施釉陶器、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、京焼系陶器、中国製磁器、肥前磁器が出土し、土師質土器・瓦質土器は18世紀代に比率を下げる遺跡が多く、特に瓦質土器は著しい。逆に、施釉陶器・磁器の比率が上がり、その中心となるのが肥前磁器である。この傾向は都市部に限らず農村部でも同じ傾向を示す。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具がみられ、食膳具を中心とする遺跡が多い。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢がある。皿は17世紀代と同様に地域によって異なり、18世紀前期は、北河内の枚方宿遺跡、東河内の久宝寺寺内町遺跡、和泉の岸和田城跡では手づくね成形のみであることから、18世紀代の大阪府は手づくね成形が中心と思われる。18

世紀後期に至ると、中河内、和泉ではロクロ成形のものが出現し、比率は先に述べた堺環濠都市遺跡の状況と共通し、やや手づくね成形が多い。摂津、北河内、中河内ではロクロ成形のものはごく僅かで、手づくね成形が主体である。鍋類は、摂津の南郷目代今西氏屋敷(豊中市 第2図-5)では難波分類のD類、北河内の枚方宿遺跡は難波分類のDと京都産、中河内の久宝寺寺内町遺跡では難波分類のD類・E類と僅かにF類、和泉の岸和田城跡は難波分類のD類・E類が出土するなど、焙烙は複雑な分布圏を形成する。

中百舌遺跡NHN15 次地点は豪農筒井家の屋敷跡で(第2図-12)、SD001・002は屋敷内の設けられた溝であり、18世紀前期の遺物が大量に出土する。ここの鍋類はSD002の調理具組成をみると土鍋50%のみで(第58図)、土師質土器焙烙は出土していない。同時期の遺構からも土鍋が多く出土し、同時期の他の集落での資料が少ないため、中百舌遺跡での組成が特異なのかどうなのかは不明である。それが18世紀後期に至ると、SE001で焙烙が99%、土釜1%に変わり、18世紀後期には都市部と同様に焙烙主体となる(第58図)。

焼締陶器の状況は、18世紀前期に堺・明石焼が新たに加わり、備前焼、丹波焼と競合する。堺・明石焼の主な器種は播鉢で、18世紀前期の大坂城跡や堺環濠都市遺跡では、一気に他の産地を退け、播鉢の主体となるが、この傾向は、他の大阪府の遺跡でも共通する。ただ、播鉢以外の製品については地域性がみられ、北河内の枚方宿遺跡は丹波焼と信楽焼、中河内の久宝寺寺内町遺跡では備前焼、丹波焼、南河内の狭山藩陣屋跡(第2図-13)は丹波焼、信楽焼、和泉の若宮遺跡(第2図-16)では備前焼と丹波焼が競合し、地域によって異なる。施釉陶器・磁器は、大阪府全域で肥前磁器が半数以上の高い比率を示す。それは都市部では17世紀後期、集落は少し遅れて18世紀前期に急増する。各地で多く出土するのは量産品の「くらわんか手」碗で、出土遺物が少ない遺跡でも必ず出土する。

北河内の枚方宿遺跡の三矢町地区第23次調査で宝永8年(1711)の火災層を検出した(第2図-7)。大量の火災に遭った陶磁器が出土した。産地別組成は、土師質土器6%、備前焼1%、丹波焼0.7%、信楽焼0.4%、堺・明石焼0.1%、瀬戸美濃陶器0.4%、肥前陶器16.7%、京焼系陶器0.7%、中国製磁器1%、肥前磁器78%と肥前磁器が半数以上を示す(第61図)。用途別組成は食膳具75%、調理具3%、貯蔵具1%、調度具20%にわかれる(第62図)。

もっとも多く出土するのは肥前磁器碗で、そのタイプは「くらわんか手」を中心とする量産品が多く、また組物になるものは少なく、文様も多種にわたる。その他の産地も使用

痕がないことから、これら遺物は「瀬戸物屋」の製品ではないかと考えられている¹³。そのためこれらは商品であり、消費者のニーズに合うものを揃えていたと察しえる。肥前磁器碗が60%ということは枚方宿においてこれの受容が多かったことがわかる。

肥前磁器に次いで出土例が多いのは肥前陶器である。先に述べた大坂城跡や麻田藩陣屋跡では18世紀中期から激減し、18世紀後期には施釉陶器の主体は京焼系陶器に移行する。中河内の中百舌鳥遺跡、久宝寺寺内町遺跡や宮町遺跡（八尾市 第2図-9）、和泉の若宮遺跡などをみると、18世紀前期に京焼系陶器は出土するが依然として肥前陶器が多い。年代幅の広い遺跡が多いため、転換時期の詳細はわからないが、京焼系陶器の煮沸具や灯火具が増える18世紀末までは施釉陶器の中心だったと考えられる。食膳具の碗・皿・鉢などを主体とし、和泉の岸和田城跡では僅かに播鉢も出土する。瀬戸美濃陶器・中国製磁器などは、出土例は少なく都市部で僅かに出土する程度で、中国製磁器は17世紀前期の伝世品が多い。また、18世紀後期から都市部を中心に瀬戸美濃陶器の出土量が僅かに増える。

③ 19世紀代

この時期は、麻田藩陣屋跡、堺環濠都市遺跡を初め、中河内の久宝寺寺内町遺跡、志紀遺跡、宮町遺跡、河内の中百舌鳥遺跡、和泉の若宮遺跡などで良好な廃棄資料がある。

19世紀前期

本時期の資料として、麻田藩陣屋跡がある。**麻田藩陣屋跡土坑 26**は18世紀後期～19世紀前期の廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器14%、備前焼1.3%、丹波焼6%、信楽焼0.5%、堺・明石焼3%、軟質施釉陶器2%、瀬戸美濃陶器5%、肥前陶器3.5%、萩焼0.25%、京焼系陶器26%、中国製磁器0.25%、肥前磁器35%、瀬戸美濃磁器1%、京焼系磁器2.2%と、肥前磁器が18世紀後期に引き続き一番高いが、次に続く京焼系陶器と比率値が狭まる（第49図）。用途別組成は食膳具45%、調理具32%、調度具22%、貯蔵具1%と食膳具を中心とするが、調理具との比率差が僅かとなる（第50図）。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・涼炉・乗燭・ミニチュア土製品が出土する。皿は調度具組成をみると18世紀後期より比率を下げる（第54図）。その一方で、火鉢・涼炉などの比率は18世紀代より上昇する（第54図）。皿は、ロクロ成形と手づくね成形があり、手づくね成形が優勢。焙烙は口縁部が残るものは少なかったが、その器形は難波分類のC類・

¹³ 下村節子「掘り出された茶碗屋一枚方宿遺跡一」『中世末～近世の貿易陶磁器流通の諸問題』第27回日本貿易陶磁研究会資料2006年

D類・E類・G類があり、このうちG類が多い。焼締陶器は備前焼、信楽焼、丹波焼、堺・明石焼がみられ、主な器種は播鉢・徳利・甕である。播鉢は調理具組成をみると堺・明石焼 12%、丹波焼 2%と 18 世紀後期と変わらず堺・明石焼播鉢が中心である（第 52 図）。徳利は調理具組成では丹波焼 8%、備前焼 2%と丹波焼徳利が主体である。徳利はいわゆる「貧乏徳利」と呼ばれるもので、備前焼徳利とはタイプが異なる（第 52 図）。甕は、貯蔵具組成をみると信楽焼甕のみである（第 53 図）。産地ごとにみると、備前焼は前代よりさらに比率を下げるが徳利・匙・壺が出土し、いずれも「伊部手」製品である。丹波焼は播鉢・徳利・甕・植木鉢が出土し、新たに植木鉢が加わり、嗜好品もみられ始める。

京焼系陶器は、食膳具の碗・鉢、調理具の土瓶・土鍋、調度具の灯火具・化粧具・文具・餌鉢・蓋物・瓶類と豊富な器種組成である。特に、土瓶・土鍋などの煮沸具は、調理具組成をみると土瓶 36%、土鍋 33%とこれらで半数以上を占める（第 52 図）。また、前代まで一定量を保っていた肥前陶器はさらに比率を下げる。器種は鉢のみで京焼風、刷毛目、三島手と文様は豊富であるが、前代までの組成とは大きく異なる。瀬戸美濃陶器は 17・18 世紀代ではほとんど出土しなかったが、本時期から僅かに出土し始める。器種は碗・植木鉢・香炉・火鉢と調度具が中心である。軟質施釉陶器は灯明皿・秉燭の灯火具のみである。調度具組成をみると、軟質施釉陶器 35%、京焼系陶器 2%、土師質土器 1%にわかれ、灯火具は軟質施釉陶器が中心である（第 54 図）。

肥前磁器は、食膳具の碗・皿・鉢・小坏・酒坏・猪口、調度具の神仏具・文具・段重・蓋物・瓶類と豊富な器種組成である。碗は丸碗を中心とするが、半球碗・筒型碗・望料碗・広東碗・小丸碗と器形にバリエーションがみられる。また、小坏・酒坏・猪口などの坏類の数値も 18 世紀代より比率が上がる。同じ磁器製品である瀬戸美濃磁器、京焼系磁器もこの時期から出現する。瀬戸美濃磁器は碗のみで、比率も僅かで肥前磁器碗に影響を及ぼすには至らない。京焼系磁器は碗・皿・鉢・瓶と比率は肥前磁器と比べると低い、瀬戸美濃磁器より器種は多い。

本遺跡では窯道具が大量に出土し、窯道具には青磁の溶着資料もあり、周辺で磁器生産を行っていたと考えられる¹⁴。また、その窯道具の特徴と組成から京焼の技術的影響を少なからず受けた窯があることがわかった。窯本体は検出していないが、大きなものではなくお庭焼窯程度ではなかったかと考えられる。

¹⁴ 赤松和佳他『豊中市蛸池町所在 麻田藩陣屋跡 一蛸池駅西地区第 1 市街地再開発工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』（財）大阪府文化財センター 2002 年

19 世紀前期～中期

麻田藩陣屋跡の落ち込み 5 は、廃藩置県による陣屋の廃止による転居に伴う大型の廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 7.2%、瓦質土器 0.9%、丹波焼 4.7%、信楽焼 1%、堺・明石焼 5%、肥前陶器 1.1%、萩焼 0.4%、京焼系陶器 41%、大谷焼 0.1%、産地不明陶器 0.5%、中国製磁器 0.1%、肥前磁器 29%、瀬戸美濃磁器 4.2%、京焼系磁器 1.7%、産地不明磁器 0.5%と京焼系陶器が一番高い比率で、前代まで一番高い比率であった肥前磁器を上回る（第 49 図）。用途別組成は食膳具 37%、調理具 41%、調度具 20%、貯蔵具 2%と食膳具と調理具が拮抗する（第 50 図）。

土師質土器は皿・鍋・焙烙・焼塩壺・秉燭・火鉢・焜炉・火消し壺・十能・サナ・ミニチュア土製品が出土する。皿はごく僅かとなり、成形はロクロと手づくねがある。また、すべて灯火芯を残し、灯火具として使用する。18 世紀代までは土師質土器の灯火具が中心であったが、調度具組成をみると軟質施釉陶器なく京焼系陶器 15.2%と主体が移行する（第 54 図）。焙烙の器形は難波分類の G 類と E 類がある。瓦質土器は風炉のみである。焼締陶器は丹波焼が一番高い比率である。器種は播鉢・徳利・甕・植木鉢・瓶類があり、甕は貯蔵具組成をみると信楽焼 42%、丹波焼 5%と信楽焼が高いが、同時期の遺構では丹波焼が多く、両生産地が拮抗する（第 53 図）。播鉢は調理具組成をみると丹波焼はさらに比率を下げ（第 53 図）、堺・明石焼 10%、丹波焼 1.5%、備前焼 0.1%と堺・明石焼播鉢が前代より比率を上げる。植木鉢は調度具組成をみると丹波焼 28%、土師質土器 6%とあり、同時期の遺構では堺・明石焼、瀬戸美濃陶器、肥前磁器が出土し、この中で一番多いのが丹波焼植木鉢である。また、植木鉢自体が調度具内で灯火具に次いで高い比率を示しており、嗜好品の比率が上がる。徳利は、この時期でも丹波焼 10%が独占し、僅かに備前焼 0.3%が出土する程度である（第 52 図）。丹波焼徳利のタイプはすべて「貧乏徳利」と呼ばれるものである。

京焼系陶器は、食膳具の碗・鉢・小坏、調理具の片口・急須・土瓶・土鍋・爛徳利・湯さまし、調度具の灯火具・神仏具・瓶類・尿瓶・餌鉢と豊富な器種組成である。その中でも土瓶、鍋類は 18 世紀後期～19 世紀前期（土坑 26）でも高い比率であったが、本時期にはさらに比率を上げ、調理具組成において他の器種と比率値に大差をつける（第 52 図）。これら京焼系陶器の調理具の増加で、産地別組成において肥前磁器より高い比率を示すこととなる。碗は肥前磁器と比べると比率は低い。しかし、タイプをみると端反碗や小杉碗などの小碗のみで、この大きさの碗を比較すると肥前磁器が中碗 40%に対して京焼系陶器

は小碗 10%と大差があり、用途によって材質の違う碗を使い分けしたと考えられる。瀬戸美濃陶器は若干増える。器種は食膳具の碗・鉢、調理具の徳利、調度具の灯火具・植木鉢・火鉢、貯蔵具の水鉢がある。その中で水鉢・火鉢などの大型製品の増加により比率を上げる（第 53・54 図）。肥前陶器は碗・皿・鉢・小坏があり、19 世紀前期と同様に鉢を中心とする。

肥前磁器は、食膳具の碗・皿・鉢・猪口・小坏・酒坏、調度具の神仏具・化粧具・文具・蓋物・段重・瓶類と 19 世紀前期より器種がさらに豊富となる。本時期でも碗・皿などの食膳具が高い比率で、その組成をみても（第 51 図）、肥前磁器 56.15%、瀬戸美濃磁器 14.55%、京焼系陶器 14.5%、京焼系磁器 5.15%、肥前陶器 4 %、瀬戸美濃陶器 3.65%、萩焼 1.4%、中国製磁器 0.6%と半数以上が肥前磁器であり、全体数では京焼系陶器より下がるが、食膳具組成では前代までと大きな変化はない。瀬戸美濃磁器は 19 世紀前期では碗のみであったが、本時期では碗・小坏・酒坏・湯のみ・皿と器種が増える。京焼系磁器も碗・皿・猪口・湯のみ・植木鉢・段重・瓶・急須と器種が豊富である。これら製品は、先にも述べたが、麻田藩陣屋跡に近接する窯で生産したのと考えられる。

堺環濠都市遺跡 S K T 959 の 006 井戸は、19 世紀前期～中期の遺構である。産地別組成は、土師質土器 16.8%、瓦質土器 3.6%、備前焼 0.7%、常滑焼 0.1%、丹波焼 3 %、信楽焼 2 %、堺・明石焼 6 %、軟質施釉陶器 0.5%、瀬戸美濃陶器 1.8%、肥前陶器 1.5%、萩焼 0.5%、京焼系陶器 37%、大谷焼 0.8%、産地不明陶器 0.2%、中国製磁器 0.8%、朝鮮王朝製陶磁器 0.2%、肥前磁器 22.2%、瀬戸美濃磁器 2 %、京焼系磁器 0.3%と（第 43 図）、18 世紀代まで産地の中心であった土師質土器に変わって京焼系陶器、肥前磁器が中心となる。用途別組成は食膳具 24%、調理具 45%、調度具 25%、貯蔵具 6 %にわかれる（第 44 図）。

土師質土器は、皿・焙烙・羽釜・甕・火消し壺・火鉢・焜炉・ミニチュア土製品が出土する。焙烙・焜炉・火鉢を中心とし、前代まで比率の高かった甕は下降する。皿はごく僅かとなり、灯火芯を残すものは少なくなる。焙烙の器形はD類が多く、A類が僅かにある。甕は貯蔵具組成をみると（第 47 図）、信楽焼 33%、土師質土器 24%、大谷焼 15%、丹波焼 10%、備前焼 5.2%、肥前陶器 1.5%と陶器の比率が高くなる。先のとおり、産地別組成で施釉陶器・磁器が土師質土器を上回っていた。これは京焼系陶器の煮沸具の急増による影響もあるが、18 世紀代まで土師質土器の中心であった皿・甕の激減によることも大きいと考えられる。焼締陶器の主な器種は播鉢・徳利・甕である。播鉢は、調理具組成をみ

ると堺・明石焼 10%と本時期でも独占する(第 46 図)。徳利は調理具組成では丹波焼 5%、備前焼 0.2%と丹波焼徳利が高い比率を示す(第 46 図)。タイプは「貧乏徳利」と呼ばれるものである。甕は先に述べたとおり、陶器の比率が上がる。中心となるのが信楽焼、丹波焼、大谷焼で、前代では信楽焼が高い比率であったが、本時期には丹波焼、大谷焼が加わる。

瀬戸美濃陶器は、18 世紀後期より若干比率が上昇する。器種は皿・鉢・片口・水鉢・壺・植木鉢と、食膳具を中心とした組成から大型の貯蔵具、調度具を主とする組成へ変化する。肥前陶器は減少し、食膳具の碗・皿・鉢が僅かに出土する程度となる。萩焼は本時期から出現し、器種はピラカケ碗のみである。京焼系陶器は 18 世紀代より急増する。器種は、食膳具の碗、調理具の片口・急須・土瓶・土鍋、調度具の灯明皿・水注と豊富な器種組成である。このうち調理具は組成をみると土瓶 36.7%、鍋類 31%と大半を占める(第 46 図)。土瓶・鍋類などの煮沸具は堺環濠都市遺跡では 18 世紀代から出土するがごく僅かで、本時期に、これら煮沸具が一気に急増し、その影響により産地別組成で京焼系陶器がもっとも高い比率を示すようになる。また、18 世紀代にはなかった片口・急須・爛徳利などの調理具や調度具の蓋物など新たな器種が増えたことも要因の一つと考えられる。

肥前磁器は、食膳具の碗・皿・鉢・小坏・酒坏、調度具の神仏具・化粧具・文具・蓋物・段重・瓶類・壺と、18 世紀代と変わりなく豊富な器種組成である。主とするのは碗・皿で、このうち碗は「くらわんか手」碗を中心とし半球碗・筒型碗・広東碗・端反碗とバリエーションがみられる。また、産地別組成の比率では京焼系陶器より低いが、主体となる食膳具組成をみると肥前磁器 75.4%、瀬戸美濃磁器 4.3%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 3%、中国製磁器 2.6%、萩焼 2%、京焼系磁器 0.6%、京焼系陶器 0.3%となり(第 45 図)、18 世紀代と同様に高い比率で、よって肥前磁器が変化したのでなく、京焼系陶器の煮沸具の急増による現れと考えられる。瀬戸美濃磁器は碗を中心に皿・小坏・蓋などがある。京焼系磁器は碗・鉢・蓋がみられる。これらの磁器は本時期から出現するが、産地別組成の比率をみてもわかるように肥前磁器に影響を及ぼすには至らない。

19 世紀代の他遺跡の状況は、産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、信楽焼、軟質施釉陶器、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、萩焼、京焼系陶器、大谷焼、中国製磁器、肥前磁器、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器が出土し、萩焼、大谷焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などの新たな産地が出現する。その一方で、土師質土器・瓦質土器は比率を下げる遺跡が増える。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具がみられ、食膳具を中心とする

遺跡が多い。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・焔炉などが共通して出土する。先に述べた麻田藩陣屋跡や堺環濠都市遺跡では 19 世紀に入り出土量が激減していた。このような状況は、北河内の枚方宿遺跡、東河内の久宝寺寺内町遺跡などでもみられる。皿の状況を掴める資料が少ない。北河内の枚方宿遺跡、東河内の久宝寺寺内町遺跡、和泉の金剛寺遺跡¹⁵（阪南市 第2図-14）ではロクロ成形と手づくね成形がある。鍋類は、大阪府では焙烙が中心で、その器形は摂津の豊中市の南郷目代今西氏屋敷では難波分類のD類、北河内の枚方宿遺跡は難波分類のD類と京都産、中河内の久宝寺寺内町遺跡では難波分類のD類・E類と僅かにF類、和泉の岸和田城跡は難波分類のD類・E類が出土し、地域性がある。この他、中河内では前代に引き続き甕が出土する。焼締陶器の組成は、播鉢は大阪府全域で堺・明石焼が主体である。摂津、北河内、中河内では丹波焼播鉢が僅かに出土するが、それ以外では出土例はない。甕については複雑で、摂津は丹波焼・信楽焼が中心で、19 世紀中期に大谷焼が加わる。北河内は枚方宿遺跡をみると信楽焼が多く、これに丹波焼が僅かに出土する。中河内、和泉は土師質土器が 18 世紀代より減少し、焼締陶器は増えるが一生産地が独占するのではなく、丹波焼・信楽焼が競合し、19 世紀中期には大谷焼が加わる。

施釉陶器・磁器は、大阪府全域で肥前磁器が高い比率を示し、集落においても同様である。中河内の志紀遺跡（八尾市 第2図-10）は集落遺跡である。1994 年におこなった2区の調査から近世の溝を検出し、ここから大量の陶磁器が出土した。その中心となるのが肥前磁器である。器種は碗・皿・鉢などの食膳具が大半を占める。碗のタイプは「くらわんか手」碗と端反碗が中心で、この他に広東碗、筒型碗などが出土する。18 世紀代の中百舌鳥遺跡や宮町遺跡などの集落跡の状況と比べると、碗の器形にバリエーションが増え、蓋物の数も目立つ。用途に応じて使い分けしたことが察しられ、このような用途の変化により出土量が増えた可能性が高いと考えられる。

麻田藩陣屋跡や堺環濠都市遺跡では、19 世紀前期～中期に京焼系陶器が肥前磁器を上回っていた。その原因も煮沸具の急増によるものである。北河内の枚方宿遺跡や中河内の久宝寺寺内町遺跡、和泉の若宮遺跡でも量比はわからないが、前代より煮沸具が急増し、肥前磁器と近接する組成に変わる。先に述べた志紀遺跡でも肥前磁器について京焼系陶器が高い比率で、その中心となるのが煮沸具である。ただ、先の2遺跡のように肥前磁器を上回る比率には至らない。これは同じ集落である中河内の宮町遺跡でも組成が似ている。

¹⁵ 包含層遺物でやや年代幅が広く、信用性に若干かけるが肥前磁器の組成から 18 世紀～19 世紀前期の遺構と考える。

このことから京焼系陶器の煮沸具の急増は、大都市・中規模都市と集落では出土量の強弱がみられる。また、この状況に関係するの大阪府内では、貝塚市の音羽窯、高槻市の小曾部焼など京焼系陶器窯が都市部に近接して点在し(第 68 図)、煮沸具をはじめ食膳具、灯火具を生産する。これら窯の出現は都市部で急増する受容と大きく関係すると考えられる。

この他の陶磁器については、枚方宿遺跡や久宝寺寺内町遺跡、狭山藩陣屋跡などでは堺環濠都市遺跡や麻田藩陣屋跡の組成と類似し、肥前陶器は激減し、瀬戸美濃陶器は大型製品が僅かに出土量を増す。また、萩焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などが新たに加わる。一方、集落でも肥前陶器、瀬戸美濃陶器、瀬戸美濃磁器などは出土するが、京焼系磁器については集落での出土例は少ない。

④ 小結

大阪府では、近世遺跡を代表する大坂城跡が有名であるが、それ以外でも麻田藩陣屋跡、堺環濠都市遺跡なども土器・陶磁器の状況がわかってきている。また、これら以外の遺跡でも数は少ないが良好な一括資料があり、それらを含めて検討した。

土器・陶磁器の様相は肥前陶器、肥前磁器、京焼系陶器などの施釉陶器・磁器の広域流通品の出現時期や大まかな器種組成は各地で共通する。その一方で、土師質土器の皿・焙烙などの成形やその変化、焼締陶器の産地別組成が異なり地域性がみられる。まとめると、以下の通りである。

17 世紀代は、産地別組成は、17 世紀前期は土師質土器、瓦質土器、肥前陶器、17 世紀中期に肥前陶器から肥前磁器に施釉陶器・磁器は主体が変わり、これらが産地別組成で主体となる。用途別組成は食膳具が多く、これに調理具、貯蔵具が続き、調度具は僅かである。

土師質土器は皿・焙烙、瓦質土器は火鉢がみられる。成形方法の特徴から在地産と考えられ、その広がりから小規模な流通圏を形成する。また、土師質土器の比率は麻田藩陣屋跡では 17 世紀中期から下降するが、堺環濠都市遺跡では依然として高い比率であるが、他の地点をみると減少傾向にある。また、枚方宿遺跡、久宝寺寺内町遺跡でも 17 世紀中期以降には出土量が徐々に減る。但し、集落の状況は不明である。焼締陶器の主な製品は播鉢と甕である。17 世紀初頭までは大阪府では備前焼が主体であるが、17 世紀前期には摂津、北河内では丹波焼が増え始め、17 世紀中期～後期には丹波焼に主体が移行する。そ

の一方で、中河内、和泉は備前焼が中心で、丹波焼は僅かである。

この他、貿易陶磁器は堺環濠都市遺跡では 17 世紀中期以降に減少するが、一定量は維持する。このような組成を示す遺跡は、大阪府では大坂城跡以外にはなく、その他は 10% 未満である。これらの遺跡で高いのは貿易都市及び政治の中心地であったためであろう。

施釉陶器・磁器は、肥前陶器、肥前磁器の食膳具が中心である。これらの分布状況を見ると、(第 34・35 図) 肥前陶器は堺環濠都市遺跡、岸和田城跡、枚方宿遺跡など都市部では岸岳系の製品が出土するが、その他は胎土目段階からこれは集落でも出土例がある。また都市部では胎土目段階から出土量が急増することから、17 世紀初頭以降、一気に流入すると考えられる。17 世紀前期に出現する初期伊万里の分布状況を見ると、これも都市部に集中する。都市部以外では 17 世紀中期～後期と考えられる筒型腰張碗の出土例が多い。肥前磁器が都市部以外で出土例が増えると、都市部とそれ以外の地域ではその受容内容に差異がみられる。瀬戸美濃陶器は出土量が少ない。特に都市部以外の遺跡は天目碗が僅かに出土するのみである。一方、堺環濠都市遺跡では「桃山陶器」に分類される志野焼や織部焼などの懐石具や茶器が多量に出土し、それ以外の遺跡でも「桃山陶器」は僅かに出土する。しかし、肥前磁器の出土量が増える 17 世紀中期～後期に至ると、その出土例は僅かとなる。

18 世紀代の産地別組成は、土師質土器、肥前磁器、肥前陶器が中心で、特に肥前磁器は 17 世紀代より比率を上げる遺跡が多く、それは都市部に限らず集落でも同様である。用途別組成は食膳具が主体で、都市部では調度具の比率が僅かに上がる。

食膳具組成は肥前磁器を中心とし、これに肥前陶器、京焼系陶器が続き、施釉陶器・磁器の組成は概ね共通する。これは 18 世紀前期に出現する肥前磁器の「くらわんか手」などの量産品が大量に流入するためである。それは 17 世紀にみられた都市遺跡と集落遺跡での量比の大差はなくなる。施釉陶器は 18 世紀前期までは肥前陶器、18 世紀後期からは京焼系陶器が中心となる。京焼系陶器は、18 世紀前期は大坂城跡や麻田藩陣屋跡では碗や鍋類が一定量出土したが、それ以外は都市遺跡では 18 世紀後期、集落遺跡は 19 世紀代から土瓶・鍋類などの煮沸具、灯火具が増加し始め、出土状況が異なっていた。その一方、土師質土器、焼締陶器の組成は、陶磁器とは異なり小・中規模の分布圏を形成するのは前代と変わらないが、焼締陶器については 18 世紀前期に堺・明石焼播鉢の出現、備前焼甕の減少する変化がみられた。

19 世紀代は、土師質土器は 18 世紀代よりさらに出土量は減り、肥前磁器・京焼系陶器

が主体となる。その組成は大阪府の遺跡で共通する。特に京焼系陶器は都市遺跡では 18 世紀後期～19 世紀前期には肥前磁器を上回り、陶磁器全体で一番高い比率を示す。この他、萩焼や大谷焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などの新たな産地も増える。用途別組成は食膳具を中心とするが、都市遺跡では 18 世紀後期～19 世紀前期に調理具が食膳具と拮抗する。これは京焼系陶器の煮沸具の増加によるもので、産地別組成で京焼系陶器の比率が上がるのはこの影響による。

6 兵庫（第 1・68 図）

兵庫県の江戸時代は、瀬戸内海側は摂津、播磨、淡路、中程は丹波、日本海側は但馬、丹後にあたる。近世の遺跡は、日本海側は皆無に等しく、実体はほとんどわかっていない。その一方で、瀬戸内海側は、先に述べた伊丹郷町遺跡を初めとして、西播磨の赤穂城下町跡、東播磨の姫路城跡、明石城武家屋敷跡、西摂津の兵庫津遺跡など数多く調査が行われている。その中で、兵庫津遺跡¹⁶、明石城武家屋敷跡¹⁷は土器・陶磁器の変遷がわかっており、これらの出土遺物を計測分析することができた。その成果を中心に検討するが、それ以外の地域について一括廃棄土坑や広域流通品の分布状況から、土器・陶磁器の様相を雑駁ではあるが検討する。

① 17 世紀代

16 世紀末～17 世紀前期

本時期は赤穂城下町跡、姫路城跡、兵庫津遺跡などで良好な一括資料があり、肥前磁器を含まない時期である。

西摂津の兵庫津遺跡は神戸市兵庫区に所在する（第 68 図 - 3）。瀬戸内航路の中継地として栄えた港湾都市である。本時期の資料として第 14 次地点の第 3・4 遺構面がある。

産地別組成を見ても（第 69 図）土師質土器 29%、瓦質土器 0.7%、東播系須恵器 2%、備前焼 24%、丹波焼 11%、瀬戸美濃陶器 7%、肥前陶器 24%、中国製磁器 7.3% で、土師質土器が一番多く出土し、これに肥前陶器、備前焼が続く。用途別組成は食膳具 47%、調理具 16%、貯蔵具 33%、調度具 4% と、食膳具が半数近い比率を占め、これに

¹⁶ 赤松和佳「兵庫津遺跡における土器・陶磁器の様相から見た比較研究 - 近世期食膳具の分析を中心に -」

『兵庫津の総合的研究』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター2008年

¹⁷ 稲原昭嘉「明石城武家屋敷跡における 17・18 世紀の器種構成」『関西近世考古学研究 V』関西近世考古学研究会 1997 年・稲原昭嘉「明石城武家屋敷跡に見る 18・19 世紀の器種構成について」『関西近世考古学研究

X』関西近世考古学研究会 2002 年

貯蔵具、調理具が続く（第 70 図）。

土師質土器は皿・土釜・甕・火鉢・焜炉が出土する。皿はロクロ成形と手づくね成形があり、法量もいくつかに分かれる。このうち法量の小さいタイプは口縁部に灯火芯を残すものが 60%を示す。鍋類は、焙烙は出土しておらず、中世からの継承する土釜タイプが中心である。備前焼は、調理具の播鉢、貯蔵具の甕・瓶類を中心とする。播鉢は調理具組成をみると備前焼 24%、丹波焼 16%と丹波焼播鉢と近接する比率だが、播鉢の中心で一番高い比率を示す（第 72 図）。次に貯蔵具組成をみると備前焼 55%、丹波焼 26.5%、土師質土器 5%、東播系須恵器 1%と、備前焼が一番高い比率を示す（第 73 図）。丹波焼は備前焼と器種組成が共通するが、先のとおり備前焼の比率を上回る器種はない。

瀬戸美濃陶器は食膳具の碗・皿が出土し、同じ国産陶器である肥前陶器に比べると僅かである。志野焼や織部焼などの「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器は含まず、無文の量産品が中心である。肥前陶器は食膳具の碗・皿、調理具の播鉢、貯蔵具の瓶類がある。このうち皿は食膳具組成をみると 36%と一番多く、次に多い土師質土器皿 29%と近接する（第 71 図）。品質は皿の見込みに胎土目や砂目などの目痕を残す量産品が大半を占める。中国製磁器は食膳具の碗・皿が出土する。その組成をみると中国製磁器は 13.6%と土師質土器、肥前陶器と比べると僅かである（第 71 図）。景德鎮窯の製品が多いが、皿は漳州窯系の製品も僅かに含む。

東播磨の姫路城跡は、兵庫県姫路市に所在する（第 68 図 - 5）。姫路城城南小学校地点土坑 3 の産地別組成を見てみると土師質土器 62%、備前焼 9%、丹波焼 2%、信楽焼 0.5%、軟質施釉陶器 0.5%、瀬戸美濃陶器 6%、肥前陶器 13%、中国製磁器 7%に分かれる（第 75 図）。用途別組成は食膳具 83%を中心とし、調理具 12%、貯蔵具 4%、調度具 1%と続く（第 76 図）。

土師質土器は皿・土釜が出土する。皿はロクロ成形のみで、口縁部に灯火芯を残すものがある。土釜は中世段階からみられるもので焙烙はない。備前焼は食膳具の鉢、調理具の播鉢、貯蔵具の甕、調度具の鉢が出土する。このうち播鉢は調理具組成をみると、備前焼 40%、肥前陶器 5%、産地不明 5%で備前焼播鉢が主体である（第 78 図）。甕も同様であり、貯蔵具組成では備前焼 50%、丹波焼 20%と備前焼甕が多い（第 79 図）。

瀬戸美濃陶器は食膳具の碗・鉢がある。碗は天目碗、鉢は志野焼で「桃山陶器」に分類されるものである。この他に、信楽焼鉢、軟質施釉陶器碗があり、これらも懐石具・茶器などに分類される。肥前陶器は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢・瓶類がみられる。

このうち食膳具組成で土師質土器皿 70%、肥前陶器皿 7%、肥前陶器碗 5%と続き（第 77 図）、陶磁器内では一番高い比率を示す。碗・皿は絵唐津を施す高級品も含むが、多くは量産品である。中国製磁器は碗・皿がある。食膳具組成では土師質土器 70%、肥前陶器 13.8%に次いで 7.8%を示し、先の産地と比べると数値に大差がみられる（第 77 図）。

17 世紀前期

本時期の資料として、赤穂城下町跡、明石城武家屋敷がある。東播磨の明石城武家屋敷跡は、兵庫県明石市に所在する（第 68 図－4）。元和 3 年（1617）に外様大名である小笠原忠政によって築かれた城であり、明治 4 年（1871）の廃藩置県まで存続する。

9 地点 SK04 は 17 世紀前期～17 世紀中期の年代観を示す。産地別組成では土師質土器 36%、備前焼 2%、丹波焼 12%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 36%、肥前磁器 11%にわかれる（第 81 図）。用途別組成は食膳具 79%、調理具 19%、貯蔵具 2%と食膳具を中心とする（第 82 図）。

土師質土器の主な器種は皿・焙烙・焼塩壺である。皿はロクロ成形と手づくね成形があり、前者が多い。出土した中には灯火芯を残すものがある。焙烙の器形は難波分類の A 類のみである。丹波焼は調理具の播鉢、貯蔵具の壺、調度具の鉢が出土する。播鉢は調理具組成をみると丹波焼 55%、備前焼 5%と圧倒的に丹波焼播鉢が多い（第 84 図）。本遺構では貯蔵具は壺であるが同時期の遺構からは甕が出土し、これら貯蔵具についても丹波焼が主体である。瀬戸美濃陶器は碗・鉢が出土する。碗は天目碗、鉢は志野焼で「桃山陶器」に分類されるものであり、量産品はない。肥前陶器は碗・皿・鉢と食膳具のみで、その組成で 45%と半数近い数値を示す（第 83 図）。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢が多く、本遺構では碗と皿の割合に差異はないが、同時期の遺構では碗 7 に対して皿 3 と圧倒的に碗が多い。

西播磨の赤穂城下町跡は兵庫県赤穂市に所在する（第 68 図－8）。赤穂城は浅野長政が正保 2 年（1645）に入封され、寛文元年（1661）に築城される。元禄 14 年（1701）に浅野長矩の江戸城での刃傷事件で浅野家は断絶し、その後、森長直が入城し、明治 4 年（1871）の廃藩置県まで森家が継承する。平成 15 年の調査で 17 世紀前期～中期の包含層で土器・陶磁器がまとめて出土した。産地別組成を見てみると土師質土器 12%、瓦質土器 5%、備前焼 12%、肥前陶器 31.1%、上野・高取焼 1%、中国製磁器 1%、肥前磁器 38%にわかれる（第 87 図）。用途別組成は食膳具が 77%と半数以上を占め、調理具 10%、調度具 9%、貯蔵具 4%と続く（第 88 図）。

土師質土器の主な器種は皿・焙烙・土鉢である。皿はロクロ成形のみで、その中には灯火芯を残すものも含む。焙烙の器形は難波分類のA類・C類が中心で、このほかに瀬戸内産の鍋もある。瓦質土器は火鉢と鍋が出土する。備前焼は調理具の播鉢・徳利、調度具の灯火具・鉢で、このうち播鉢が多く、これについては他産地のものはない。肥前陶器は食膳具の碗・皿、調理具の片口、調度具の神仏具がある。食膳具組成をみると碗は17%と高い比率を示し(第89図)、品質は碗・皿ともに絵唐津はなく、大半は量産品である。上野・高取焼は碗が出土する。産地別組成が示す通り、その量は僅かである。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢・小坏がみられる。碗・皿ともに高級品はなく、量産品が主体である。

17世紀代の他遺跡の状況は、産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、中国製磁器と17世紀前期から肥前磁器が加わる。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具がみられ、食膳具を中心とする遺跡が多い。

土師質土器・瓦質土器は産地別組成で比率が高い遺跡が多く、城下町跡以外では施釉陶器・磁器より比率が高い。これら土器類は皿・鍋類・火鉢の成形方法から在地産が中心である。但し、但馬、丹波の状況は不明である。皿は地域によって異なり、播磨では17世紀代はロクロ成形、17世紀後期から手づくね成形に主体が変わる。摂津は、西摂津は播磨と共通するが、東摂津では一貫して手づくね成形が主体である。ただ、成形方法は同じでも胎土の色調や後処理に違いがあり、同一製品の分布はかなり狭い範囲と考えられる。鍋は、17世紀初頭は播磨、摂津ともに土釜で、17世紀前期に焙烙が出現する。器形は難波分類のA・C類が出土し、17世紀中期～後期にはE類が加わる。焼締陶器は備前焼、丹波焼が競合する。丹波焼の生産地に近い丹波は17世紀を通して本産地が中心である。赤穂城跡や龍野城跡(第68図-7)などの西播磨は17世紀を通して備前焼が圧倒的に多い。東播磨、摂津では17世紀初頭は備前焼が優勢であるが、17世紀前期～中期には丹波焼が主体となり、時代の経過と共にその比率が高くなる。

施釉陶器・磁器は、兵庫県全域で肥前陶器が出土する。その出現時期は不明であるが、岸岳系の肥前陶器は瀬戸内海沿いの城下町跡で出土例が確認できるが、多くは胎土目段階からである(第34図)。三島手や刷毛目などの製品も17世紀前期でも初頭に近い時期に城下町跡で出現し、17世紀前期には兵庫県全域に広がり、その出土量も多い。また、同じ国産陶器である瀬戸美濃陶器も天目碗の出土例は多いが、「桃山陶器」に分類される志野焼や織部焼などの懐石具や茶器は城下町跡で出土するが、集落跡ではほとんどない。肥前磁器は17世紀前期には出現するが、初期伊万里の分布状況をみると城下町跡に集中する(第

35 図)。17 世紀中期～後期と考えられる腰張筒型碗の分布状況を見ると集落跡での出土例が増え、城下町跡では一気に量が増えることから、おそらくこの頃に広域かつ大量に流入したと考えられる。

② 18 世紀代

18 世紀代でも瀬戸内沿いの遺跡を中心に良好な一括廃棄土坑がある。姫路城跡、明石城武家屋敷跡、兵庫津遺跡などが上げられる。

17 世紀後期～18 世紀前期

兵庫津遺跡の第 14 地点第 2 遺構面は、宝永 5 年（1708）に兵庫津全域を襲った大火災面と考えられる。産地別組成は（第 69 図）、土師質土器 39.8%、備前焼 0.6%、丹波焼 5%、瀬戸美濃陶器 0.3%、肥前陶器 4%、中国製磁器 0.8%、肥前磁器 50%で、肥前磁器が中心となる。用途別組成は（第 70 図）、食膳具 64%、調理具 28%、貯蔵具 3%、調度具 5%と食膳具が一番多い。

土師質土器は焙烙・甕・灯火具・焜炉があり、調度具と調理具が中心である。このうち調度具組成をみると土師質土器灯火具 56%、土師質土器焜炉 15%、肥前磁器神仏具 14%、肥前磁器化粧具 14.5%などにわかれ（第 74 図）、土師質土器が大半を占める。この灯火具の器種は皿である。成形は手づくねもあるが大半はロクロである。丹波焼は調理具の播鉢・徳利、貯蔵具の甕が出土する。これらの器種は 17 世紀代では備前焼と拮抗する組成であったが、本時期には完全に丹波焼へ移行する。播鉢は調理具組成をみると丹波焼 32%、備前焼 1%、堺・明石焼 1%と圧倒的に丹波焼播鉢が高い比率を示す（第 72 図）。甕も同様で貯蔵具組成をみると丹波焼 60%、土師質土器 37%と備前焼甕はない（第 73 図）。

肥前磁器は食膳具を中心とし、その組成では（第 71 図）、肥前磁器碗 55%、肥前磁器皿 22%、肥前陶器皿 7%、肥前陶器碗 5%、中国製磁器皿 3%、土師質土器皿 2%、肥前陶器鉢 2%で、碗が 55%と半数を示す。また、皿 22%を加えると全体の 77%となり肥前磁器が大半を占め、これら食膳具が一気に増えたことがわかり、この要因により本時期に産地別組成で主体となる。この他に、調度具の神仏具・化粧具が出土する。他産地の状況は、備前焼は播鉢・徳利、瀬戸美濃陶器は碗、肥前陶器は碗・鉢・播鉢、中国製磁器は皿などが出土し、先に上げた産地に比べると比率は低い。

明石城武家屋敷跡の 21 地点 S K 48 は廃棄土坑である。産地別組成を見てみると土師質土器 22%、備前焼 4%、丹波焼 12%、堺・明石焼 5%、肥前陶器 11%、京焼系陶器 6%、

肥前磁器 40%にわかれる(第 81 図)。用途別組成は食膳具 70%、調理具 21%、貯蔵具 9%と続き、食膳具が中心である(第 82 図)。

土師質土器の主な器種は皿・焙烙・焜炉である。皿はロクロ成形と手づくね成形があり、本時期には手づくね成形が多くなる。焙烙の器形は難波分類のE類が中心である。丹波焼は調理具の播鉢、貯蔵具の甕・壺と前代の組成と大きな変化はない。これらは各用途別組成で高い比率を示し、播鉢は調理具組成をみると丹波焼 23%、備前焼 14%、堺・明石焼 9%と主体である(第 84 図)。備前焼は播鉢と鉢が出土する。先にも述べたが播鉢は比率を下げ、本時期には播鉢の主体が丹波焼に移行する。

肥前陶器の主な器種は食膳具の碗・皿・鉢である。京焼系陶器は食膳具の碗・皿・鉢があり、食膳具組成をみると肥前陶器 17%に対して京焼系陶器 20%と高い比率である(第 83 図)。このように高い比率を示すのは、京焼系陶器の中には、地元の明石焼を含むためである。明石焼は元和 8 年(1622)に藩の御用窯として開窯し、寛永 2 年(1625)に民窯に代わり、それ以後、操業し続けたと考えられているが定かでない。考古学的な発掘調査は 19 世紀代の窯の一部で行っているが、開窯期についてはわかっていない。現在、伝世品などから江戸中期以降に開窯し、窯道具の特徴により京焼からの技術的系譜を引くと考えられている。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢が中心で、その組成では肥前磁器 63%、京焼系陶器 20%、肥前陶器 17%と前代よりさらに比率を上げ、半数以上が肥前磁器となる(第 83 図)。品質は量産品 3 に対して、高級品 2 の割合である。調度具も前代より比率を上げている。

18 世紀中期～18 世紀後期

本時期の資料として、兵庫津遺跡、明石城武家屋敷跡がある。兵庫津遺跡の第 14 地点第 1 遺構面の産地別組成は(第 69 図)、土師質土器 28.4%、備前焼 0.4%、丹波焼 6%、堺・明石焼 0.1%、軟質施釉陶器 4%、肥前陶器 10%、京焼系陶器 0.1%、肥前磁器 55%にわかれ、本時期でも肥前磁器が高い比率を示す。用途別組成は(第 70 図)食膳具 74%、調理具 16%、貯蔵具 4%、調度具 6%と、圧倒的に食膳具の比率が高い。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・焜炉で、厨房具、暖房具が出土し、このうち皿は手づくね成形とロクロ成形があり、手づくね成形が中心である。また、大半は灯火芯を残すことから灯火具として使用したと考えられる。焙烙の器形は難波分類のE類のみである。丹波焼は播鉢・甕・瓶類が出土する。播鉢は調理具組成をみると丹波焼 32%、備前焼 3%、堺・明石焼 1.5%と他産地と大差がある(第 72 図)。甕はすべて丹波焼であり、17 世紀代に出

土した土師質土器や備前焼は見られなくなる（第 73 図）。

肥前陶器は食膳具の碗・鉢、調理具の播鉢で、播鉢は少量ではあるが出土し続ける。肥前磁器は産地別組成で半数以上の比率を示し、その中心となるのが食膳具である。その組成では肥前磁器碗 60%、肥前磁器皿 22%、肥前陶器碗 9%、肥前陶器鉢 5%、肥前陶器皿 2%、土師質土器皿 1%、京焼系陶器碗 0.5%、中国製磁器皿 0.5%にわかれ、食膳具の 90%近くを示し、本時期でも増加していることがわかる（第 71 図）。また、肥前磁器碗・皿の品質は「くらわんか手」と呼ばれる量産品が多い。この他に、調度具の神仏具・化粧具・文具などがある。

明石城武家屋敷跡第 21 地点 S K 49の産地別組成は、土師質土器 23%、丹波焼 10%、堺・明石焼 4%、瀬戸美濃陶器 1%、肥前陶器 10%、肥前磁器 52%にわかれる（第 81 図）。用途別組成は本時期でも食膳具が 78%と半数を占め、これに調理具 13%、貯蔵具 8%、調度具 4%が続く（第 82 図）。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢が出土する。皿は手づくね成形が中心である。焙烙の器形は難波分類の E 類のみである。丹波焼は 18 世紀前期と比べると比率を下げる。主体であった播鉢の比率が下降するためである。調理具組成をみると堺・明石焼 23%、丹波焼 12%と主体が堺・明石焼播鉢に変わる（第 84 図）。その一方で甕については丹波焼が独占しており（第 85 図）、これによって一定量を保持する。

瀬戸美濃陶器は食膳具の碗が出土し、本時期から再び出土し始める。京焼系陶器は、この時期から器種が増加する。前代から出土する碗に加えて、調理具の鍋類が出現する。また、碗は色絵が目立つ。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢が出土する。品質は「くらわんか手」などの量産品が多いが、高級品も僅かに出土する。また、碗は法量や器形にバリエーションがみられる。同時期の遺構からは調度具の神仏具・化粧具・文具がある。

18 世紀代の他遺跡の状況は、産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、堺・明石焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、京焼系陶器、中国製磁器、肥前磁器が出土する。17 世紀後期～18 世紀前期の西播磨の姫路城跡や丹波の篠山城跡の遺構をみると（第 68 図 - 9）、伊丹郷町遺跡や兵庫津遺跡などと類似し、土師質土器・瓦質土器は減り、肥前磁器が半数もしくはそれ以上を占める組成を示す。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具がみられ、食膳具を中心とする遺跡が多い。

土師質土器・瓦質土器は 18 世紀代に比率が下る遺跡が多く、特に瓦質土器は著しい。瓦質土器の低下は但馬、丹波の状況はわからないが摂津、東播磨では 5%未満迄落ちる。

これは瓦質土器が担っていた火鉢・鍋が土師質土器に移行するためである。土師質土器は皿・鍋類・火鉢が出土する。皿は 17 世紀代と同様に地域によって異なり、播磨ではロクロ成形と手づくね成形、18 世紀前期は手づくね成形が多くなるが、18 世紀後期には再びロクロ成形が優勢となる。摂津は、西摂津は播磨と共通するが、東摂津、丹波では一貫して手づくね成形が主体である。鍋は播磨、丹波、摂津ともに焙烙の器形は難波分類の E 類が多い。焼締陶器の状況は、18 世紀前期に堺・明石焼が新たに加わり、備前焼、丹波焼と競合する。丹波焼の膝元である篠山城跡では丹波焼のみで器種も豊富である。また、備前に近い西播磨では播鉢・甕ともに備前焼が独占するが、東播磨、摂津は異なる。これらでは播鉢の主体が堺・明石焼に移行し、前代まで中心であった丹波焼は 20%代まで落ちる。ただ、播鉢以外の製品については依然として丹波焼が多い。

施釉陶器・磁器は、兵庫県全域で肥前磁器が高い比率を示す。それは城下町跡や在郷町以外の集落跡においても出土量が増える。西播磨の馬立遺跡は集落跡であるが（第 68 図 - 6）、17 世紀代は肥前陶器と肥前磁器が僅かに出土する程度であるが、18 世紀以降、肥前磁器が一気に増える。各地で多く出土するのは量産品の「くらわんか手」碗で、出土遺物が少ない遺跡でも必ず含まれる。肥前陶器は 17 世紀代と組成に変化なく、食膳具、調度具を中心に出土するが、18 世紀中期に京焼系陶器が増えてくると、一気に施釉陶器の主体は京焼系陶器に移行する。本産地は、18 世紀前期までは食膳具が僅かに出土する程度であった。それが 18 世紀中期には城下町跡で碗が急増し、18 世紀後期には煮沸具、灯火具が一気に増え、城下町跡、在郷町では肥前磁器と近接する比率まで上昇する。

③ 19 世紀代

18 世紀後期～19 世紀前期

本時期の資料として、兵庫津遺跡、明石城武家屋敷跡がある。兵庫津遺跡第 2 地点第 2 遺構面の産地別組成では（第 69 図）、土師質土器 27.8%、備前焼 0.4%、丹波焼 1%、堺・明石焼 6.7%、軟質施釉陶器 4%、瀬戸美濃陶器 1.8%、肥前陶器 11%、京焼系陶器 14%、肥前磁器 37%、瀬戸美濃磁器 0.2%、京焼系磁器 0.1%にわかれ、本時期でも土師質土器が高い比率を示すが、破片計測という性格上、焙烙など破損しやすいものの数値が高く出るため、個体数では肥前磁器が主体である。用途別組成は（第 70 図）食膳具 70%、調理具 17%、調度具 10%、貯蔵具 3%と、18 世紀代の遺構と比べると貯蔵具はさらに激減する一方で、食膳具の比率は上昇する。

土師質土器の主な器種は皿・焙烙・焜炉・火鉢・壺など調度具が中心である。その組成を見てみると（第74図）、土師質土器灯火具7%、土師質土器火鉢11%、土師質土器焜炉類46.2%、土師質土器壺0.4%、土師質土器その他1.2%、瓦質土器火鉢1.2%、軟質施釉陶器灯火具20%、京焼系陶器灯火具7%、瀬戸美濃陶器神仏具1%、肥前陶器神仏具1%、肥前磁器神仏具2%、肥前磁器化粧具1.5%、肥前磁器文具1.5%と、土師質土器製品が半数近くを占める。皿はロクロ成形と手づくね成形で前者が目立つ。また、大半が灯火具である。焙烙の器形は難波分類のE類のみである。焼締陶器は施釉陶器・磁器と比べると比率は低いが備前焼、丹波焼、堺・明石焼が出土する。備前焼は徳利のみで、18世紀と同様に出土量は僅かである。丹波焼は播鉢・徳利・甕・壺が出土し、このうち貯蔵具が多く、その組成では丹波焼甕・壺が80%を示し、18世紀代に引き続き貯蔵具の中心である（第73図）。堺・明石焼は播鉢のみで、調理具組成では堺・明石焼14%、丹波焼5%と前者が高い比率を示す（第74図）。

肥前陶器は食膳具の鉢、調度具の神仏具が出土する。18世紀代に比べると減少し、18世紀前期に多く出土した碗・皿は全く出土しておらず、鉢のみが出土する。鉢も口径が30cm以上の大型鉢で、この法量は肥前陶器のみで、これを受容するために出土したと考えられる。京焼系陶器は食膳具の碗、調理具の土瓶・土鍋・行平、調度具の灯火具と豊富な器種組成である。碗以外は本時期から出現し、しかも高い比率を示すことから一気に流入することがわかる。このうち煮沸具は調理具組成をみると、土師質土器焙烙62.7%、堺・明石焼播鉢14%、京焼系陶器土鍋・行平12%、京焼系陶器土瓶・急須6%、丹波焼播鉢5%と焙烙を中心とするなかで、播鉢と拮抗する（第72図）。

肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の神仏具・化粧具が出土する。食膳具組成をみると（第71図）、肥前磁器碗61.4%、京焼系陶器碗11%、肥前磁器皿8%、土師質土器皿6%、丹波焼鉢5%、瀬戸美濃磁器碗・皿2.7%、京焼系磁器皿・鉢2%、肥前陶器鉢1.3%、中国製磁器皿1.3%、肥前磁器その他1.3%と、肥前磁器碗が半数を示し、碗以外の皿や鉢・小坏（その他）などを加えると70%近くが肥前磁器となり、依然として食膳具の中心である。

施釉陶器・磁器はこれら以外に、軟質施釉陶器は灯火具、瀬戸美濃陶器は碗・神仏具、瀬戸美濃磁器は碗、京焼系磁器は鉢・神仏具が出土する。軟質施釉陶器の灯火具は本時期から出現し、調度具組成では軟質施釉陶器21%、京焼系陶器8%、土師質土器7%と半数以上の比率であり（第74図）、出現と共に大量に用いられる。

明石城武家屋敷跡 8 地点 S K 101 の産地別組成では、土師質土器 8 %、丹波焼 4 %、堺・明石焼 32%、肥前陶器 2 %、京焼系陶器 20%、肥前磁器 34%にわかれる（第 83 図）。用途別組成は食膳具 98%、調理具 2 %と続く（第 84 図）。

土師質土器は皿と焙烙が出土する。皿の成形はロクロが多い。焙烙の器形は難波分類の D 類・E 類がみられる。堺・明石焼は播鉢のみで、調理具組成では本播鉢が 90%と依然として高い比率である（第 84 図）。瀬戸美濃陶器は 18 世紀後期では碗と壺が出土したが、本時期には水鉢や火鉢など大型製品が主に出土する。京焼系陶器は食膳具の碗、調理具の鍋類、調度具の灯火具・神仏具など豊富な器種組成である。18 世紀後期の遺構と比べて鍋類などの煮沸具が急増する。18 世紀代までの焙烙・播鉢主体という調理具組成から施釉陶器の煮沸具に主体が移行する。また、京焼系陶器の中には、舞子焼や明石焼など同じ京焼の技術的系譜を引く在地産の製品もかなり含む。

肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢などが出土し、その組成では肥前磁器碗 48%、肥前磁器鉢 21%、瀬戸美濃陶器碗 15%、肥前磁器皿 9 %、瀬戸美濃陶器皿 4 %、肥前陶器皿 3 %とあり（第 83 図）、本時期でも半数以上が肥前磁器で、大きな変化はみられない。

19 世紀代の他遺跡の状況は、産地別組成は土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、信楽焼、堺・明石焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、萩焼、京焼系陶器、大谷焼、中国製磁器、肥前磁器、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器が出土し、新たに萩焼、大谷焼、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器などの産地が増える。組成は伊丹郷町遺跡や兵庫津遺跡と類似し、肥前磁器が上位を示し京焼系陶器が近接する組成である。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具がみられ、食膳具が一番多く、これに調理具が近接する遺跡が多い。

土師質土器・瓦質土器の 19 世紀代はさらに比率を下げる遺跡が多く、瓦質土器については摂津では出土しない遺跡が目立つ。土師質土器は皿・鍋類・火鉢があり、これらは在地産が中心と考えられる。皿は、播磨はロクロ成形が多く、摂津では手づくね成形とロクロ成形のものが僅かにある。鍋類の器形は、西播磨は E 類と岡山産や讃岐産のものがごく僅かにある。東播磨は難波分類の E 類が多いが D 類も 19 世紀代から加わる。摂津は難波分類の E 類と G 類で 19 世紀前期には G 類が増える。焜炉・火鉢は兵庫県では土師質土器が中心で、本時期から集落跡でも出土例が増えるが、量比は不明である。

焼締陶器は播鉢・德利・甕を主製品とする。産地は新たに信楽焼、大谷焼が加わり、備前焼、丹波焼、堺・明石焼と競合する。摂津は尼崎城跡の出土状況をみると（第 69 図 - 2）、播鉢は堺・明石焼が大半で、これに丹波焼が僅かに出土する。甕は丹波焼が目立ち、

19 世紀前期に信楽焼が出現するが丹波焼がやや優勢。19 世紀中期に至ると大谷焼が出現し、先の産地と競合し次第に大谷焼が優勢となる。徳利は丹波焼が 19 世紀を通して多く、僅かに備前焼が含まれる。この摂津の組成は東播磨ではほぼ共通する。丹波、西播磨については大きな変化はなく、丹波は播鉢・徳利・甕とも丹波焼、西播磨では播鉢・徳利・甕とも備前焼が独占する。

施釉陶器・磁器は、肥前磁器が 19 世紀代でも産地別組成において高い比率を示す。城下町跡、在郷町跡は 18 世紀代から高い比率を示すが、集落跡でも出土量が増える。主な器種は食膳具の碗・皿で、この他に調度具の神仏具・化粧具・文具がある。広く出土するのは量産品の「くらわんか手」碗が多い。また、遺跡・出土地点の性格によって組成は異なるが、神仏具・化粧具・文具などの調度具が集落跡でも増え始める。肥前陶器は城下町跡・町屋跡で鉢が僅かに出土するのみで、18 世紀前期までの勢いはない。その一方で、瀬戸美濃陶器は 18 世紀後期から再び出土し始め、19 世紀も城下町跡・町屋跡を中心に器種を増やす。出土するのは碗以外に鉢・水鉢・火鉢・植木鉢などの大型製品である。萩焼は 19 世紀から出現する。主な器種は碗で、他の産地に比べると 1%未満であるが 19 世紀代を通して出土する。

京焼系陶器は、兵庫津遺跡や明石城武家屋敷跡では肥前磁器に近接するか上回る組成であった。それは西播磨の赤穂城下町跡や摂津の尼崎城跡などの城下町跡でも共通する。これら以外の資料が少ないため組成を掴むのは難しいが、摂津の多田銀銅山代官所跡（第 68 図-10）や西播磨の馬立遺跡などをみると、肥前磁器が多い傾向にあり、先の城下町跡ほどの受容はなかったと考えられる。器種は食膳具の碗、調理具の土瓶・鍋類、調度具の灯火具・神仏具・化粧具・餌鉢・植木鉢など豊富な器種組成である。その組成は城下町跡では 18 世紀代より多くなるが、それら以外では少なく碗・土瓶・鍋類・灯火具などに限られる。また、城下町跡や町屋では 19 世紀前期までは土鍋が多く、19 世紀初頭から徐々に行平が多くなるが、集落跡では土鍋はなく行平のみで受容差がある。さらに、兵庫県では京焼系陶器の窯が 19 世紀代に各地で開窯する。東播磨の明石焼、舞子焼、朝霧焼、西播磨の相生焼、新宮焼、野田焼など瀬戸内海沿いの城下町跡近郊に点在する。考古学的な調査をおこなっていない窯が大半であり、生産器種の正式な量比は不明であるが、大きな特徴としては煮沸具や灯火具を中心に生産することである。京都及び信楽周辺の窯場では煮沸具や灯火具も多く生産するが、食膳具はそれらより多く、兵庫県の窯とは生産の主要器種に差異がある。これは先に述べたように兵庫県で京焼系陶器は煮沸具や灯火具が多いこ

とから、兵庫県の市場による影響も察しえる。

瀬戸美濃磁器は本時期から出現する。主な器種は碗・皿・小坏である。碗は広域に出土例がある。京焼系磁器もこの時期から出土する。この京焼系磁器窯は兵庫県に多く点在する。三田市の三田焼、篠山市の王地山焼、姫路市の東山焼、たつの市の野田焼などが上げられる。ただ、産地に近い地域は 18 世紀末から出土し、これらの藩内では地点によっては肥前磁器より高い比率を示すところもあるが、それ以外の地域では 2%未満に留まる。主な器種は食膳具、調度具である。

④ 小結

兵庫県では、伊丹郷町遺跡や兵庫津遺跡、明石城武家屋敷跡などは江戸時代を通して、赤穂城下町跡や姫路城跡は単発ではあったが良好な一括資料があり、瀬戸内海沿いの遺跡を中心に検討した。それ以外の丹波や但馬地域は肥前陶器や肥前磁器の分布状況からその広がりを述べたが、それ以外の状況はわからなかった。

土器・陶磁器の組成は、肥前陶器、肥前磁器、京焼系陶器などは広域に流通し、出現時期や品質の差異はあるが大まかな器種組成は共通する。その一方で、土師質土器の皿・焙烙などの成形やその変化、焼締陶器の産地別組成が地域によって異なり地域性がみられる。まとめると、以下の通りである。

17 世紀代は、産地別組成は 17 世紀前期では土師質土器、瓦質土器、肥前陶器、17 世紀中期～17 世紀後期には肥前陶器から肥前磁器に施釉陶器・磁器は主体が変化する。用途別組成は食膳具が多く、これに調理具、貯蔵具が続き、調度具は僅かである。

兵庫県では地域に限らず城下町跡では共通して 17 世紀初頭に肥前陶器の出現・急増により、施釉陶器・磁器が産地別組成で高い比率を示す。さらに、17 世紀中期～後期に肥前磁器が出現・急増することにより、産地別組成が施釉陶器・磁器主体へ変化する。城下町跡以外ではこのような明確な変化はみられないが、肥前陶器・肥前磁器の分布状況から城下町跡より少し遅れて変化する。土師質土器、焼締陶器の組成は、遺跡性格に関係なく変化し、各地域で小・中規模な流通圏を形成し地域性がみられる。その大きな変化となるのが土師質土器土釜から焙烙に主体が移行し、丹波焼が流通圏を広げる 17 世紀中期～後期と考えられる。

18 世紀代の産地別組成は、土師質土器、肥前陶器、肥前磁器が中心で、特に肥前磁器は 17 世紀代より比率を上げる遺跡が多く、それは城下町跡に限らず町屋跡、集落跡でも同様

である。用途別組成は食膳具が主体で、これに調理具、貯蔵具、調度具が続き、また、城下町跡では調度具の比率が僅かに上がる。

兵庫県では、施釉陶器・磁器の組成は地域に限らず共通する。土師質土器は皿・焙烙の特徴から、17世紀代に引き続いて小規模な流通圏を形成する。また、この時期に肥前磁器の「くらわんか手」の急増から、17世紀にみられた城下町跡と集落跡との陶磁器の出現時期や量比の大差はなくなる。その一方、焼締陶器の組成は、堺・明石焼播鉢が出現し、東播磨、摂津は丹波焼播鉢から堺・明石焼播鉢に主体が移行する地域もあるが、焼締陶器の生産地に近い地域では変化なく継続する。

19世紀代の産地別組成は、土師質土器、肥前磁器、京焼系陶器が中心で、特に京焼系陶器は18世紀代より比率を上げる遺跡が多い。用途別組成は食膳具が主体だが、調理具が近接する比率を示す。

この時期も施釉陶器・磁器の組成は地域に限らず共通する。その組成では肥前磁器を中心とし、これに京焼系陶器が近接する。この組成は肥前磁器が減少したのではなく、京焼系陶器の煮沸具の出土量が急増し、さらに他の産地が増えたためであり、むしろ肥前磁器の受容は18世紀代よりさらに増えている。また、器種組成も京焼系陶器をみると豊富であり、それは城下町跡・町屋に限らず集落跡でも同様である。

第3節 四国地方の出土状況（第93図）

四国の江戸時代は讃岐、阿波、土佐、伊予にわかれる。近世を中心とした遺跡は讃岐の高松城跡、阿波の徳島城下町跡が挙げられるが、それ以外は近世を層位的に調査を実施する遺跡は少なく、近世遺構を検出しても限られた時代の遺跡が多い。そのような状況ではあるが、高松城跡、徳島城下町跡では詳細な遺物研究が行われており、遺物編年がわかっている。その分析方法は本分析と共通し、これら分析結果を採用する。

1. 高松城跡（第93図 - 1）

高松城跡は、江戸時代は讃岐国、現在は香川県高松市に所在する。高松城跡の発掘調査は武家屋敷跡を中心に実施している。調査の結果、良好な一括資料を検出し、そのうち土器・陶磁器について遺物変遷が行われている。

① 17世紀代

16 世紀末～17 世紀前期

肥前磁器を含まない時期で、遺構として SK b 192 が挙げられる。産地別組成は土師質土器 34%、備前焼 14%、瀬戸美濃陶器 7%、肥前陶器 45%と肥前陶器が高い比率を示す（第 94 図）。用途別組成は食膳具 74%、調理具 17%、貯蔵具 3%、調度具 6%と食膳具が半数以上を占める（第 95 図）。

土師質土器は皿と鍋類が拮抗する。皿の用途は分類できなかつたが灯火具での使用が多いと考えられる。鍋類は耳付き鍋と土釜があり、分類では焙烙にしたが後世に出土するものと器形が異なる。その他に播鉢や火鉢などが出土する。焼締陶器は備前焼のみで、播鉢・甕を主体とし、徳利・鉢などは「桃山陶器」に分類される懐石具も含む。このうち播鉢は調理具組成をみると、土師質土器 20%に対して備前焼 20%と競合する（第 97 図）。

施釉陶器・磁器は肥前陶器を中心とし、中国製磁器、瀬戸美濃陶器が続く。肥前陶器は碗・皿などの食膳具を主体とし、品質は量産品が多いが絵唐津皿・鉢などの高級品も出土する。瀬戸美濃陶器は、量産品は僅かで、中心は志野焼や織部焼などの懐石具が目立ち、天目碗もある。本遺構では出土しないが、同時期の遺構からは中国製磁器が出土し、景德鎮窯、漳州窯系の青花皿が出土する。

17 世紀前期

本時期には肥前磁器が出現する。SK b 178 の産地別組成を見てみると、土師質土器 46%、瓦質土器 1%、備前焼 14%、信楽焼 1%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 11%、中国製磁器 6%、肥前磁器 17%と、肥前磁器は出現と共に高い比率を示す（第 94 図）。用途別組成は食膳具 59%、調理具 24%、貯蔵具 8%、調度具 9%と食膳具が依然として高い（第 95 図）。

土師質土器は前代と器種組成に変化はない。皿は灯火具としての使用が多い。焼締陶器も前代と変わらず備前焼のみで、播鉢・甕が多く出土する。施釉陶器・磁器は肥前磁器が出現と共に高い比率を示す。高松城跡では 1620～1630 年代と考えられる遺構から出土し、この頃には流入すると考えられるが、出土量はごく僅かである。増加するのは 1630 年代以降と思われる。主な器種は碗・皿などの食膳具である。瀬戸美濃陶器は前代よりさらに比率が減り、天目碗と「桃山陶器」に分類される懐石具が僅かに出土する。肥前陶器は目痕の残る量産品の碗・皿も含むが、刷毛目や二彩手などの鉢類が主体である。

17 世紀後期

SK c 20 は廃棄土坑で、その産地別組成では土師質土器 35%、備前焼 1.5%、肥前陶器

1.5%、中国製磁器 19%、肥前磁器 43%と肥前磁器の比率はさらに上がる（第 94 図）。用途別組成は食膳具 81%、調理具 13%、調度具 2%にわかれる（第 95 図）。

土師質土器は新たに焙烙が出現する。主な器種は皿と焙烙で、前代まで出土した耳付き鍋や土釜・播鉢などは減少する。焙烙は器形から讃岐産を中心とし、難波分類のA・B類が僅かに出土する。焼締陶器は変わらず備前焼が主体で播鉢・甕などを中心とし、本遺構からは出土しないが、灯火具が出現し、土師質土器皿と拮抗する。**施釉陶器・磁器**は肥前磁器と肥前陶器で、前代まで出土した瀬戸美濃陶器や中国製磁器はごく僅かとなる。肥前磁器の主な器種は碗・皿などの食膳具を中心とし、鉢・瓶類なども出土する。食膳具組成をみると（第 96 図）、肥前磁器 52%、土師質土器 46%、肥前陶器 2%と本産地が半数以上を示す。肥前陶器は碗を中心とし、装飾は呉器手や京焼風陶器などが出現・急増する。

② 18 世紀代

17 世紀後期～18 世紀前期

西の丸町（H7・8）8A・C区Ⅱ層の産地別組成では、土師質土器 39%、瓦質土器 0.2%、備前焼 9%、堺・明石焼 0.5%、軟質施釉陶器 0.2%、瀬戸美濃陶器 0.6%、肥前陶器 12%、京焼系陶器 5.2%、中国製磁器 0.3%、肥前磁器 33%で（第 94 図）、前代まで高い比率を示した土師質土器の比率が下降する。用途別組成は食膳具 69%、調理具 13%、貯蔵具 4%、調度具 14%と食膳具が依然として多い（第 95 図）。

土師質土器は前代と大きな変化はない。焙烙は器形から讃岐産が中心である。焼締陶器は、備前焼が前代と変わらず主体であるが、堺・明石焼が出現する。備前焼は播鉢・甕を主体とし、本時期から灯火具の出土量が急増する（第 99 図）。堺・明石焼は播鉢のみで 4%と比率も低い（第 97 図）。

施釉陶器・磁器は肥前磁器、肥前陶器、瀬戸美濃陶器がある。肥前磁器は碗を中心とし、皿・鉢類がこれに続き、これら以外に香炉や瓶類などの調度具も一定量含むのは前代と変わらない。このことから、肥前磁器の急増は特別な器種の増加によるものではなく、肥前磁器の全体量が増えたためと考えられる。肥前磁器に次いで多いのが肥前陶器である。本時期でも碗・鉢などの食膳具を中心とし、このうち呉器手や京焼風陶器碗などの碗類は前代より出土量が増す。また、新たに京焼系陶器が出現し、5.8%とごく僅かで碗・鉢が出土する（第 96 図）。瀬戸美濃陶器は鎧碗や天目碗などの碗類が出土する。

18 世紀中期～後期

西の丸町 (H11) SK08・09 は廃棄土坑である。産地別組成では土師質土器 38%、備前焼 5.5%、堺・明石焼 0.4%、軟質施釉陶器 1%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 12%、京焼系陶器 4%、中国製磁器 0.1%、肥前磁器 33%にわかれる (第 94 図)。用途別組成は食膳具 63%、調理具 17%、貯蔵具 3%、調度具 17%と食膳具が依然として高い比率である (第 95 図)。

土師質土器の器種組成は、皿 26.2%、羽釜 36.1%、焙烙 22.9%、播鉢 0.3%、火鉢 10.7%、その他 0.2%と前期まで中心であった皿が激減する。これは備前焼灯火具の増加によるものである。焙烙の器形は讃岐産のみである。焼締陶器は備前焼が中心で、播鉢・甕・瓶類・灯火具など出土する。特に、灯火具は土師質土器灯火具を抜いてこれが主となる (第 99 図)。

施釉陶器・磁器は肥前磁器を中心とし、京焼系陶器、肥前陶器が続く。肥前磁器は前期と器種組成に大きな変化はない。京焼系陶器は本時期に急増する。主な器種は碗類で、丸碗・小杉碗・筒型碗などがあり、装飾は色絵・銹絵染付・銹絵と豊富である。この他に土瓶・土鍋などの調理具も一定量出土する。肥前陶器は、京焼系陶器の急増により激減し、それを現すように碗類は出土せず、鉢類が僅かにみられる程度となる。

③ 19 世紀代

18 世紀後期～19 世紀前期

本時期の資料として文政 4 年 (1821) の火災関係資料がある。西の丸町 SK b 63 の産地別組成では土師質土器 43.5%、備前焼 11%、信楽焼 1.8%、堺・明石焼 0.7%、軟質施釉陶器 9.5%、瀬戸美濃陶器 2%、肥前陶器 2.5%、京焼系陶器 8%、肥前磁器 21%にわかれる (第 94 図)。用途別組成は食膳具 34%、調理具 36%、貯蔵具 4%、調度具 26%と食膳具と調理具が近接する値となる (第 95 図)。

土師質土器は全体量がさらに減る。主な器種は皿 11%、羽釜 0.9%、焙烙 59.5%、火鉢 28.2%、その他 0.4%と焙烙が主体となる。焙烙は器形から讃岐産が多いが、僅かに難波分類の F 類が出土する。焼締陶器は備前焼が主体で、灯火具が比率を上げ、甕・徳利なども各用途別組成で独占する。播鉢は堺・明石焼が多く (第 97 図)、その組成は前代と変化はない。

施釉陶器・磁器は肥前磁器、京焼系陶器を中心とし、肥前陶器、瀬戸美濃陶器が続く。肥前磁器は、京焼系陶器の増加によりやや比率を下げるが器種組成に大きな変化はない。

食膳具組成でも肥前磁器 51.5%、京焼系陶器 18.5%、肥前陶器 7%、瀬戸美濃陶器 2%と依然として高い比率であり（第 96 図）、本産地には影響がないことがわかる。京焼系陶器は食膳具の碗、調理具の土瓶・土鍋、調度具の灯火具・文具など豊富な器種である。食膳具は前代よりやや比率を上げるがその組成に大きな変化はない。その一方で、調理具組成では土師質土器 71.2%、軟質施釉陶器 22%、堺・明石焼 2%、京焼系陶器 1.4%にわかれ、軟質施釉陶器と京焼系陶器の器種は煮沸具で（第 97 図）、前代より施釉陶器の煮沸具の比率が上がる。この他に、灯火具も出現しており、これら調理具・灯火具の急増・出現により京焼系陶器の比率が上昇する。

19 世紀前期～中期

西の丸町 S D b 04 は廃棄土坑である。産地別組成では土師質土器 17%、備前焼 6%、堺・明石焼 0.4%、軟質施釉陶器 24%、瀬戸美濃陶器 2.8%、肥前陶器 2.2%、京焼系陶器 12%、大谷焼 3.6%、肥前磁器 24.5%、瀬戸美濃磁器 5%と大谷焼・瀬戸美濃磁器が出現する（第 94 図）。用途別組成は食膳具 45%、調理具 30%、貯蔵具 2%、調度具 22%と食膳具が依然として多い（第 95 図）。

土師質土器の器種組成は皿 35.6%、焙烙 5.2%、火鉢 54%、その他 5.2%と前代まで主体であった焙烙が激減する。本時期、主体なのは火鉢・焜炉などの大型製品であり土師質土器組成で 50%以上を示す。焼締陶器は備前焼が中心である。甕・徳利・灯火具などを主とするが、灯火具は京焼系陶器、徳利は大谷焼、甕は京焼系陶器や大谷焼などの製品が出現し、本遺構では備前焼が優勢であるが、幕末期には主体がそれらに移行し、備前焼は小型製品が中心となる。また、播鉢については依然として堺・明石焼が独占する（第 97 図）。

施釉陶器・磁器は肥前磁器、京焼系陶器が主体である。肥前磁器は 25%近い比率を示し、器種組成も大きな変化はなく、食膳具組成でも一番比率が高い。肥前磁器に続くのは前代と同様に京焼系陶器である（第 96 図）。主体は碗類であるが、土瓶・土鍋など調理具や灯火具がさらに増え、これにより京焼系陶器の比率を上げる。この他に、瀬戸美濃磁器が新たに出現する。その比率は 5%と僅かであるが、端反碗が出土する。また、磁器碗全体の比率を比較しても肥前磁器碗 40%、瀬戸美濃磁器碗 1.6%と肥前磁器碗に影響を及ぼすほどではない（第 96 図）。肥前陶器は碗・鉢が出土し、瀬戸美濃陶器は前代よりやや比率が上がる。これは碗以外の水鉢や火鉢などの大型製品が増加するためである。

④ 小結

高松城跡の状況を見てみた。土師質土器、備前焼、肥前陶器、肥前磁器が江戸時代を通して出土した。特に土師質土器と施釉陶器・磁器が拮抗する組成は17世紀前期～18世紀後期まで続く。施釉陶器・磁器の中心は17世紀前期までは肥前陶器、それ以降は肥前磁器であり、これらに焼締陶器が続く組成は長期にわたり大きな変化はみられなかった。

これが変わるのは18世紀後期～19世紀前期に土師質土器の主製品であった灯火具と鍋類に変わって陶器製品が急増することである。19世紀初頭以降、土師質土器の出土量は減るが、火鉢・焜炉などの大型製品を主とし、幕末期まで一定量出土し続ける。一方、肥前磁器は他産地の影響をうけることなく、食膳具を中心に出土する。

また、備前焼は、江戸時代を通して焼締陶器の主産地であり、播鉢・甕・灯火具を中心にほぼ独占状態であったが、18世紀中期に播鉢は堺・明石焼播鉢、甕は19世紀前期に京焼系陶器甕、大谷焼甕、灯火具は18世紀後期に京焼系陶器に主産地が移行する。さらに、もう一つの特徴として、京焼系陶器の出土状況である。18世紀前期に急増するが、その要因は碗にある。碗の形態から喫茶碗に分類するものが多く、この受容によるものと考えられる。これは徳島城下町跡でもある様相で、18世紀初頭以降、四国で「茶」を嗜むことが流行する。また、これに連動するように土瓶・土鍋などの調理具や灯火具なども18世紀後期に増加していた。

2 徳島城下町跡（第93図－5）

徳島城下町跡は、江戸時代は阿波国、現在は徳島県徳島市に所在する。本遺跡は、吉野川河口三角州に蜂須賀氏阿波入部後の天正11年（1583）以降に建設した城下町である。そのためそれ以前の遺構はなく出土遺物の中心は17世紀以降である。発掘調査は武家屋敷が集中する三の丸内で行われ、その中で、新蔵町1丁目遺跡は17世紀～19世紀代までの一括廃棄土坑を多く検出した。これら資料は計測分析しており、その方法も本論とほぼ同じである。今回は若干の補足を加えて分析したものである。

① 17世紀代

17世紀中期～17世紀後期

本時期に属する遺構は総体的に一遺構からの出土遺物数が少なく、遺構によって組成が異なるため、計測分析は避けた。主な産地別組成は土師質土器、備前焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、中国製磁器、肥前磁器がある。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具

があり、総じて食膳具が多い傾向にある。

土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺が出土する。その中で皿は、土師質土器のうち多く出土する。口縁部に灯火芯を残すものが多いことから、主に灯明皿として使用したと考えられる。焼締陶器は備前焼のみである。調理具の播鉢、甕・壺などの貯蔵具があり、これらは各器種組成で独占する。

施釉陶器・磁器は、肥前磁器の碗・皿などを中心とする。この他に瓶や香炉などの調度具も含まれる。中国製磁器は漳州窯系の青花皿・盤が出土する。肥前陶器は肥前磁器と器種組成が共通し、碗・鉢などの食膳具が主に出土する。瀬戸美濃陶器は志野焼や織部焼などは「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器が多く、量産品は少ない。

② 18 世紀代

17 世紀後期～18 世紀前期

S K 2203 は廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 40%、瓦質土器 4%、備前焼 5%、肥前陶器 10%、京焼系陶器 5%、肥前磁器 35%と、土師質土器、肥前磁器を中心とする（第 100 図）。用途別組成は食膳具 80%、調理具 8%、調度具 12%で、食膳具が多い（第 101 図）。

土師質土器は皿を中心とし、他に火消し壺が出土する。同時期の遺構からは焙烙・焼塩壺がみられるが量は少ない。焼締陶器は備前焼のみである。播鉢を主体とし、灯火具が本時期から出現する。本遺構から甕は出土していないが、他の遺構の状況から甕については備前焼が独占する。

肥前陶器は肥前磁器の影響か出土量が減る。器種組成は変わらず碗が多い。京焼系陶器は本時期から出現する。主な器種は碗で、同時期の遺構からは皿や鉢が出土する。肥前磁器の器種組成は前代と大きな変化はみられないが、主体である食膳具の出土量が前代より増え、これによって産地別組成で高い比率を示したと考えられる。また、仏飯具や水滴などの調度具の出土量も僅かに増えており、この影響もあったと思われる。

18 世紀中期～18 世紀後期

S K 2201 は廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 10%、備前焼 4%、堺・明石焼 4%、瀬戸美濃陶器 1%、肥前陶器 7%、京焼系陶器 23%、中国製磁器 1%、肥前磁器 50%と肥前磁器、京焼系陶器が高い比率を示す（第 100 図）。用途別組成は食膳具 70%、調理具 7%、貯蔵具 2%、調度具 20%と食膳具が多い（第 101 図）。

土師質土器は皿・焙烙・火消し壺が出土する。皿は手づくね成形で、本遺構では口縁部に灯火芯を残すものはなかったが、同時期の遺構では多くみられる。焼締陶器は、新たに堺・明石焼が出現・急増する。主な器種は播鉢で、調理具組成では堺・明石焼 60%、備前焼 10%と備前焼播鉢を大きく上回り、主な産地となる（第 103 図）。備前焼は、播鉢が堺・明石焼に主体は移行するが、甕・灯火具は前代と変わらず多く、その比率はさらに上がっている。特に灯火具は、調度具組成をみると本産地 36%のみである（第 105 図）。同時期の遺構では土師質土器が出土するが、その比重は前代より備前焼が多くなる。

肥前磁器は前代よりさらに比率を上げる。器種組成に大きな変化はない。品質は「くらわんか手」などの量産品が 3 に対して、有田町で生産された高級品 2 とこれも前代と変わりなかった。肥前陶器は 7%と前代より激減する（第 100 図）。本遺構では碗のみであるが、他遺構では鉢が中心である。京焼系陶器は前代よりさらに上昇する。主な器種は碗で、器形は丸碗・平碗・半筒碗と豊富な器種組成となる。

③ 19 世紀代

18 世紀末～19 世紀前期

S K 1252 は廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 20%、瓦質土器 2%、備前焼 13%、堺・明石焼 2.5%、軟質施釉陶器 2%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 4%、京焼系陶器 17%、肥前磁器 35%、京焼系磁器 0.25%と肥前磁器が減る（第 100 図）。用途別組成は食膳具 58%、調理具 7%、貯蔵具 3%、調度具 32%と、食膳具を中心とするが調度具の比率が上がる（第 101 図）。

土師質土器は皿・焜炉類・火消し壺・土管などがみられ、調度具組成では焜炉類の比率が上昇している（第 106 図）。焙烙は本遺構からは出土しないが、京焼系陶器の土瓶や土鍋などが急増するため、調理具組成での比率が下がる。焼締陶器はこの時期でも備前焼が中心であるが、灯火具を主体とし甕・瓶類などが出土する。灯火具は前代よりさらに比率を上げるが、この時期から新に京焼系陶器製品も出現する（第 106 図）。播鉢は堺・明石焼が依然として主体である（第 103 図）。

施釉陶器・磁器は肥前磁器が前代と変わりなく中心である。器種は食膳具が多いが、調度具も器種が増え、全体量が上昇する。本遺構からは神仏具のみだが、同時期の遺構からは化粧具・文具なども出土する。京焼系陶器は、先にも述べたが灯火具・土鍋などが急増する。これら以外にも碗は小杉碗などの器種が加わり、出土量もさらに増える。この他、

餌鉢や火鉢などの調度具も出現し、あらゆる用途に分類される器種が出土する。瀬戸美濃陶器は碗・水鉢・火鉢がある。前代までは碗や鉢などの食膳具が僅かに出土したが、本時期から水鉢や火鉢などの大型製品が出現し、再び、出土量を増やす。

19世紀前期～19世紀中期

S K1262 は廃棄土坑である。産地別組成では土師質土器 23%、備前焼 15%、堺・明石焼 5%、瀬戸美濃陶器 1%、肥前陶器 5%、京焼系陶器 23%、肥前磁器 27%、京焼系磁器 1%にわかれる（第 100 図）。用途別組成は食膳具 78%、調理具 4%、調度具 18%と食膳具が多い（第 101 図）。

土師質土器は皿・焜炉類・灯火具と前代と器種組成に大きな変化はない。ただ、器種組成をみた場合、焜炉以外は陶磁器製品が主体となり、前代とは組成が異なる。焼締陶器は前代と変わりなく備前焼が中心で、播鉢は備前焼 14%に対して堺・明石焼 57%と、前代に引き続いて低い比率である（第 103 図）。備前焼の灯火具は本遺構では 48%と高い比率を示すが、他の遺構をみると京焼系陶器が急増し、本産地を上回る遺構もあり、灯火具の主体が移行し始める。また、同時期の遺構では備前焼甕が出土し、貯蔵具組成で高い比率を示すが、この時期から大谷焼甕が出現するが僅かである。ただ、甕以外に徳利があり、出土する遺構の調理具組成をみると備前焼徳利と競合し、さらに、幕末期に近い遺構では徳利は完全に大谷焼に移行する。また、幕末期には大谷焼灯火具も出現し、それまで中心であった備前焼、京焼系陶器から大谷焼に主体が移行する。

施釉陶器・磁器は肥前磁器が依然として高い比率を示し、器種組成にも大きな変化ない。ただ、その中には愛媛県砥部焼や西岡焼、香川県富田焼などの肥前磁器の技術的系譜を引く製品が含まれる。これらは肥前磁器の量産品と類似しており、識別が可能な製品もあるが大半は困難であり、肥前磁器の技術的系譜を引くため同類とした。これらと肥前磁器との比率は不明であるが、感覚的には在地産の比率が高いと思われ、幕末期にかけてさらに上昇すると考えられる。このように、在地・近郊の磁器製品が出現するなかで、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器も出現する。これらの出土量は 5%未満であり、肥前磁器に大きな影響はない。瀬戸美濃磁器は端反碗、京焼系磁器は型物の香炉や瓶類などの調度具で、肥前磁器の主製品以外のものが出土する。京焼系陶器は本遺構では食膳具のみであったが、同時期の遺構からは土瓶・土鍋・灯火具が前代より増える。先に述べたが、土瓶・土鍋などは調理具組成の中心となる。また、本遺構からは出土していないが、同時期の遺構では灯火具についても備前焼を抜いて京焼系陶器が主体となる。瀬戸美濃陶器も前代より出土量が

増すが、これは水鉢や火鉢などの大型器種が増加するためである。

④ 小結

徳島城下町跡の土器・陶磁器の主な産地は、時代を通して肥前磁器が中心である。これに土師質土器と備前焼が比率に変化はあるが、江戸時代を通して絶えることなく出土する。肥前磁器は食膳具を中心とし、化粧具や文具などの調度具も豊富な器種がみられる。土師質土器は灯明皿・焙烙などの調度具・調理具を中心に 18 世紀前期まで一定量保持するが、18 世紀前期に備前焼灯火具、18 世紀後期には京焼系陶器の調理具の出現・急増により、18 世紀後期以降は焜炉・火鉢など大型製品に主体が移行する。備前焼は 17 世紀～18 世紀初頭までは唯一の焼締陶器であり播鉢・甕を中心に出土する。18 世紀中期に堺・明石焼播鉢が出現すると播鉢は一気に減少する。その一方で、灯火具は播鉢に反比例するかのようになり急増し、先にも述べたが土師質土器と変わり主体となる。この状況は 19 世紀初頭まで続き、19 世紀前期には灯火具は京焼系陶器、甕は大谷焼に移行し、小型製品が僅かに出土するのみとなる。それ以外の産地組成をまとめると以下の通りである。

17 世紀～18 世紀前期までは、先にあげた肥前磁器に土師質土器、備前焼以外に肥前陶器がある。主な器種は食膳具で、そのうち碗・鉢類は豊富な器種組成である。瀬戸美濃陶器は僅かに天目碗と量産品皿が出土する程度である。また、この時期から京焼系陶器が加わるが、出土量が急増するのは 18 世紀前期からである。主な器種は碗で、その組成をみると磁器碗と近接する比率を示すが、磁器碗を上回ることはない。

京焼系陶器碗の出土状況は喫茶習慣による影響である。これについては北条ゆうこ氏¹⁸や日下正剛氏¹⁹の研究が詳しいが、徳島では正月の八賀に「大バク茶」を嗜むことが武家社会で流行し、その際に使用するのが注連縄と海老文様を施した京焼碗であり、京都の窯元に特注して作らせたことも文献資料でわかっている。それが 18 世紀中期には武家社会ではなく、それ以外の階層にも広がり、町屋や農村集落でこの注連縄と海老文様を施した京焼・京焼系陶器碗が出土し、日常的にも嗜まれたことがわかっている。

18 世紀中期に至ると堺・明石焼が出現し、それまで播鉢を独占した備前焼に変わり一気に浸透し、幕末まで組成に変化はない。18 世紀後期～19 世紀前期では、京焼系陶器の土瓶・土鍋などの調理具が急増する影響で、産地・用途別組成で比率が上がる。この土瓶の

¹⁸ 北条ゆうこ「阿波の注連縄茶碗」『考古学調査会』徳島県立博物館 1997 年

¹⁹ 日下正剛「新蔵町 1 丁目遺跡出土の注連縄文茶碗」『新蔵町 1 丁目遺跡 企業局総合管理事務所地点Ⅱ』徳島県教育委員会 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター 2000 年

急増は、先に上げた喫茶習慣による影響もあると考えられる。

19世紀以降は、産地が増えることと、砥部焼や西岡焼、大谷焼などの在地や近郊で生産された陶磁器が出現し、それらが高い比率を占めることが大きな特徴である。

3 その他の遺跡

四国地方では、先に述べた高松城跡、徳島城下町跡以外は近世を通して状況がわかる遺跡例はなく、先の遺跡のような論議は難しい。これは調査条件の関係であろうが、層位的に調査する例が少ないため遺構・遺物の変遷がわからない。また、遺構に伴うものは少なく、大半は包含遺物である。しかし、単発的ではあるが一括廃棄土坑がある遺跡や広域流通品による分布状況から、陶磁器の組成を雑駁ではあるが掴むことができた。

高知県の小籠遺跡は（第93図 - 7）、18世紀後期以降の遺構内・外も含めて遺物検討され、このうち18世紀後期～19世紀前期の資料については自ら計測分析することができた。この計測分析の結果も含めて検討する。

① 17世紀代

高知城は、江戸時代は土佐、現在は高知県高知市に所在する（第93図 - 6）。ここでは16世紀末～17世紀前期の遺構から備前焼、瀬戸美濃焼、肥前陶器、中国製磁器が出土する。組成比は、先にあげた高松城跡や徳島城下町跡と共通する。

土佐、伊予地域の資料は乏しく、讃岐、阿波の城下町跡や交通の拠点以外は遺構自体が少なく、よって土器・陶磁器の組成は図り知れない。少ないながら讃岐、阿波などの農村集落を中心に組成を見てみる。これらでは土師質土器を中心とし、それに備前焼、肥前陶器などが共通して出土するが、丹波焼、瀬戸美濃陶器、肥前磁器は遺跡によって出土状況が大きく異なる。

土師質土器は皿・鍋類の出土例が目立つ。鍋は瀬戸内海の遺跡（讃岐・伊予）で出土例が多いが、阿波、土佐などの太平洋側では少ない。また、焙烙の器形も難波分類のD類に類似するタイプが城下町跡で出土例が多いが、それ以外の遺跡では少なく、地域・遺跡の性格によって受容差が想定できる。焼締陶器は讃岐、阿波、土佐の遺跡では備前焼が大半を占め、播鉢・甕は備前焼が独占する。ただ、先に述べた高松城跡や高知城跡では丹波焼播鉢がごく僅かに出土する。播鉢以外の製品の出土例は確認できず、また、出土する地点も城下町跡に限られており、何かに伴って流入した可能性が高い。

瀬戸美濃陶器は、中世から継続する遺跡か城下町跡に集中し、また、城下町跡では「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器の出土はあるが、それ以外の遺跡では天目碗が僅かに出土するのみである。肥前陶器は、初期の製品とする岸岳系の肥前陶器は城下町跡のみ出土する（第 106 図）。それ以外の遺跡で出土するのは胎土目段階からであり、城下町跡とそれ以外の遺跡では時期差がある。また、城下町跡では絵唐津の出土例はあるが、それ以外の遺跡では大半が目痕を残す量産品である。中国製磁器は瀬戸美濃陶器と分布や出土状況が共通し、城下町跡や交通の拠点となる遺跡に集中する。その一方で、肥前磁器は城下町跡に限らず集落跡でも出土例はある。但し、出土する肥前磁器をみると、寛永 14 年（1637）の窯場統合前の製品は城下町跡や交通の拠点となる遺跡で出土するが（第 107 図）、それ以外の集落跡や町屋では寛永 14 年の窯場統合後以降の製品が中心である。ただ、大橋康二氏編年のⅢ期に属しても、18 世紀初頭まで生産するものもあり、いつ流入するののかは判断が難しい。

また、高松城跡や徳島城下町跡では 17 世紀後期には肥前磁器が産地別組成において主体となったが、それ以外の遺跡については、讃岐、現在の高松市の空港跡地遺跡は農村集落であるが（第 93 - 3）、ここでは 17 世紀後期に肥前磁器が陶器より比率が高いと報告されている。しかし、肥前磁器のタイプをみると初期伊万里も含まれるが、大半は 17 世紀後期～18 世紀前期に出現する長崎県波佐見町周辺で生産された量産品であり、肥前磁器の比率が高くなるのは少なくとも 18 世紀前期でも中期に近いと考えられる。肥前磁器の器種は、遺跡の性格に関係なく食膳具の碗を中心とし、それに皿が加わるという組成は共通する。異なる点として、城下町跡以外では瓶類などの調度具の出土例が極めて少ないことが上げられる。

② 18 世紀代

18 世紀前期

本時期でも良好な遺構は少なく、江戸時代は讃岐、現在は香川県丸亀市郡家の田代遺跡 SKⅡ 11（第 93 図 - 4）、同県高松市中間西坪遺跡 SK09（第 94 図 - 2）は農村集落の資料でありこれらを中心に検討する。土器・陶磁器の出土状況は肥前陶器、肥前磁器を主体とする組成である。

土師質土器は、前代まで多く出土した皿は、高松城跡や徳島城下町跡では本時期から備前焼灯火具の急増により備前焼と近接する値まで下がる。それは阿波、讃岐の城下町跡以

外でも量比は不明であるが、備前焼が目立つ。しかし、土佐の農村集落である小籠遺跡の状況をみると依然として土師質土器が多いことから、備前焼灯火具は 18 世紀前期に瀬戸内海から浸透することがわかる。その他には焙烙・鍋などの鍋類は各所で多く出土し、その特徴も前代と変わらない。焼締陶器は備前焼、堺・明石焼がある。備前焼は前代に引き継ぎ播鉢・甕である。ただ、高松城跡でもみられたが、甕は讃岐の遺跡では備前焼以外に土師質土器が出土し、備前焼甕が独占する状態ではない。また、播鉢も堺・明石焼がこの時期から出現し、地域・遺跡の性格に限らず急速に分布範囲を広げていく。

肥前陶器は 17 世紀代の胎土目積み・砂目積み皿が出土するが、中心は碗や鉢などの量産品が主に出土する。その比率は肥前磁器より高いと考えられる。タイプは刷毛目碗が大半で、これに呉器手碗、陶胎染付碗も出土する。また、高松城跡や徳島城下町跡で一定量出土した京焼風陶器碗は、これら以外の遺跡ではほとんどみられない。この他には、刷毛目や三島手の鉢や片口も刷毛目碗に匹敵するほど出土例が多い。肥前磁器は碗・皿などの食膳具が中心で、調度具はほとんどない。碗・皿の品質は有田町で生産された高級品はなく、中心は長崎県波佐見町周辺で生産された量産品の「くらわんか手」碗である。これは四国の各所で出土し（第 109 図）、前代まで施釉陶器・磁器の出土例のない地域でも出土しており、本時期に大量に流入することがわかる。肥前陶磁器以外には、瀬戸美濃陶器の卵手と呼ばれる大型碗が僅かに出土し、特に農村部での出土例が目立つ。

18 世紀後期～19 世紀前期

良好な資料はないが、讃岐の空港跡地遺跡（高松市）、土佐の小籠遺跡（南国市）は農村集落で出土量も多く、これらを中心に組成を検討する。この時期の特徴としては、良好な一括資料が少ないものの陶磁器の出土量が増え、また、在地産の陶磁器が出現することである。産地別組成では土師質土器・肥前磁器の出土量が多い。用途別組成は食膳具を中心に調理具、貯蔵具があり、調度具は少ない。

土師質土器は、鍋類がなくなり焙烙を中心とし、このほかに焜炉や火鉢などの大型製品も出土量が増加する。焼締陶器は、小籠遺跡で丹波焼甕が僅かに出土するが、備前焼甕、堺・明石焼甕が主体である。備前焼は甕・小型壺や灯明皿を中心とし、堺・明石焼は播鉢が出土する。空港跡地遺跡では堺・明石焼播鉢が多く、備前焼は僅かである。小籠遺跡では堺・明石焼が独占するが、備前焼ではなく、地元の尾戸焼が出土する。

施釉陶器は京焼系陶器を中心に瀬戸美濃陶器と肥前陶器が僅かに出土する。ただ、空港跡地遺跡や小籠遺跡で出土する京焼系陶器の中には、在地に点在する京焼の技術的系譜を

引く製品を含む。特に、灯火具や調理具を見てみると、大坂城跡や伊丹郷町遺跡などで出土する京焼系陶器とは器厚・釉厚が厚く、釉薬に透明度がない。これらはおそらく地元産の製品と考えられる。その一方で、碗は上絵付けした製品については摂津・河内のものと類似する。

肥前磁器の主な器種は碗・皿などの食膳具を中心とし、特に碗が多く、碗：皿の比率は7：3で碗が圧倒的に多い²⁰。碗・皿以外には鉢や段重などの食膳具のほか、仏飯具・瓶類などの調度具が僅かに出土する。この状況は小籠遺跡遺跡に限らず空港跡地遺跡ほかの讃岐、阿波、土佐、伊予などの町屋、農村集落でも同じ状況である。

③ 19世紀代

小籠遺跡を中心に空港跡地遺跡なども含めて検討する。小籠遺跡の産地別組成は土師土器10%、瓦質土器1.7%、丹波焼0.05%、堺・明石焼0.05%、軟質施釉陶器7%、瀬戸美濃陶器4%、肥前陶器24%、京焼系陶器1.5%、肥前磁器46%、瀬戸美濃磁器5.7%にわかれる(第108図)。用途別組成は食膳具60%、調理具25%、貯蔵具1.5%、調度具13.5%である(第109図)。

土師質土器は皿・焙烙・火鉢・焜炉類が出土する。これらの組成は地域によって若干異なるが、火鉢や焜炉類などの大型製品を主体とし(第113図)、この組成は空港跡地遺跡でも同じである。また、前代まで中心であった皿は、灯火具として使用する例が多い(第114図)。焼締陶器は備前焼、丹波焼、堺・明石焼が出土する。備前焼は前代まで各地で多く出土した播鉢・甕の出土例は僅かとなる。播鉢は四国地方に共通して、前代と変わらず堺・明石焼が中心である。甕は、本遺構では丹波焼が出土するが、少し遅れて阿波の大谷焼が出現する。

施釉陶器は、京焼系陶器を中心とし瀬戸美濃陶器、肥前陶器が出土する。京焼系陶器は灯火具、調理具を中心とし、碗・火鉢など豊富な器種組成である。京焼系陶器は本時期でも地元産のものが含まれる。これら製品は多種にわたり、前代から出土した灯火具、調理具以外に食膳具の碗・鉢など日用品全般を生産する。肥前陶器は鉢類が各地で出土し、瀬戸美濃陶器は碗や水鉢・火鉢などの大型製品で、これは讃岐、阿波、土佐の城下町跡以外の遺跡でも出土する。

肥前磁器は本時期でも産地別組成の中心であり、これは四国の遺跡で共通する。その器

²⁰ 出土遺物を実見し分析した。

種組成も碗・皿などの食膳具を主体とする。小籠遺跡の組成をみると碗・皿は食膳具組成で碗 55%、皿 2%と高い比率である。(第 110 図) また、仏飯具や化粧具などの調度具が 18%と前代より比率を上げる。これは小籠遺跡に限らず他の集落跡や町屋跡でも共通し、城下町跡とは大差がなくなる。ただ、集落跡でも品質をみると有田町で生産された高級品は少なく、多くは量産品であり、品質には格差がある。また、肥前磁器に分類する中には砥部焼や西岡焼、富田焼など肥前磁器の技術的系譜を引く製品も多く含まれる。特徴的な体部に螺旋文に亀甲文や草文を施す碗は識別が可能であるが、これら以外は困難である。

④ 小結

四国地方は、高松城跡、徳島城下町跡以外は重層的に調査する例は少なく、これら以外の様相をつかむのは難しい。特に、小規模範囲に分布する土師質土器については、焙烙の研究成果があり様相はわかるが、それ以外については皆無に等しい。その一方で、陶磁器については、讃岐、阿波の資料を中心に雑駁ではあるが掴むことができた。

傾向としては、高知城跡などの城下町は、高松城跡や徳島城下町跡と陶磁器組成は共通する点が多い。特に、備前焼、肥前陶器、肥前磁器などについては組成や出現時期に差異はない。

その一方、城下町跡以外の集落跡や町屋跡では、17 世紀は城下町跡と陶磁器の出現期に差がある。肥前陶器を例にすると、岸岳系の肥前陶器の出土例はなく、出土するのは胎土目段階からと時期差がある。また、器種組成は集落跡や町屋跡は「桃山陶器」などの高級品は出土せず、量産品が中心である。材質は磁器の比率は低く、陶器が多い。18 世紀前期は、肥前磁器の「くらわんか手」が四国で出土例が増えるが、高松城跡や徳島城下町跡などの城下町跡と比べると出土量は少ない。また、器種も食膳具の碗・皿が中心であり、神仏具や化粧具などの調度具はごく僅かで器種組成も少ない。

18 世紀後期に至ると、城下町跡と集落跡や城下町周辺の町屋跡とは大まかな陶磁器組成、出現時期に大きな差異はなくなる。また、品質をみると徳島城下町跡や高松城跡などの城下町跡では肥前磁器の高級品は出土するが、それ以外の遺跡ではごく僅かで、多くは量産品で品質差がある。器種組成は、食膳具の碗・皿を中心とすることは、城下町跡でも集落跡でも同じだが、18 世紀後期以降は集落跡でも神仏具や化粧具などの調度具が一定量出土し、前代とは異なる組成である。

また、19 世紀以降、砥部焼や西岡焼などの在地窯が、四国で広域に点在し、近隣地域を

中心に流通すると考えられる。しかし、識別が困難であるため肥前磁器との比較は難しいが小籠遺跡の状況からみると、遺跡の性格に限らず、幕末期に近づくにつれて肥前磁器との差幅は広がると考えられる。さらに、この傾向は陶器でもある。高松城跡や徳島城下町跡ではこの時期に地元産の京焼系陶器が多く出土する。これは他の遺跡でも共通し、土佐の高知城跡や集落跡である小籠遺跡でも在地産の陶器が高い比率を示す。

在地産陶器が高い比率となる時期は、讃岐の富田焼、土佐の尾戸焼では 18 世紀後期からである。その一方で、阿波では、大谷焼が多種の製品を生産していないため、讃岐や土佐のような状況はみられない。ただ、大谷焼の徳利・甕については独占的な状況である。このように陶器・磁器ともに近接で生産が始まると、それが流入する。

一方、焼締陶器は、四国地方では共通して 18 世紀後期まで備前焼が中心である。これは生産地が近いということと、中世からその流通が確立した影響が大きいと考えられる。

第 4 節 中国地方の出土状況（第 114 図）

中国地方は、江戸時代は備前、備中、備後、安芸、周防、長門、因幡、伯耆、出雲、石見にわかれる。近世遺跡は、安芸の広島城跡（広島市）、備中の岡山城跡（岡山市）長門の萩城下町跡（萩市）などの城下町跡などが有名である。それ以外には因幡の米子城跡（米子市）、安芸の四日市遺跡（東広島市）などが挙げられる。しかし、他の遺跡については、調査条件の関係であろうか遺構に伴うものが少なく、あるとしても限られた時代であり、特に、山陰地方は少ない。このような条件ではあるが、いくつかの遺跡で計測分析ができた。また、四日市遺跡では分類方法が共通するため、その分析結果を採用した。

1 広島城跡（第 114 図 - 1）

江戸時代は安芸、現在は広島県広島市に所在する。広島城は天正 17 年（1589）に毛利輝元によって築城し、慶長 6 年（1601）に福島正則が入城後も整備し続けた。

広島城跡の発掘調査は、堀跡・二の丸を中心に調査を行っている。基町高校グランド地点では近世初頭から近代までの一括廃棄土坑を検出し、これより出土した土器・陶磁器の検討をしている。今回は、この資料を再検討し、新しい資料も加えて広島城跡の土器・陶磁器の様相を述べる。

① 17 世紀代

16 世紀末～17 世紀前期

SD 2 の産地別組成は、土師質土器 45%、備前焼 6%、丹波焼 1.3%、軟質施釉陶器 0.01%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 32.69%、上野・高取焼 7%、中国製磁器 5%にわかれる（第 115 図）。用途別組成は食膳具 83%、調理具 13%、貯蔵具 3%、調度具 4%と食膳具の比率が高い（第 116 図）。

土師質土器が 45%と半数近い比率を示す。これは地点により比率は異なるが大方 30%前後である。器種は皿・焙烙・焼塩壺・焜炉が出土し、このうち皿が大半を占める。焼締陶器は備前焼と丹波焼がある。主な器種は甕と播鉢で、貯蔵具組成では備前焼甕が高い比率であるが、肥前陶器甕も出土する。播鉢は調理具組成では備前焼 22%、丹波焼 9%、肥前陶器 4%、上野・高取焼 2%とあり（第 118 図）、播鉢でも備前焼が高い比率を示す。

施釉陶器・磁器は土師質土器を省く組成では焼締陶器より施釉陶器・磁器の占める割合が多く、その中心となるのが肥前陶器である。これは地点によって 60%近い比率を示す遺構もある。主な器種は皿で、他に碗・鉢・播鉢・甕などが出土する。また、品質は無文の量産品が多いが、絵唐津などの高級品も一定量含む。瀬戸美濃陶器の比率は低いが、志野焼や織部焼などの「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器が出土し、量産品はほとんどない。上野・高取焼は碗・皿・鉢などの食膳具が中心で、播鉢・瓶類も僅かに出土する。中国製磁器の主な器種は皿で景德鎮窯・漳州窯系の青花が出土する。

17 世紀中期

S K 45 は廃棄土坑である。産地別組成では土師質土器 50%、備前焼 9%、瀬戸美濃陶器 5%、肥前陶器 22%、中国製磁器 3%、肥前磁器 9%にわかれる（第 115 図）。用途別組成は食膳具 90%、調理具 6%、貯蔵具 3%、調度具 1%と食膳具が多い（第 116 図）。

土師質土器は依然として高い比率である。主な器種は皿と焼塩壺で、同時期の遺構では焙烙が出土し、この頃から増え始める。焼締陶器は備前焼のみである。播鉢・甕が出土し、同時期の遺構では大平鉢や鉢などもみられる。

施釉陶器・磁器は肥前陶器を中心とし、肥前磁器、瀬戸美濃陶器、中国製磁器が続く。肥前陶器は砂目積み皿が僅かに出土するが、中心は蛇ノ目釉ハギされた碗・皿で、これに三島手や刷毛目文の鉢も多い。また、同時期の遺構からは播鉢・甕も出土する。肥前磁器は本時期から出土する。寛永 14 年（1637）の窯場統合以前の製品が少ないことから、本格的に流入するのは本時期と考えられる。主な器種は碗・皿などの食膳具である。瀬戸美濃陶器は前代より激減する。器種は「桃山陶器」が僅かに出土する。中国製磁器は景德鎮

窯と漳州窯系の青花碗が僅かにみられる。

17 世紀後期

SD 3 は溝跡である。産地別組成では土師質土器 42.2%、備前焼 10%、肥前陶器 18%、上野・高取焼 1.6%、萩焼 1.6%、京焼系陶器 1.6%、肥前磁器 25%と、土師質土器を中心とし肥前磁器がこれに続く（第 115 図）。用途別組成は食膳具 85%、調理具 5%、貯蔵具 7%、調度具 3%にわかれる（第 116 図）。

土師質土器は本時期でも皿が多い。同時期の遺構では灯火芯を残すものが目立つ。また、他の遺構では焙烙や焼塩壺も出土するが量は少ない。焼締陶器は備前焼のみである。播鉢・甕を中心とし、鉢類などもみられる。これらは各用途別組成で高い比率を示す。焼締陶器は他に丹波焼播鉢が僅かに出土する（第 118 図）。

施釉陶器・磁器は、肥前磁器を中心とし肥前陶器、上野・高取焼、萩焼、京焼系陶器が続く。肥前磁器は、産地別組成において施釉陶器・磁器の主体となる（第 115 図）。主な器種は前代と変わりなく碗・皿などの食膳具で、その組成では 30%と上昇する（第 117 図）。また、他の遺構では食膳具以外に油壺や文具、瓶類などの調度具も一定量含む。肥前磁器に次いで比率が高いのが肥前陶器である。前代と比べると比率を下げるが、碗・鉢などの食膳具を中心とし、他の遺構からは甕も出土する。京焼系陶器は本時期から出現し、1.6%と僅かであるが碗類が出土する。タイプは錆絵の丸碗である。上野・高取焼、萩焼は食膳具がみられる。

② 18 世紀代

17 世紀後期～18 世紀前期

SK 39 の産地別組成は、土師質土器 61%、備前焼 1.8%、堺・明石焼 0.05%、瀬戸美濃陶器 1.6%、肥前陶器 7%、京焼系陶器 6%、中国在地陶器 4%、中国製磁器 0.6%、肥前磁器 23%と土師質土器を中心とし、肥前磁器がこれに続く（第 115 図）。本遺構では土師質土器が半数以上の比率であるが、同時期の遺構では肥前磁器が 30～50%に及ぶものもある。陶磁器全体でみた場合でも 50～70%が肥前磁器となるため、総じて肥前磁器が本時期に増加すると考えられる。用途別組成は食膳具 33%、調理具 57%、貯蔵具 3%、調度具 7%にわかれる（第 116 図）。

土師質土器は本遺構では皿のみであるが、同時期の遺構では焙烙・焼塩壺・ミニチュア土製品が出土する。焼締陶器は備前焼を中心とし、本時期から堺・明石焼が加わる。備前

焼は播鉢・甕が出土し、同時期の遺構からは灯火具が出現する。堺・明石焼は播鉢が出土し、調理具組成をみると備前焼1%、堺・明石焼1%とあり、備前焼播鉢と並ぶ（第119図）。

施釉陶器・磁器は先に述べた通り肥前磁器を中心とする。肥前磁器は食膳具の碗・皿を主体に仏飯具・香炉などの神仏具、合子や蓋物などの調度具も器種が増える。また、食膳具組成をみると36%と高い比率を示し（第118図）、その割合は前代より上昇し、これによって産地別組成で高い比率を示したと考えられる。肥前陶器は食膳具の碗・皿を中心とし、貯蔵具の甕も出土し、他の遺構では鉢や播鉢などもみられる。京焼系陶器は前代より比率を上げる。主な器種は丸碗で、色絵を施すものが主である。瀬戸美濃陶器は天目碗、上野・高取焼と中国在地陶器は本遺構では器種は不明であるが、同時期の遺構では貯蔵具が主に出土する。

18世紀後期

S K 16は廃棄土坑である。産地別組成では土師質土器20.5%、備前焼5%、信楽焼2%、堺・明石焼8%、瀬戸美濃陶器2%、肥前陶器15%、上野・高取焼0.6%、京焼系陶器5%、中国在地陶器4%、中国製磁器0.6%、肥前磁器37.3%と、土師質土器は比率を下げ肥前磁器が中心となる（第115図）。用途別組成は食膳具60%、調理具26%、貯蔵具7%、調度具7%と続く（第116図）。

土師質土器は引き続き皿を主体とし、他に焙烙が出土する。焼締陶器は備前焼、堺・明石焼の組成は前代と変わらない。播鉢は調理具組成では（第118図）堺・明石焼41%、備前焼25%、上野・高取焼4%と、堺・明石焼が前代より比率を上げる。甕は備前焼が高い比率で、肥前陶器も20%と一定量出土する（第119図）。

施釉陶器・磁器は肥前磁器が前代より比率を上げる（第115図）。主な器種は変わりなく、食膳具組成をみると（第117図）、肥前磁器62%、肥前陶器17%、瀬戸美濃陶器7%、京焼系陶器2%と前代より上昇しており、産地別組成で比率を上げるのは食膳具の増加によることがわかる。瀬戸美濃陶器は碗、肥前陶器は碗・皿・鉢などの食膳具と片口が出土するが、その比率は前代より減少する。京焼系陶器は碗を中心とし、本時期から土瓶が出現する。中国在地陶器は本時期から増加する。器種は小片で分類できなかったが貯蔵具ではないかと考えられる。

③ 19世紀代

18 世紀後期～19 世紀前期

S K53 は廃棄土坑である。産地別組成では土師質土器 45%、備前焼 6%、堺・明石焼 2%、瀬戸美濃陶器 0.93%、肥前陶器 3%、京焼系陶器 1%、中国在地陶器 18%、肥前磁器 25%と、再び土師質土器の比率が上がる（第 115 図）。これは焙烙の破損が著しいため、個体数では肥前磁器が一番高い。用途別組成は食膳具 41%、調理具 45%、貯蔵具 3%、調度具 11%にわかれる（第 116 図）。

土師質土器は皿と焙烙を中心とし、同時期の遺構では甕・火鉢・焜炉類が急増する。甕は山口県の佐野焼と考えられる。焼締陶器は備前焼、堺・明石焼が出土する。備前焼は灯明皿を中心に、伊部手の鉢・小壺などがある。堺・明石焼は播鉢のみで前代と変わらず播鉢組成で高い比率を示す。

施釉陶器・磁器は、肥前磁器の主な器種は碗・皿などの食膳具で、その組成の 60%を肥前磁器が示し、依然してと主体である（第 117 図）。また、この肥前磁器の中には、愛媛県砥部焼や西岡焼などの四国地方にある肥前磁器の技術的系譜を引く窯製品が含まれる。第 3 節の四国地方でも述べたが、特徴的な製品は識別が可能だがそれ以外の製品については胎土や装飾が類似し分類するのが困難である。ただ特徴なものだけを分類すると 4%であり、肥前磁器には大きな影響はないと考えられる。京焼系陶器は前代より増加する。それは土瓶が急増するためである。本遺構では出土していないが、碗をはじめとして餌鉢・水滴・火鉢などの調度具がこの時期から多く出土する。肥前陶器は鉢が僅かで、前代まで主製品であった碗は京焼系陶器に主体が移行する。瀬戸美濃陶器は水鉢・火鉢などの大型製品が中心で、中国在地産陶器は甕・壺などの貯蔵具がみられる。

19 世紀後期

この時期の良好な遺構はなく大筋で組成を述べる。産地別組成は土師質土器、備前焼、堺・明石焼、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、京焼系陶器、中国在地陶器、不明陶器、肥前磁器、瀬戸美濃磁器、京焼系磁器、不明磁器などが出土する。用途別組成は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具があり、食膳具を中心とするが調理具も比率を上げる。

肥前磁器が本時期でも一番多く出土する。また、瀬戸美濃磁器や産地不明磁器などが新たに加わるが、肥前磁器には大きな影響は及ばない。瀬戸美濃磁器は碗を中心とし、幕末期の遺構からは皿が加わる。また、先にも述べたが肥前磁器の中に砥部焼や西岡焼などの製品が増える。特徴的な碗・皿類を分類すると食膳具全体の 10%を占め、前代より増加する。京焼系陶器は豊富な器種組成で、この時期から行平が加わり、これにより調理具の比

率がさらに上がる。また、京焼系陶器の中には近畿で生産したものとは釉調や胎土などが異なるものが含まれる。比率的には遺構によって異なるが、近畿産以外の製品が高い比率と考えられる。瀬戸美濃陶器は前代と組成に変化なく、中国在地陶器は出土量が増す。焼締陶器の備前焼は比率が減少し、播鉢は堺・明石焼、甕は土師質土器もしくは大谷焼に主体が移行し、僅かに徳利や植木鉢、灯火具が出土するのみとなる。

④ 小結

広島城跡の産地・用途別組成を検討した。土師質土器、備前焼、肥前陶器、肥前磁器が江戸時代を通して出土し、その中で土師質土器は18世紀後期まで高い比率を示し、これに肥前磁器が続く組成である。土師質土器は破損しやすいため数値が高いが、肥前磁器との差幅は実質的には時代の経過とともに縮まると考えられる。

肥前磁器は17世紀後期に増加し、これに続くのが肥前陶器と備前焼で、その組成は18世紀後期まで変わらない。肥前陶器は碗・鉢などの食膳具、調理具の播鉢、貯蔵具の甕などが出土し、江戸時代を通して一定量出土する。18世紀後期に京焼系陶器、中国在地陶器の増加により食膳具は減少する。これは、京焼系陶器碗・土瓶、中国在地陶器の貯蔵具の増加により、その受容が肥前陶器から、それら産地に主体が移行するためである。

備前焼は、17世紀代は丹波焼と競合しながら播鉢を主体に高い比率を示すが、18世紀中期の堺・明石焼播鉢の出現により、これまで主製品であった播鉢は堺・明石焼に移行する。播鉢に変わり主製品になるのが灯火具で19世紀代まで出土する。

この他に、上野・高取焼は途中途切れる時期もあるが僅かであるが食膳具、調理具が出土し、19世紀には砥部焼、西岡焼などの近郊で生産した製品も出土する。

2 四日市遺跡（第114図 - 2）

江戸時代は安芸、現在は広島県東広島市に所在する。本遺跡は、江戸時代に西国街道（山陽道）沿いの「宿場町」である。西国街道は大坂から九州を結ぶ脇往還で、四日市はその街道に沿って町屋が形成され、規模は延長900mにも及ぶと考えられている。

発掘調査は、JR西条駅南側の西条本町、栄町地区が中心で、旧四日市の中心部を主に行われる。調査の結果、18世紀以降の遺構・遺物を中心とし、特に幕末期に描かれた絵図どおりの屋敷割や井戸、便所などが検出し、その建物が19世紀前期に形成し、既存時まで継続することがわかった。遺物は、16世紀末～17世紀初頭の肥前陶器碗・皿や漳州窯系

の青花皿なども出土するが、18世紀以降の遺物と共伴するため、17世紀代の土器・陶磁器組成は不明である。中心は先に述べたとおり18世紀代以降である。第1～4次調査の出土遺物については、堀内秀樹氏が計測分析され本遺跡の土器・陶磁器の様相が述べられた。この堀内氏の分析方法は、筆者の分析とほぼ同じであり、同氏の分析結果を採用した²¹。ただ、土師質土器、瓦質土器については分析していないため数値には示せなかった。

① 17世紀代

先にも述べたがこの時期に属する遺構はごく僅かである。遺物も遺構数が少ないのもあるが、包含層遺物を含んでも1%にもみえない。これは第8～10次調査においても同様であり、それが本遺跡の特徴と思われる。遺構から出土する遺物のなかには、17世紀代の製品がいくつかある。土師質土器、備前焼、肥前陶器、肥前磁器である。土師質土器は具体的な数値は示せないが、8：2の割合で陶磁器より土師質土器が多く出土する。肥前陶器は岸岳系の製品は出土せず、古い時期のものとしては胎土目積皿がある。この他に、砂目積折縁皿、丸皿が出土するが、溝縁皿はみられない。備前焼は17世紀後期から出現する「伊部手」はなく、16世紀末～17世紀前期の播鉢・甕のみである。肥前磁器は寛永14年（1637）の窯場統合以前のもはほとんどなく、それ以降の製品が目立つ。全体的に出土量が少ないため特徴を述べるのは難しいが、新器種に分類されるものはなく、17世紀初頭と17世紀中期でも後期に近い時期に若干のまとまりがある。

② 18世紀代

17世紀後期～18世紀前期

本時期から遺構数が僅かではあるが増えはじめる。

第10次調査第5827号遺構は溝である。産地別組成では備前焼25%、瀬戸美濃陶器16%、肥前陶器34%、肥前磁器25%にわかれる（第121図）。用途別組成は食膳具71%、調理具19%、調度具7%、貯蔵具3%と続く（第122図）。

土師質土器は皿・火鉢が出土する。数値的には陶磁器より高いと考えられる。皿は口縁に灯火芯を残すものが多い。備前焼は播鉢・瓶類がある。播鉢・瓶類ともに備前焼のみで同時期の遺構では甕も出土する。肥前陶器は食膳具の碗・鉢がある。その組成をみると肥

²¹堀内秀樹他『西条栄町・西条本町 四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ―第1～4次調査―』財団法人 東広島市教育文化振興事業団 2004年

前陶器碗 8%、肥前陶器鉢 57%、肥前磁器碗 21%、肥前磁器皿 14%で (第 123 図)、肥前陶器鉢が一番高い比率を示す。また、同時期の遺構からは播鉢・甕も出土する。肥前磁器の主な器種は碗・皿である。食膳具組成で肥前陶器鉢より比率は低いが、碗は肥前陶器 8%に対して肥前磁器 21%と大差があり、碗については肥前磁器が中心である。品質は「くらわんか手」などの量産品のみで中高級品はない。

18 世紀中期

第 1459 号遺構は廃棄土坑である。産地別組成を見ると備前焼 5%、瀬戸美濃陶器 2%、肥前陶器 4%、中国在地陶器 6%、肥前磁器 83%で (第 121 図)、肥前磁器が高く、同時期の第 1465 号遺構では肥前陶器 40%、肥前磁器 40%と肥前陶器と拮抗する組成を示すが、肥前磁器が産地別組成において高い比率を示すことに違いない。用途別組成は (第 122 図) 食膳具が 71%と高い比率を示し、調理具 19%、調度具 7%、貯蔵具 3%と続く。

土師質土器は皿と火鉢が出土する。前代と同様に皿は灯火芯を残すものが多い。備前焼は播鉢と甕である。播鉢は調理具組成をみると備前焼のみである (第 124 図)。甕は貯蔵具組成で中国在地陶器 60%、備前焼 40%と新たに中国在地陶器が加わる (第 125 図)。瀬戸美濃陶器、肥前陶器ともに器種は不明であったが、同時期の遺構から瀬戸美濃陶器は天目碗、灰釉皿などが出土する。肥前陶器も食膳具の碗・皿・鉢がみられる。肥前磁器は食膳具の碗・皿・小坏・猪口が出土する。品質は有田町で生産された高級品はほとんどなく、大半は長崎県波佐見町周辺で生産された量産品である。

18 世紀後期

第 1466 号遺構は廃棄土坑である。産地別組成を見ると備前焼 11%、堺・明石焼 5%、瀬戸美濃陶器 5%、肥前陶器 23%、中国在地陶器 8%、肥前磁器 48%と肥前磁器が半数近い比率を示す (第 122 図)。用途別組成では食膳具 65%、調理具 22%、貯蔵具 9%、調度具 6%と続く (第 123 図)。

土師質土器は皿と甕である。皿は前代と同様に灯火芯を残すものが多い。甕は山口県の佐野焼である。備前焼は播鉢・甕・灯火具が出土する。播鉢は調理具組成では堺・明石焼 45%、備前焼 27%、中国在地陶器 9%と (第 124 図)、堺・明石焼播鉢に主体が移行する。甕は貯蔵具組成で備前焼 88%、中国在地陶器 12%と備前焼甕が依然として高いが、数値には示せなかったが土師質土器甕 (佐野焼) がこの時期から多くなる (第 125 図)。肥前陶器は食膳具の碗・鉢、調度具の神仏具が出土する。食膳具組成をみると (第 123 図)、肥前磁器 61%、肥前陶器 34%と肥前磁器より低い。肥前磁器は食膳具の碗・皿・小坏、

調度具の瓶類が出土する。食膳具は先のとおり高い比率を示し、その中心となるのが碗である。碗は丸碗が中心であるが、望料碗や広東碗などの蓋を伴う碗も含まれる。

18 世紀後期～19 世紀前期

第 10 次調査第 6047 号遺構は井戸遺構である。産地別組成は備前焼 7%、丹波焼 1.5%、堺・明石焼 2.5%、瀬戸美濃陶器 1.5%、肥前陶器 4%、萩焼 0.5%、京焼系陶器 11%、中国在地陶器 12%、肥前磁器 60%と（第 121 図）、前代と変わりなく肥前磁器が主体だが、萩焼や京焼系陶器などが出現する。用途別組成をみると食膳具が 57%と高く、これに調度具 16%、調理具 17%、貯蔵具 10%が続く（第 122 図）。

土師質土器は皿・甕である。皿は前代と同様に灯火芯を残すものが多い。甕は山口県の佐野焼である。備前焼は徳利・甕で、同時期の遺構からは播鉢も出土する。播鉢は調理具組成では堺・明石焼播鉢のみで、他遺構でも同様である（第 124 図）。甕は貯蔵具組成では備前焼 33%、丹波焼 33%、中国在地陶器 25%、肥前陶器 9%と（第 125 図）、新たに丹波焼が出現し、備前焼と拮抗する。また、土師質土器甕（佐野焼）も多く出土し、甕については先の産地と競合する。丹波焼はこの時期から出現するが、全体量は僅かである。器種は本遺構では甕であるが、鉢などの調度具も出土する。

肥前陶器の器種は食膳具の碗・鉢、調理具の片口、貯蔵具の甕、調度具の神仏具などである。食膳具組成では肥前磁器 85.5%、肥前陶器 7%、京焼系陶器 4%、瀬戸美濃陶器 2%、萩焼 0.5%と（第 123 図）、依然として肥前磁器が高い比率で、次に続く肥前陶器とは大差がある。肥前陶器碗は陶胎染付が中心で、タイプをみると伝世品と考えられる。京焼系陶器はこの時期から出現し、器種は食膳具の碗、調理具の土瓶である。碗は丸碗のみで、同じ材質である碗の組成では京焼系陶器 4%、肥前陶器 3%、瀬戸美濃陶器 2%、萩焼 0.5%と京焼系陶器碗が一番高い比率を示す（第 123 図）。調理具の土瓶は、本時期から出現し、これ以降、高い比率を示す。中国在地陶器は先の述べた器種以外に調理具の徳利・土瓶がある。徳利は 1・2 合程度の小型徳利である。肥前磁器は先のとおり産地別組成で高い比率を示す。食膳具の碗・皿を中心とし、調度具などがある。食膳具組成では碗 63.6%、皿 19%とあり、これらで半数以上を占める（第 123 図）。碗の器形は広東碗、「くらわんか手」碗、朝顔碗など法量的に中碗に属するものが多いが、小碗の筒型碗もありバリエーションがみられる。調度具は神仏具・化粧具・瓶類が出土し、前代より器種が増える。

③ 19 世紀代

本時代に至ると、遺構数が増える。これにより遺物も急増し、さらに一括廃棄遺構数も増える。

19 世紀前期

本時期の資料として第 1478 号遺構、第 1497 遺構があり、これらは廃棄土坑である。第 1478 号遺構の産地別組成を見てみると、備前焼 4%、堺・明石焼 2%、瀬戸美濃陶器 12%、肥前陶器 12%、中国在地陶器 8%、肥前磁器 54%と（第 121 図）、本遺構では萩焼や京焼系陶器は出土しないが第 1497 遺構からは出土する。用途別組成では食膳具が 71%と高く、これに貯蔵具 13%、調理具 9%、調度具 7%が続く（第 122 図）。

土師質土器は皿・甕・焔炉類が出土する。新たに焔炉類が出現するが量は少ない。備前焼の器種は播鉢・灯火具である。播鉢は 18 世紀後期に堺・明石焼が主体となったが、この時期でも変わらず、調理具組成で備前焼播鉢 20%、堺・明石焼播鉢 20%と高い比率ではないが一定量は維持する（第 124 図）。瀬戸美濃陶器の器種は食膳具の碗、調度具の鉢である。18 世紀代よりやや比率を上げる。肥前陶器は食膳具の皿・鉢、貯蔵具の甕・瓶類が出土する。このうち食膳具の鉢はこの時期でも比率が高く、陶磁器の鉢はこれのみである。甕は貯蔵具組成をみると中国在地陶器 60%、肥前陶器 30%と一定量は出土する（第 125 図）。中国在地陶器の器種は調理具の鍋類、貯蔵具の甕、調度具の瓶類がみられる。甕は先に述べたとおり出土量が多い。調理具の鍋類はこの時期から出現する。本遺構では出土しないが、多くの遺構では中国在地陶器鍋類より京焼系陶器鍋類が高い比率を示す。肥前磁器は本時期でも 54%と高い比率である。主な器種は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の神仏具である。食膳具組成では肥前磁器 81%、肥前陶器 19%と半数以上はこれが占める（第 123 図）。その主体なのが碗 56%である。品質は量産品が多く、高級品は僅かである。

19 世紀中期

前代よりさらに遺構・遺物が増え、良好な一括廃棄土坑も多い。資料としては第 1486 号遺構がある。産地別組成では備前焼 2.5%、堺・明石焼 7%、瀬戸美濃陶器 8%、肥前陶器 8.2%、萩焼 0.05%、京焼系陶器 10%、中国在地陶器 16%、中国製磁器 0.02%、肥前磁器 40%、瀬戸美濃磁器 8.2%と（第 121 図）、依然として肥前磁器が中心である。用途別組成は食膳具が 37%、調理具 36%、貯蔵具 13%、調度具 14%にわかれる（第 122 図）。

土師質土器の器種は皿・鍋類・甕・焔炉類で、器種組成は前代と同じである。備前焼は播鉢・甕が出土する。播鉢は調理具組成では堺・明石焼 24%、備前焼 0.8%と大差がある

(第 124 図)。甕も同様で貯蔵具組成を見てみると肥前陶器 32%、中国在地陶器 13%、備前焼 2%と主体は肥前陶器・中国在地陶器へ完全に移行する(第 125 図)。瀬戸美濃陶器は食膳具の碗・皿、調理具の土瓶、貯蔵具の甕(水鉢)、調度具の火鉢など豊富な器種がみられるが、各器種の比率は低い。肥前陶器は食膳具の碗・鉢、調理具の片口・徳利、貯蔵具の甕などが出土する。その中で食膳具の鉢については依然として高い比率を示す。京焼系陶器は食膳具の碗、調理具の土瓶、調度具の灯火具・神仏具などが出土する。灯火具はこの時期から出現し、幕末期から明治の遺構ではその比率をさらに上昇する。中国在地陶器は本時期でも豊富な器種組成である。その中で徳利は前代より急増する。肥前磁器は産地別組成で 40%と高い比率である。同じ磁器の瀬戸美濃磁器が出現するが、比率が示すように大きな影響はない。また、肥前磁器の中には愛媛県の砥部焼や西岡焼などの製品も含まれる。碗のタイプは蓋を伴う端反碗や広東碗などが中心で、これに小丸碗や筒型碗などの小碗が出土する。碗以外に皿・鉢・小坏などがみられる。

④ 小結

四日市遺跡の土器・陶磁器は、17 世紀代は出土量が僅かで、17 世紀後期～18 世紀前期から増えはじめ、18 世紀後期以降に一気に出土量が増す。これは四日市の主産業である宿場町の発展と大きく関係すると考えられる。

産地別組成は肥前磁器が 18 世紀～19 世紀前期まで高い比率を示す。肥前磁器に次ぐのが肥前陶器、中国在地陶器などの施釉陶器である。今回は土師質土器・瓦質土器は分析外であるが、江戸時代を通して肥前磁器を下回ることはなかったと考えられる。用途別組成は常に食膳具が主体で、調理具、貯蔵具、調度具が続き、調理具は 19 世紀には食膳具と拮抗する比率となる。また、全体的に調度具の比率が低いのも特徴である。

18 世紀代は、肥前磁器の増加、堺・明石焼、中国在地陶器の出現がある。肥前磁器は食膳具の碗・皿を中心とし、前代まで高い比率を示した肥前陶器と近接するが、器種で見た場合、碗・皿は肥前磁器に主体は移行し、肥前陶器は鉢・甕を中心とする組成に変わる。また、本時期から新たに堺・明石焼や中国在地陶器が加わったことにより、挿鉢は堺・明石焼、甕は中国在地陶器に主体が移行し、その影響によりそれまで比率の高い備前焼は減少する。

19 世紀代に至ると、陶磁器の全体量が増える。その中心となるのは前代に引き続き肥前磁器である。食膳具を中心とし、神仏具や化粧具なども増加し、それにより調度具は前代

より僅かに比率を上げる。調理具の播鉢は堺・明石焼を中心とするが、本時期から中国在地陶器の徳利・土瓶・鍋類などの煮沸具が急増し、その影響により 19 世紀中期には食膳具と近接する比率を示す。また、貯蔵具の中国在地陶器甕が引き続き高い率であることから、調理具や貯蔵具などは近郊の産地のものを多く受容する。

このように、四日市遺跡では 17 世紀後期～18 世紀前期、18 世紀後期～19 世紀前期に大きな画期がみられた。この変化は、四日市の宿場町の活性と大きく関係すると思われる。また、遺物も 18 世紀後期以降に蓋付碗・爛徳利の増加は、宿場の特徴を示す。

3 米子城跡（第 114 図 - 10）

江戸時代は因幡、現在は鳥取県米子市に所在する。中世は尼子氏支配下の城館として、江戸時代には中村一忠が入城するが、慶長 14 年（1609）に中村一忠が急死し、翌慶長 15 年（1610）に美濃国黒野城主加藤貞泰が伯耆の国である会見・汗入郡 6 万石の領主として転封される。元和 3 年（1617）に加藤貞泰は伊予国大洲へ転封となり、因伯の領主池田光政の一族が米子城を預かり、以後、親族が継続する。

発掘調査は、武家屋敷が点在した城下町を主体に、現在までに 30 数次に及ぶ調査が行われる。21 次調査では、江戸時代の遺物が比較的まとまって出土したため数量カウントし、報告されている。今回は、この資料を再分析し、また、近年の調査成果も踏まえて、その分析結果を述べる。

① 17 世紀代

16 世紀末～17 世紀前期は全体的に出土量が少なく、遺構によってその内容が大きく異なる。SE02 の産地別組成は備前焼 7%、肥前陶器 86%、中国製磁器 7% で（第 127 図）、本遺構からは土師質土器は出土しないが、他の遺構からは多く出土する。用途別組成は食膳具 95%、調理具 2.5%、貯蔵具 2.5% にわかれる（第 128 図）。

土師質土器は同時期の遺構から皿・焼塩壺が出土する。焼締陶器は備前焼のみで、器種は甕が出土し、他の遺構からは播鉢も僅かにみられる。

施釉陶器・磁器は肥前陶器が中心である。肥前陶器は本地点の特徴なのかもしれないが、胎土目製品が中心で、砂目積み製品は少ない。また、品質は量産品が多く、絵唐津は全体的に少ない。主な器種は食膳具の碗・皿・鉢と、調理具の播鉢である。食膳具組成をみると肥前陶器碗 54%、肥前陶器鉢 23%、肥前陶器皿 15% と皿は少ない（第 129 図）。中国

製磁器は食膳具の皿が8%出土する(第129図)。景德鎮窯や漳州窯系の製品がみられる。また、本遺構からは瀬戸美濃陶器は出土しないが同時期の遺構からは志野焼、織部焼などの「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器が僅かに出土する。

17世紀中期

SK44の産地別組成をみると、土師質土器40%、瓦質土器0.4%、瀬戸美濃陶器2.3%、肥前陶器42%、中国製磁器4.4%、肥前磁器9%にわかれる(第127図)。用途別組成は食膳具56%、調度具33%、調理具11%と続く(第128図)。

土師質土器は皿・焙烙が出土する。皿はロクロ成形で灯火芯を残すものが多い。焙烙はこの時期から出現し、成形方法・器形から在地産と考えられる。肥前陶器は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢がみられる。このうち食膳具組成をみると肥前陶器皿59%、肥前磁器碗13%、肥前陶器鉢8%、中国製磁器皿8%、瀬戸美濃陶器鉢4%、肥前陶器碗4%、肥前磁器皿4%と肥前陶器皿を中心とする(第129図)。播鉢は肥前陶器のみで(第130図)、前代に出土した備前焼はこの時期以降みられなくなる。また、同時期の遺構からは肥前陶器甕も出土する。肥前磁器の出現と同時に中国製磁器は減る。器種は碗を中心し、その品質は高級品2に対して、量産品3で、量産品が多い。

② 18世紀代

17世紀後期～18世紀代の良好な資料がないため、包含層や年代幅の長い遺構の資料で状況をみる。

SK49の産地別組成は土師質土器48%、瓦質土器0.4%、備前焼0.6%、肥前陶器17%、中国在地陶器10%、肥前磁器24%にわかれる(第127図)。中国在地陶器に分類したのは石見焼・布志名焼・須佐唐津焼などの中国地方の日本海沿いの産地である。用途別組成は調度具53%、食膳具36%、調理具10%、貯蔵具1%と続く(第128図)。

土師質土器は皿・焙烙・火消し壺が出土する。皿は灯火芯を残すものが大半で、主に灯火具として使用したことがわかる。灯火具は調度具組成をみると土師質土器90%、備前焼0.4%と圧倒的に本産地が中心である(第132図)。

肥前陶器の器種は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢、貯蔵具の甕と豊富な組成である。食膳具組成をみると肥前磁器碗29%、肥前陶器碗14%、肥前磁器皿13%、肥前磁器小坏13%、中国在地陶器皿11%、中国在地陶器碗8%、肥前陶器皿6%、肥前磁器鉢3%、中国在地陶器鉢1.8%、肥前陶器鉢0.6%、中国在地陶器小坏0.6%と(第129図)、肥前磁

器碗が高い比率である。肥前陶器は調理具組成をみると、肥前陶器播鉢 71%、中国在地陶器播鉢 18%と依然として多く、新たに中国在地陶器が出現する（第 130 図）。甕は貯蔵具組成では新たに中国在地陶器 19%が加わるが、中心は肥前陶器 81%である（第 131 図）。中国在地陶器は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢・鍋類、貯蔵具の甕、調度具など豊富な器種が出土する。但し、肥前陶器と重なる器種が多い。肥前磁器の器種は食膳具の碗・皿・小坏、調度具の神仏具、文具など豊富な組成で、このうち食膳具が主体である。品質は有田町で生産された高級品は少なく、長崎県波佐見周辺の諸窯で生産された粗製品が中心である。

③ 19 世紀代

SE09 は 19 世紀前期～19 世紀中期の遺構である。産地別組成は（第 127 図）、土師質土器 13%、肥前陶器 8%、中国在地陶器 33%、肥前磁器 43%、瀬戸美濃磁器 3%にわかれる。用途別組成は食膳具 44%、調理具 26%、調度具 21%、貯蔵具 9%と続く（第 128 図）。

土師質土器の主な器種は皿・焙烙・焜炉類である。皿はこの時期に激減する。前代まで灯火具の中心であったが、調度具組成をみると灯火具は土師質土器灯火具 2%と激減する（第 132 図）。これは同時期の出土状況によると中国在地陶器灯火具が急増しており、これにより陶器質の灯火具に主体が移行する。肥前陶器は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢と前代より器種が減る。このうち食膳具組成では肥前磁器 55%、中国在地陶器 36.8%、瀬戸美濃磁器 4%、肥前陶器 2.8%、土師質土器 0.7%と（第 129 図）、肥前磁器が高い比率である。その一方、肥前陶器は前代より比率が下降し、施釉陶器の主体は中国在地陶器に移行する。それは調理具でもみられ、中国在地陶器播鉢 32%、肥前陶器播鉢 17%と主体が逆転する。中国在地陶器の器種は豊富で、食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢・土瓶・土鍋、貯蔵具の甕、調度具の植木鉢・香炉である。

肥前磁器は食膳具の碗・皿、調度具が出土する。食膳具組成は先のとおり、中国在地陶器が急増するなかで 35%と増加する。品質は高級品がほとんどなく、量産品が中心である。碗の器形は広東碗・端反碗などの中碗が多く、小碗の半球碗、小丸碗はほとんどない。皿は大皿と中皿があり、大皿は 17 世紀後期～18 世紀前期のものを漆継ぎして使用する。さらに、肥前磁器に分類したが、日本海側に点在する肥前系の技術的系譜を引く磁器窯の製品も含むが、識別は困難である。瀬戸美濃磁器は食膳具の碗・皿が出土するが、その量は僅かである。

④ 小結

米子城跡の大きな特徴としては、陶器が時代を通して多いことである。18世紀前期までは肥前陶器、それ以降は中国在地陶器が高い比率を示す。特に、18世紀後期以降は、中国在地陶器が生活用具のすべてにみられ、各用途別組成で比率が高かった。時代順にまとめると以下の通りである。

17世紀代は肥前陶器を中心とし、17世紀中期に肥前磁器が出現しても大きな影響はみられない。土師質土器は肥前陶器に次いで高い比率で、主な器種は灯火具の皿・焙烙である。焼締陶器は備前焼のみ。器種は播鉢が僅かで、主に甕が出土する。肥前陶器は食膳具の碗・皿を中心とし、播鉢・瓶類・甕など豊富な器種組成である。

18世紀代は、肥前磁器が急増する。食膳具の碗・皿・小坏を中心とし、前代まで高い比率を示した肥前陶器は比率を下げる、食膳具は肥前磁器に主体が移行するが、鉢・播鉢などの調理具が一定量出土する。また、この時期から中国在地陶器が出現し、播鉢・甕類がみられ、播鉢は肥前陶器と競合する。甕は備前焼が姿を消し、肥前陶器を中心に中国在地陶器が続く。

19世紀代に至ると、中国在地陶器の比率がさらに上がる。器種は多種にわたり、碗・皿などの食膳具、播鉢・土瓶・土鍋などの調理具、甕・瓶類などの貯蔵具、灯火具・神仏具などの調度具とあらゆる用途の製品が出土する。この中国在地陶器に続くのが肥前磁器である。前代より出土量は減る産地が多いなかで、本産地は増加する。主な器種は碗・小坏など食膳具である。碗のタイプをみると蓋付きのものが目立ち、小坏・猪口に類似するものも多い。

4 その他の遺跡

中国地方では、日本海側の山陰地方と瀬戸内海側の山陽地方では流通体制が異なると想定できる。しかし、先に述べた広島城跡、米子城跡以外では、近世を通して状況がわかる遺跡は少ない。そのため、各遺跡で出土する土器・陶磁器の分布状況で様相を検討する。ただ、19世紀以降は比較的良好な一括廃棄土坑があるため、いくつかの遺跡で計測分析をおこなったので、それを含めて近世の様相を検討する。

① 17世紀代

16世紀末～17世紀前期

この時代は、出雲の富田川河床遺跡（島根県 第 114 図 - 9）や長門の長門国府遺跡（山口県下関市 第 114 図 - 5）などいくつかある。このうち富田川河床遺跡は、富田城の城下町遺跡で正保元年（1644）の木札に伴う資料や寛永 6 年（1666）の洪水により水没し、この水害に伴う資料などがあり年代観を掴める資料としてよく挙げられる。

富田川河床遺跡 IP 区では重層的に確認されている。16 世紀後期とする第 4 遺構面では肥前陶器は出土していない。出現は 16 世紀末～17 世紀初頭とする第 3 遺構面からである。第 3 遺構面に属する **S K184** の産地別組成では（第 133 図）、土師質土器 23%、備前焼 10%、瀬戸美濃陶器 5%、肥前陶器 47%、中国製陶器 2%、中国製磁器 23%と、肥前陶器が本時期に出現し、一気に高い比率を示す。用途別組成は食膳具 84%、調理具 7%、貯蔵具 8%、調度具 1%にわかれる（第 134 図）。土師質土器は皿・土釜が出土する。皿は食膳具に分類するものが多い。備前焼は播鉢・徳利・甕・壺がみられる。播鉢は調理具組成では備前焼播鉢のみである（第 136 図）。甕・壺は貯蔵具組成で備前焼 76%、中国製陶器 16%、肥前陶器 8%とこれも圧倒的に備前焼が高い比率を示す（第 137 図）。肥前陶器は貯蔵具以外に食膳具の碗・皿・鉢があり、食膳具組成を見ても肥前陶器 39.7%、中国製磁器 29.5%、土師質土器 24.5%、瀬戸美濃陶器 6.3%と高い比率を示し（第 135 図）、これを主に受容したことがわかる。

長門国府遺跡は山口県下関市に所在する。宮の内地区の調査では近世の遺構がまとまって検出した。数量的な比率は不明であるが 16 世紀末～17 世紀前期とする **LK18** では、備前焼、肥前陶器、萩焼、中国製磁器が出土する。同時期の遺構では上野・高取焼の製品もみられる。備前焼の器種は播鉢で、同時期の遺構では甕もある。肥前陶器は碗・皿などが中心で、甕も含む。萩焼は食膳具の碗を中心とし、他に皿・鉢が出土する。中国製磁器は食膳具のみで漳州窯系の青花碗・皿がみられる。

17 世紀中期～17 世紀後期

本時期に、広島城跡や米子城跡などで肥前磁器が一気に増加し、産地別組成で中心になっていた。これら以外で肥前磁器の出現時期やその状況については、富田川床遺跡や備中の二日市遺跡（岡山県）（第 114 図 - 4）は年代の手がかりとなる資料がある。

富田川床遺跡の第 7 次 **IP 区**第 2 遺構面は、上面である第 1 遺構面の年代観が寛永 6 年（1666）の水害資料と考えるため、本資料は 17 世紀中期の年代観が与えられている。

産地別組成は（第 133 図）、土師質土器 18%、備前焼 15%、瀬戸美濃陶器 3%、肥前陶器 40%、中国製陶器 1%、中国製磁器 18%、肥前磁器 5%となる。16 世紀末～17 世紀前

期と比べると中国製磁器が減り、肥前磁器が新たに加わる。用途別組成は（第 134 図）、この時期でも食膳具が 84%と依然として高い比率を示す。

土師質土器の主な器種は皿・土釜である。この時期でも皿が多く、主に食膳具として使用する。備前焼は前代と器種組成に大きな変化はなく、調理具の播鉢、貯蔵具の甕・壺で、各用途別組成で高い比率を示す（第 136・137 図）。肥前陶器は産地別組成において 40%と前代と同様に高い比率である。主な器種は食膳具で、引き続きこれを主に受容される。品質は量産品が中心だが絵唐津も一定量ある。中国製磁器も前代と変わりなく白磁皿、青花皿で、青花については景德鎮窯よりは漳州窯系が目立つ。肥前磁器は食膳具の碗・皿が主に出土する。タイプをみると寛永 14 年（1637）の窯場統合以前の製品が中心だが、それ以後の製品も若干含まれる。

二日市遺跡銭座跡は、寛永 14 年～17 年（1637～1640）まで操業された岡山藩銭座であり、閉座時期が文献資料などで判明しており、下限年代がわかる資料である。

産地別組成を見てみると土師質土器 28%、備前焼 10%、丹波焼 0.2%、瀬戸美濃陶器 0.6%、肥前陶器 44.3%、上野・高取焼 0.9%、中国製磁器 2%、肥前磁器 14%で、肥前陶器が半数近い比率を占める（第 139 図）。この産地別組成は同時期の岡山城跡の状況と共通する。用途別組成は食膳具 62%、調理具 13%、貯蔵具 4%、調度具 21%にわかれる（第 140 図）。

土師質土器の主な器種は皿・鍋類である。皿は灯火芯を残すものが多く、灯火具として受容される。その比率は調度具組成を見てみると 82%と高い比率を示す（第 144 図）。備前焼は調理具の播鉢・徳利、貯蔵具の甕が多く出土する。調理具組成を見てみると土師質土器鍋 43%、備前焼播鉢 40%、備前焼徳利 13%、肥前陶器播鉢 5%と（第 142 図）、遺跡は備前焼の産地に近いが肥前陶器播鉢が流入する。肥前陶器は播鉢以外に食膳具の碗・皿・鉢などがある。食膳具組成では肥前陶器 60.8%、肥前磁器 22.4%、中国製磁器 3.1%、土師質土器 1.3%、瀬戸美濃陶器 1%、上野・高取焼 0.8%、備前焼 0.6%と（第 141 図）、半数近い比率で、これを主に受容される。

富田川床遺跡や二日市遺跡銭座跡以外は、良好な一括廃棄土坑が少ないため詳細は不明である。初期伊万里の出土状況を見てみると（第 146 図）、山陰・山陽地方に共通して、城下町跡や交通拠点となる遺跡では寛永 14 年（1637）の窯場統合以前の製品が出土し、量も多い。その一方で、それ以外の町屋や集落などの遺跡では、腰張筒型碗からみられる（第 146 図）。

その他には、備前焼に変化がある。17世紀初頭までは山陰・山陽地方では播鉢・甕などは多く出土した。しかし、富田川床遺跡の組成では、正保元年（1644）の水害遺構では肥前播鉢や甕も出現する。具体的な数値として示せないが、17世紀中期以降、因幡、伯耆、出雲、石見などの山陰地方では肥前陶器播鉢・甕の出土量は増える。この状況は、安芸、長門などの瀬戸内海沿いの遺跡でも同様な傾向がみられる。また、備前焼の生産地に近い備前、備中、備後では備前焼播鉢・甕が多い。

② 18世紀代

18世紀前期

17世紀後期を含む18世紀後期までの良好な一括資料がない。そのため陶磁器の分布状況から検討したいと思う。

肥前磁器の分布状況をみると（第146図）、18世紀初頭に出現する「くらわんか手」と呼ばれる量産品の碗・皿は、城下町跡や町屋跡限らず山岳の集落跡でも出土し、17世紀代より分布範囲が広がる。ただ、集落跡で出土するタイプは、18世紀初期に出現する初期タイプではなく、18世紀前期でも中期に近いタイプのものが出土しており、時期差がある。

産地別組成を見てみると肥前磁器はほぼ中国地方全域で出土例が認められる。それに対して、陶器は地域によって異なる。17世紀後期～18世紀代は備前、備中、備後を省く地方では量比は異なるものの肥前陶器の出土例が多い。ただ、長門では萩焼の窯場があり、本窯は16世紀末～17世紀初頭から操業し、さらに18世紀前期から須佐唐津焼や石見焼など中国在地陶器が日本海側地域で開窯され、それらの製品が地元を中心に流通し、肥前陶器と競合する。先に述べた米子城では18世紀代には肥前陶器より中国在地陶器が高い比率を示すなど、18世紀後期以降、次第にその量を増やす。

この他には、18世紀前期に丹波焼播鉢が瀬戸内海沿いの城下町跡で出土例があるが、それ以外の地域ではない。18世紀後期に至ると、丹波焼甕がごく僅かではあるが瀬戸内海はもちろんのこと日本海側の城下町跡でも出土例があり、播鉢と異なった分布圏を広げる。備前焼は、前代では瀬戸内海はもちろんのこと日本海側の遺跡でも播鉢・甕が各所で出土したが、18世紀代に入るとその分布範囲は激減する。日本海側では伝世品と考えるものや「伊部手」の徳利が僅かに出土する程度となる。生産地に近い備前、備中、備後や安芸、長門の瀬戸内海沿いに位置する城下町跡では備前焼の比率は依然として多い。

18世紀後期

津和野城下町祇園町遺跡は、江戸時代は石見で、現在は島根県鹿足郡津和野町に位置する（第 114 図－7）。本遺跡は近世津和野城下町の北端に位置し、元禄年間の絵図によると町屋が建ち並ぶ地域であることがわかっている。平成 10 年（1998）におこなった発掘調査では 6 時期の火災層を検出した。その中で、遺物が比較的まとまって出土したのが安永 2 年（1773）、享和元年（1801）に相当する火災層に伴う面に良好な一括廃棄土坑を検出した。

4－S2 は、安永 2 年（1773）の火災に伴う面より検出した一括廃棄土坑である。産地別組成をみると土師質土器 3.5%、瀬戸美濃陶器 0.4%、肥前陶器 2.5%、萩焼 1.6%、中国在地陶器 23%、肥前磁器 69%とあり、肥前磁器が半数を占める（第 147 図）。中国在地陶器は石見焼や須佐唐津焼に分類した。用途別組成は食膳具 46%、調理具 10%、貯蔵具 8%、調度具 36%である（第 148 図）。

土師質土器は皿である。皿はロクロ成形で灯火芯を残すものがある。他の遺構からは甕が出土し、これは佐野焼甕である。灯明皿は調度具組成をみると土師質土器 4%、中国在地産陶器 5%で、中国在地陶器がやや高い比率を示す（第 152 図）。肥前陶器は貯蔵具の甕・壺などである。甕は本遺構では肥前陶器甕と中国在地陶器甕と競合するが、同時期の遺構では中国在地陶器甕が高い比率を示す。中国在地陶器は、食膳具の碗・鉢、調理具の播鉢・片口、貯蔵具の壺・瓶類、調度具の灯火具・神仏具など豊富な器種組成である。特に播鉢はこれが独占する。肥前磁器は、産地別組成で一番高い比率を示す（第 147 図）。食膳具の碗・皿・鉢・小坏、調度具の神仏具・化粧具・瓶類など豊富な器種組成である。食膳具組成をみると、肥前陶器 1.5%、萩焼 3.5%、中国在地陶器 17%、肥前磁器 78%と一番高い比率を示し（第 149 図）、その中で肥前磁器碗 34%が一番高い。タイプは「くらわんか手」碗を中心とし、望料碗がみられる。品質は有田町で生産された高級品は少なく、大半は長崎県波佐見町周辺の窯で生産された量産品である。肥前磁器皿は法量から中皿が主に受容される。調度具は神仏具の香炉・仏花瓶、化粧具は紅皿が出土する。

③ 19 世紀代

18 世紀末～19 世紀前半以降、各所で出土例が増え、火災痕や閉鎖に伴う廃棄など実年代資料がいくつかある。

19 世紀前期

弓谷たたら遺跡は、江戸時代は出雲、現在は島根県飯石郡頓原町に所在する（第 114 図

- 8)。文献資料から寛政 12 年 (1800) から天保 10 年 (1839) まで操業し、文久元年 (1861) から明治元年 (1868) まで再操業したことがわかっている。また、天保 8 年 (1837) に火災に遭っており、これに関係する火災層を検出し、そこから大量の陶磁器が出土している。産地別組成は肥前陶器 11%、萩焼 0.3%、京焼系陶器 1.7%、中国在地陶器 17%、肥前磁器 70%と、肥前磁器が半数を占める (第 153 図)。この中国在地陶器は石見焼・布志名焼・須佐唐津焼の製品と考えられる。用途別組成は食膳具 80%、調理具 4%、貯蔵具 2%、調度具 14%にわかれる (第 154 図)。

肥前陶器は食膳具の碗・鉢を中心とする。食膳具組成をみると肥前陶器 13%、萩焼 0.5%、京焼系陶器 2%、中国在地陶器 9.5%、肥前磁器 78%と肥前磁器、中国在地陶器に次ぐ (第 155 図)。碗は陶胎染付碗が大半である。器形をみると 18 世紀代からの伝世品と考えられる。その他に刷毛目碗も僅かにある。萩焼は藁灰釉碗、京焼系陶器は色絵丸碗が僅かに出土する。中国在地陶器は、食膳具の碗・皿、調理具の播鉢・土瓶、貯蔵具の甕、調度具の灯火具・神仏具と豊富な器種組成で、生活用具全般に及んでいる。食膳具は肥前磁器と比率差があるが、それ以外の調理具、貯蔵具、調度具は中国在地陶器が高い比率を示す。調理具組成をみると中国在地陶器播鉢 55%、中国在地陶器土瓶 33%、肥前磁器水注 12%と中国在地陶器が大半を占める (第 156 図)。肥前磁器は、食膳具の碗・皿・鉢・小坏、調度具の神仏具・瓶類・蓋物などがある。先のとおり食膳具においては他産地とは大差がある。食膳具組成をみると碗が 44%と半数近い比率である (第 155 図)。また、肥前磁器に分類された中には、佐賀県有田町や長崎県波佐見町周辺で生産された肥前磁器とは異なる特徴をもつものがある。窯道具などの痕跡から肥前磁器と技術的系譜は同じであるが、おそらく在地産のものと考えられる。碗の器形は広東碗・端反碗・望料碗などの中碗が多い。皿は法量が口径 10cm 前後のものが中心で器形にバリエーションがない。

この他に、長門国府遺跡宮の内地区 D 地区遺構面 B 面 LK022 (下関市) は 18 世紀後期～19 世紀前期の年代観をもつ遺構である。数値には示せなかったが、陶磁器組成は肥前磁器を中心とし、肥前陶器、京焼系陶器、中国在地陶器が出土する。用途別組成では食膳具が高く、これに調理具、調度具、貯蔵具が続く。

肥前陶器は、調理具の播鉢、貯蔵具の甕などを中心に、食膳具の碗・鉢などが出土するが少ない。京焼系陶器は碗を中心とし、灰落としや火鉢などがあり、上絵付するものが多い。中国在地陶器の器種は肥前陶器と重なるものが多い。播鉢・甕を中心とし、食膳具、調度具などがあり、このうち調度具は灯火具・神仏具など多種にわたる。肥前磁器は食膳

具の碗を中心とし、皿・鉢などがこれに続く。また、碗・皿のタイプをみると、碗は高級品が少なく、長崎県波佐見町周辺で生産された量産品が目立つ。また、器形は広東碗・「くらわんか手」碗・望料碗など多種にわたる。その一方で、皿は蛇ノ目凹型高台皿（表1 ⑩）のみである。食膳具以外に瓶類・神仏具などの調度具も含まれる。

19 世紀後期

津和野城下町祇園町遺跡は先に述べたとおり、平成10年（1998）におこなった発掘調査では6時期の火災層が検出され、その中で、4-S1は嘉永6年（1853）に相当する火災層に伴う良好な一括廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器9%、中国在地陶器31%、肥前磁器60%と（第147図）、肥前磁器が半数を占める。この中国在地陶器は須佐唐津焼、石見焼などである。用途別組成は食膳具43%、調理具14%、貯蔵具13%、調度具30%にわかれる（第148図）。

土師質土器は皿と焜炉である。本遺構からは出土していないが甕がこの時期に出土する。中国在地陶器は調理具の播鉢・土瓶・鍋類、貯蔵具の甕、調度具の灯火具と前代と同様に豊富な器種組成である。本遺構では食膳具は出土していないが、同時期の遺構では碗・鉢などが出土する。調理具は中国在地陶器のみであり、播鉢・片口・土瓶・鍋類・徳利と豊富で、その中で土瓶が43%と半数近い比率を示す（第150図）。甕は貯蔵具組成をみると中国在地陶器のみだが（第151図）、同時代の遺構では肥前陶器甕も出土する。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の神仏具・化粧具・瓶類など豊富な器種で、前代より調度具の器種が増える（第152図）。

④ 小結

中国地方の出土状況を見てみた。先に上げた遺跡以外は江戸時代を通して状況を掴むことは難しかった。また、瀬戸内海沿いの広島城跡・四日市遺跡と日本海沿いの米子城跡とは、土器・陶磁器の組成が異なり、この組成は瀬戸内海沿いと日本海沿いの他遺跡でも同じであった。順にまとめると、以下の通りである。

16世紀末～17世紀前期は、産地別組成は土師質土器、備前焼、肥前陶器、中国製磁器を中心とする組成は日本海側、瀬戸内海側ともに共通する。異なる点としては、瀬戸内海側陶器が備前、備中、備後（以上岡山県）、安芸の瀬戸内海側では量産品が城下町跡以外でも僅かに出土するのに対して、石見、出雲、因幡などの日本海側では城下町跡や交通拠点に限られる。また、肥前陶器、上野・高取焼の播鉢・甕が山陰地方で備前焼と並んで出土し、

備前焼の産地に近い瀬戸内海側の岡山県でも僅かではあるが出土した。

17世紀中期～17世紀後期は肥前磁器が各地で出土し、産地別組成の中心となる。また、その出現時期に差異はあるが、それは瀬戸内海、日本海側という地域差異ではなく遺跡の性格によるもので、城下町跡や交通拠点となる遺跡では17世紀中期でも前期に近い時期に出土するが、その他の遺跡では17世紀中期からである。この肥前磁器に次いで高い比率をもつのが肥前陶器で、その組成は中国地方全体で共通する。異なる点としては備前焼の状況である。17世紀中期に至ると、岡山県以外で減少傾向が始まる。特に日本海側の遺跡では急速な変化があり、肥前陶器播鉢・甕が一気に比率を上げる。瀬戸内海沿いの長門、安芸では日本海側のような状況には至らないが、肥前陶器甕・播鉢が次第に比率を上げていく。このように、中国地方においては中世から歴然と続いた播鉢・甕の備前焼主体という状況に変化がみられる。

18世紀代は、各地で肥前磁器の分布が急速に増加し、出土量も一気に増え、産地別組成で中心となる。各地で広く出土するのが「くらわんか手」碗で、器形をみると18世紀初頭に出現する初期のものは城下町跡や交通拠点となる場所に限られるが、18世紀前期～中期に出現するものは広域に出土する。このことから遺跡の性格によって出現・浸透に時期差があった。

それ以外には、焼締陶器・陶器の出土状況に差異があった。焼締陶器は、備前焼が日本海沿いでは出土せず、その役割は完全に肥前陶器、中国在地陶器へ移行する。18世紀に備前焼が出土するのは瀬戸内海沿いに限られる。生産地に近い備前、備中、備後では17世紀代と組成に大きな変化はないが、それ以外の遺跡では播鉢・甕が高い比率を示すものの、灯火具や徳利へ主体が移行する。陶器は肥前陶器が中国地方全域で肥前磁器に次いで高い比率を示す。しかし、18世紀前期以降、石見焼、須佐唐津焼など中国在地陶器が日本海沿いを中心に分布し始め、18世紀後期に至ると、津和野城下町跡が示すように肥前磁器と近接する。瀬戸内海沿いの長門、安芸でも石見焼や須佐唐津焼などの中国在地陶器は18世紀後期に出土するが、肥前陶器を上回るほどではなく、日本海沿いの遺跡とは組成が異なる。

19世紀前期～幕末は、地域に限らず肥前磁器が産地別組成で高い比率を示すことは継続する。その一方で、焼締陶器・陶器は18世紀代以降に変化がみられる。日本海沿いの遺跡では焼締陶器自体がほとんど出土せず、陶器も肥前陶器は減少し、大半が中国在地陶器となる。また、その出土量も肥前磁器と拮抗する組成となる遺跡もあり、大量に中国在地陶器が流入する。瀬戸内海沿いの遺跡では、萩焼、中国在地陶器、北九州地方の製品が出

土するが、日本海沿いの遺跡のように肥前磁器と拮抗する組成には至らない。その反面、先にあげた製品や肥前陶器、瀬戸美濃陶器、京焼系陶器など各地の製品が出土する。さらに、磁器でも肥前磁器と分類する中には、西岡焼や砥部焼などの肥前磁器の技術的系譜を引く窯製品も含まれており、日本海沿いの遺跡とは組成が大きく異なる。

第5節 北部九州地方の出土状況（第159図）

九州地方の江戸時代は豊前、豊後、筑前、筑後、肥前、日向、肥後、大隈、薩摩に分かれる。その中で近世遺跡を中心とする遺跡は少ない。発掘調査の多くは肥前陶器や肥前磁器などの窯跡の調査が挙げられる。消費地遺跡では豊前の小倉城（北九州市）、肥前の長崎の調査が目立ち、それ以外のところでは、部分的もしくは一面調査など制限した調査が多く、江戸時代の土器・陶磁器の様相を掴むには限られた遺跡に頼るしかない。

その中で小倉城（豊前）、長崎（肥前）、西中野遺跡（肥前）など北部九州の遺跡で計測分析することができた。よって、今回は北部九州地方の状況について検討をおこなう。

1 小倉城・小倉城下町跡（第159図-1）

小倉城・小倉城下町跡（以後、小倉城と略す）は、江戸時代の国名は豊前、現在は福岡県北九州市に所在する。関ヶ原戦いで功績を得た細川忠興が慶長7年（1602）から7年の歳月をかけて毛利氏の小倉城を改築し、そこを居城とする。その後、寛永9年（1632）から譜代大名小笠原忠真の居城となり、以後、幕末まで継承する。

小倉城の発掘調査は、本丸及び城下町関連で進められ、現在のところ約60数次に及ぶ調査を行う。当然、多くの遺構・遺物を検出し、その中で良好な一括廃棄遺構も含む。但し、一ヶ所の調査区で重層的に遺物の変遷が分かるところはなく、よって、城下町全体でその組成を示す遺構を選別し、それを中心に検討する。また、今回は、資料的な制限があり出土遺物のすべてを計測分析できなかった。但し、未計測の資料は実見し、その特徴が計測したデータ結果と大差ないと考えられた資料を採用する。

① 17世紀代

16世紀末～17世紀前期

小倉城新馬場跡1号井戸は1620年代に廃絶した遺構である。産地別組成は（第160図）、土師質土器76.8%、瓦質土器1.2%、備前焼0.75%、丹波焼0.05%、瀬戸美濃陶器0.7%、

肥前陶器 1.3%、上野・高取焼 19%、中国製磁器 0.2%と、土師質土器が圧倒的に多い²²。用途別組成は食膳具 56%と多く、これに調度具 16%、調理具 15%、貯蔵具 12%が続く(第 161 図)。

土師質土器は皿・焼塩壺・火鉢があり、このうち皿が多い。皿はロクロ成形が大半で、手づくね成形は僅かである。瓦質土器の器種は調理具の播鉢、貯蔵具の甕、調度具の火鉢である。備前焼は食膳具の鉢、調理具の播鉢、貯蔵具の甕が出土する。甕は大甕で、地元の上野・高取焼で生産していないため、本産地を受容したと考えられる。

瀬戸美濃陶器の器種は食膳具の皿・鉢、調度具の香炉・瓶類がある。皿は窯道具痕が残る量産品のみだが、鉢は「桃山陶器」に分類される志野焼である。また、織部焼の脚付き香炉や灰釉の鉢など嗜好品と考えられるものも出土する。肥前陶器の器種は食膳具の碗・皿、調理具の播鉢がある。皿は砂目積みがなく。すべて胎土目積みである。品質は絵唐津など的高级品はなく、無文の量産品を中心とする。上野・高取焼は食膳具の皿・碗・鉢、貯蔵具の瓶類、調理具の播鉢・茶入れ、調度具の蓋物で豊富な器種組成である。特に、食膳具は特徴的で、碗は天目型が主体、鉢も懐石具を想定できるタイプのもので茶器、懐石具を中心とする。播鉢は調理具組成をみると上野・高取焼 68%と高い比率を示す(第 163 図)。中国製磁器は食膳具の碗・皿、調度具の瓶類が出土する。漳州窯系の皿も出土するが、中心は景德鎮窯の皿である。

17 世紀前期

肥前磁器を含まない時期の資料として、室町遺跡第 5 地点 287 号土坑がある。産地別組成は土師質土器 12%、瓦質土器 23%、備前焼 0.8%、瀬戸美濃陶器 1.4%、肥前陶器 20%、上野・高取焼 25%、中国製磁器 7%にわかれる(第 160 図)。用途別組成は食膳具 56%、調度具 18%、調理具 15%、貯蔵具 1%と続く(第 162 図)。

土師質土器は皿・焼塩壺が出土し、依然として産地別組成で高い比率を示す。皿はロクロ成形のみで灯火芯を残すものが多い。本遺構からは出土しないが焙烙はこの時期からみられる。器形、成形方法から在地産と考えられる。瓦質土器は調理具の播鉢、調度具の火鉢である。備前焼は播鉢が出土する。16 世紀末～17 世紀初頭では播鉢以外に甕・壺などが出土したが、同時期の遺構での状況をみると減少する。唯一出土する播鉢は、調理具組成では上野・高取焼 43%、瓦質土器 30%、備前焼 4%と(第 164 図)、備前焼播鉢は前代

²²土師質土器は陶磁器と比べ破損しやすく、破片数値をそのまま採用した場合、他の陶磁器が 10%未満になってしまうため、本遺構については接合した遺物については同一として算出した。

よりさらに比率を下げる。また、本遺構からは出土しないが、同時期の遺構からは丹波焼播鉢の出土例が僅かにみられる。

瀬戸美濃陶器は産地別組成で1.4%と比率が低い(第161図)。他の遺構をみても量産品はほとんどなく「桃山陶器」に分類される高級品が中心であり、本遺構でも織部焼灯火具が出土する。肥前陶器の器種は食膳具の碗・皿を中心とし、その組成を見てみると肥前陶器44%、上野・高取焼31%と高い比率を示す(第163図)。食膳具以外に同時期の遺構では播鉢・甕があり、甕は上野・高取焼より高い比率を示す。上野・高取焼は、他の産地と比べると豊富な器種組成で、各用途別組成でも高い比率を示すことから、16世紀末～17世紀初頭と同様に地元産が根強く流入することがわかる。中国製磁器は青花皿・鉢があり、本遺構では景德鎮窯が多いが、漳州窯系の青花も他の遺構から出土する。

17 世紀中期

本時期の遺構として小倉城御蔵跡10号がある。肥前磁器を含む遺構である。肥前磁器の特徴から1630年～1640年代の年代観をもつ遺構と考えられる。産地別組成は土師質土器21%、肥前陶器17%、上野・高取焼1%、中国製磁器6%、肥前磁器55%と(第160図)、肥前磁器が半数以上を占める。用途別組成は食膳具73%と半数以上あり、これに調度具20%、調理具7%が続く(第161図)。

土師質土器は依然として高い比率を示す。主な器種は皿である。皿は灯火芯を残すものもあるが多くは食膳具に属する。また、同時期の遺構では焙烙が出土する。焙烙は外面にタタキ調整を残すものが中心で、在地産と考えられる。瓦質土器は火鉢・香炉などで、在地産の製品と思われる。

肥前陶器は食膳具の碗・皿、調理具の播鉢などである。同時期の遺構からは甕が出土し高い比率を示す。本遺構では肥前陶器の食膳具が高い比率を示すが、遺構によって上野・高取焼の食膳具が多い場合もある。この他に播鉢が出土するが、同時期の遺構からは食膳具、貯蔵具、調度具など豊富な器種組成がみられる。肥前磁器は食膳具を中心とする。器種は碗が45%と半数近い比率を示し、それに皿22%、小坏2%出土し(第162図)、本時期には食膳具の主体となる。

② 18 世紀代

17 世紀後期～18 世紀前期

本時期の資料としては京町遺跡I区2号瓦溜があり、享保10年(1725)の火災に伴う

廃棄土坑である。産地組成を見てみると土師質土器 11%、瓦質土器 1%、備前焼 5%、肥前陶器 1.9%、上野・高取焼 17%、京焼系陶器 5%、中国製磁器 2.9%、肥前磁器 56.2%にわかれる（第 160 図）。用途別組成は依然として食膳具が 48%と高く、これに、調度具 25%、貯蔵具 19%、調理具 8%と続く（第 161 図）。

土師質土器の主な器種は皿・焼塩壺である。皿は食膳具組成をみると 14%と大きな変化はない（第 162 図）。瓦質土器は播鉢が激減するが、火鉢は一定量保持する。備前焼は播鉢が出土する。17 世紀代と大きな変化はないが、調理具組成をみると上野・高取焼播鉢 20%と高い比率を示すなかで、8%と僅かではあるが出土する（第 163 図）。この他、堺・明石焼もこの時期から出現する。他の産地に比べると少ないが、地元産を中心とするなかで近畿から持ち込まれた意味は大きいと考えられる。

肥前陶器は、土師質土器、肥前磁器の破片数の関係で比率は低いが、個体数で見た場合、20%あり、前代と大きな変化はない。食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢が出土し、同時期の遺構では貯蔵具の甕、調度具の香炉や線香立と豊富な器種が出土する。ただ、甕以外の器種は上野・高取焼を上回るものはない。また、寺院跡で内野山窯の皿が大量に出土する例があり、受容によってその組成は大きく異なる。京焼系陶器は食膳具の碗、調度具の火入れが出土する。量はすべて合わせても 5%と他の産地より低く（第 165 図）、装飾をみても色絵製品に偏っており、上野・高取焼で生産しないものを受容したと考えられる。

上野・高取焼は、食膳具の皿・鉢、調理具の播鉢・徳利、貯蔵具の甕、調度具の仏花瓶、香炉など豊富な器種が出土する。前代で高い比率を示した播鉢は、調理具組成をみると上野・高取焼 20%、備前焼 8%と（第 163 図）、依然として高い比率を示す。貯蔵具の甕は、上野・高取焼 36%、土師質土器 17%、瓦質土器 4%とこれも出土量が多い（第 164 図）。

肥前磁器は碗・皿などの食膳具が大半を占め、その組成をみると肥前磁器碗 22%・皿 54%と多い（第 163 図）。碗の品質は量産品の「くらわんか手」が 7 に対して有田町で生産された高級品 3 である。その一方、皿は中・高級品 6 に対して量産品 4 と碗と皿では様相が異なる。食膳具以外は、油壺・香炉・瓶類(花瓶)などの調度具が僅かであるが比率を上げる。

18 世紀前期～18 世紀中期

本時期の資料として、大手町遺跡 5 地点 6 号土坑がある。肥前磁器や肥前陶器の組成から報告では 17 世紀後期～18 世紀前期としているが、18 世紀前期～中期の年代観を示すと考えられる。産地別組成を見てみると土師質土器 23%、瓦質土器 0.9%、肥前陶器 37%、

上野・高取焼 2%、京焼系陶器 0.1%、肥前磁器 37%にわかれる（第 160 図）。用途別組成は食膳具 52%と半数以上を占め、他に調理具 18%、貯蔵具 22%、調度具 8%がある（第 161 図）。

土師質土器、瓦質土器は破損しやすいため破片数が多いが、個体数で見ると前代より比率は下がる。土師質土器は皿・焙烙・焼塩壺・十能などが出土する。皿は灯火芯を残すものが多く、引き続き灯火具として主に使用したと考えられる。調度具組成を見てみると 42%と依然として高い比率を示す（第 165 図）。焙烙の器形は難波分類の D 類に類似する在地産が中心である。瓦質土器は前代に引き続き火鉢が多い。

上野・高取焼は前代の組成と大差ない。食膳具の碗・皿が出土し、同時期の遺構からは貯蔵具の甕、調理具の播鉢などがあり、引き続き豊富な器種組成である。肥前陶器は 20%と一定量出土する（第 160 図）。本遺構では食膳具の比率が 31%と高く、同じ施釉陶器である上野・高取焼 5%より高い（第 162 図）。同時期の遺構では本産地が高い場合もあるが、傾向としては肥前陶器がやや優勢である。肥前陶器の主な器種は甕であり、貯蔵具組成で 100%と示す（第 164 図）。

肥前磁器は依然として産地別組成で比率が高い。器種は食膳具の碗・皿を中心とし、他に調度具がある。品質は「くらわんか手」と呼ばれる量産品が 80%近い比率を示す。

③ 19 世紀代

19 世紀代の資料として、堅町遺跡第 1 地点 33 号土坑がある。堅町遺跡は絵図から町屋が建ち並んでいた地域にあたる。陶磁器の年代観から 19 世紀前期～幕末期の遺構と考えられる。産地別組成は土師質土器 28%、瓦質土器 2%、肥前陶器 9%、上野・高取焼 19%、萩焼 2%、京焼系陶器 5%、肥前磁器 35%にわかれる（第 160 図）。用途別組成は調度具 48%、食膳具 25%、調理具 18%、貯蔵具 5%と続く（第 161 図）。

土師質土器は皿・焙烙・甕があり、貯蔵具の甕は用途別組成で高い比率を示す（第 161 図）。焙烙は前代では高い比率を示したが、19 世紀代に入るとやや減少する。本遺構からは出土しないが、施釉陶器の煮沸具がこの頃から増加し始めるためである。瓦質土器は火鉢である。調度具組成をみると比率を下げるが（第 165 図）、他の器種が増加するためであり、値は下がるが実質は前代と大きな変化はないと考えられる。

上野・高取焼は、食膳具は碗・鉢、調理具は播鉢、調度具の神仏具・瓶類など豊富な器種が出土する。食膳具組成を見てみると肥前磁器 57%土師質土器 15%、肥前陶器 10%、

京焼系陶器 9%、萩焼 5%、上野・高取焼 4%と（第 162 図）、依然として肥前磁器が高く、上野・高取焼は低い。主体となるのは播鉢で、調理具組成をみると上野・高取焼のみで（第 163 図）、同時期の遺構からは堺・明石焼が出土するが、あくまで本産地が主体である。この他に神仏具・瓶類、他の遺構では植木鉢があり、新たな器種が出現する。京焼系陶器は食膳具の丸碗が出土する。同時期の遺構では調理具の土瓶・鍋類などがある。土瓶・鍋類の中には京焼系陶器以外の製品を含む。特に、煮沸具の鍋類は上野・高取焼で生産しておらず、福岡県小石原中野窯の製品の可能性が高いが断定はできない。

肥前磁器の器種は食膳具の碗・皿・鉢を中心とし、調度具の化粧具・文具がある。食膳具組成は先のとおり 57%と依然として高い比率を示す（第 162 図）。調度具は化粧具の白磁紅皿、水滴・水注などの文具も 18 世紀代と比べると比率を上げる。ただ、肥前磁器と分類した中には、この時期に小倉城近郊で開窯した磁器窯の製品もあると考えられる。

④ 小結

小倉城の土器・陶磁器は、江戸時代を通して地元の上野・高取焼が高い比率を示し、これに肥前磁器が上位もしくは拮抗する組成である。それに加えて、在地産の土師質土器、瓦質土器は常に 20～30%代をキープし一定量保持する。用途別組成は食膳具が常に高い比率を示し、調度具も土師質土器皿の影響により 20%前後を維持する。

17 世紀代は、17 世紀初頭は土師質土器（在地産）を中心とし、これに上野・高取焼が続くなど、地元産を主体とする組成である。食膳具は土師質土器に、瀬戸美濃陶器、肥前陶器、上野・高取焼が出土し、これら施釉陶器は日用器というよりは茶器や懐石具を想定するものが目立った。調理具は播鉢・焙烙がみられ、このうち播鉢は上野・高取焼が大半を占め、これに備前焼、肥前陶器が僅かに出土する。

17 世紀中期は肥前磁器が一気に増え、施釉陶器・磁器は肥前陶器、上野・高取焼、肥前磁器を中心とする組成に変化する。肥前磁器は食膳具を主とし、この時期、上野・高取焼を抜いて食膳具の主体となる。また、前代までみられた中国製磁器や瀬戸美濃陶器などはほとんど出土しなくなる。肥前陶器は食膳具、貯蔵具を中心とし、上野・高取焼は前代より器種が増加し、食膳具、調理具、貯蔵具、調度具と豊富な器種組成で、食膳具と甕以外は高い比率を示す。

18・19 世紀代も 17 世紀中期の組成を大筋で継承するが、17 世紀後期～18 世紀前期に京焼系陶器、中国在地陶器、堺・明石焼がごく少量ではあるが出土する。

19 世紀代に入ると、土器・陶磁器組成に変化がみられる。上野・高取焼はさらに器種が豊富となる。また、土瓶・土鍋などの調理具、施釉陶器の灯火具、神仏具などの調度具が増加し、調度具全体の比率が上がる。このように、江戸時代を通して上野・高取焼が多く出土するが、決して独占的にはならず、他の産地が常に出土する。

2 長崎（第 159 図 - 6）

長崎は元亀元年（1570）の開港以来、長崎港を中心として発展する。町は、国際貿易の唯一の窓口であった出島から北へ延びる現在の国道 34 号線沿いに町屋を形成し、町の発展とともに、町場化が東西に広がる。長崎の近世遺跡としては、出島及びそれに近接する万才町、興善町などの近世町屋跡がある。これら遺跡からは、貿易都市を象徴するように貿易商品や外国の生活用具など国際色豊かな遺物が出土し、それがこの遺跡の特徴ともいえる。

計測分析は、本来なら他遺跡と同様に、良好な一括資料を検討し、遺跡の変遷を踏まえ、遺物分類しなければならない。しかし、資料的な制限があり土師質土器をはじめ他の陶磁器もすべてを計測分析することはできず、築町遺跡・万才町遺跡で一部の資料でおこなった。ただ、このような状況でありながら取り上げたのは、未計測資料を実見し、計測データ結果と大差ないと考えたためである。以下に述べる資料は、築町遺跡・万才町遺跡の分析結果で、古い時期順に変遷を述べる。

① 17 世紀代

16 世紀後期～17 世紀前期

築町遺跡 2 区 12 号土坑は肥前磁器を含まない遺構である。産地別組成は瀬戸美濃陶器 1%、肥前陶器 3.5%、上野・高取焼 1%、中国製陶器 4.5%、東南アジア陶器 14%、中国製磁器 76%で、中国製磁器を中心に肥前陶器と東南アジア陶器が続く組成である（第 166 図）。用途別組成は食膳具 80%が高い比率で、調理具 15%、調度具 4%、貯蔵具 1%と続く（第 167 図）。

瀬戸美濃陶器は、「桃山陶器」に分類される志野焼、織部焼の懐石具や茶器が出土し、量産品はない。肥前陶器は中国製磁器に次いで高い比率である。器種は碗・皿などの食膳具が大半で、皿は絵唐津が多く、器形も豊富である。他に調理具の播鉢、調度具の瓶類がある。このうち播鉢は調理具組成では本産地のみである（第 169 図）。東南アジア陶器は

貯蔵具の甕・壺である。産地はベトナム、タイで、器形からいくつかのタイプに分類でき、用途は菓種容器として流入したものと考えられる。

中国製磁器は産地別組成でもっとも比率が高い（第 166 図）。景德鎮窯が多く、他に福建・広東周辺の製品もある。器種は食膳具の碗・皿が多く、この他に小坏や調度具の合子なども一定量出土する。

これら以外に同時期の遺構からは備前焼、丹波焼も出土し、備前焼は大平鉢・播鉢・甕、丹波焼は播鉢が僅かにある。

17 世紀中期

築町 1・3 区焼土 1 層は寛永 10 年（1633）に長崎の町全体を消失した火災資料である。産地別組成は土師質土器 0.5%、肥前陶器 10%、中国製陶器 3.5%、中国製磁器 51.2%、肥前磁器 39%にわかれる（第 166 図）。中国製磁器は前代と変化ないが、国産陶器の中心であった肥前陶器は減り、これに変わるのが肥前磁器で出現と同時に急増する。用途別組成は食膳具 40%を中心とし、調度具 41%、調理具 17%、貯蔵具 2%と続く（第 167 図）。

肥前陶器は肥前磁器に次ぐ比率を示す。主な器種は食膳具の碗・鉢、調理具の汁つぎ、調度具の瓶類である。食膳具、調度具については、中国製磁器、肥前磁器が高い比率であるため、補足する程度である。東南アジア陶器は前代と変化なく甕・壺・瓶類・ケンディーなどの貯蔵具・調理具が中心である。

中国製磁器は肥前磁器が出現・増加するなかでも依然として高い比率を示す。景德鎮窯の製品が多く、器種は鉢・皿・小坏などの食膳具を中心とし、香炉や蓋物などの調度具も一定量出土する。この他には、福建・広東産の鉢・皿も出土し、徳化窯の製品も僅かに含む。肥前磁器は、先にも述べたが肥前陶器に変わり国産陶磁器の主体となる。器種は食膳具の碗・皿・鉢を中心に、調度具の花瓶や香炉など豊富な器種がみられる。この他に中国製陶器の水注があり、宜興窯の製品と考えられる。また、前代では備前焼、丹波焼、瀬戸美濃陶器が出土したが、この時期にはみられない。

17 世紀後期

17 世紀後期に至ると貿易陶磁器が減少する。これは正保元年（1644）中国の清朝の王朝交替に伴う内乱により中国磁器の輸出が減少したためと考えられる。資料として、出島和蘭商館跡 1 号土坑がある。計測分析資料ではないが産地別組成は肥前磁器が主体で、これに肥前陶器、上野・高取焼、中国製磁器、東南アジア陶器、ベトナム磁器と続く。用途別組成は食膳具を中心とし、調度具、貯蔵具、調理具がある。

肥前陶器は、調理具の播鉢を中心とし、食膳具の鉢、調理具の瓶類、貯蔵具の甕、調度具の香炉などが出土する。多くの器種は肥前磁器より比率は低い、甕は貯蔵具組成では本産地のみで、播鉢についても調理具組成でほぼ独占する。上野・高取焼は食膳具の碗・鉢、調理具の播鉢、貯蔵具の瓶類、調度具の香炉など肥前陶器とよく似た器種組成である。

中国製磁器は一気に減少する。器種は皿を中心とし、碗・鉢などがある。景德鎮窯を中心とするが、福建・広東産の製品も僅かに含まれる。東南アジア陶器は甕・瓶類と前代と変わらないが、比率は一気に下がる。ベトナム磁器は食膳具の碗が僅かに出土し、他の貿易陶磁器が変わる中で大きな変化はない。肥前磁器は産地別組成で中心となる。主な器種は前代に引き続き食膳具で、本時期には中国製磁器から肥前磁器に主体が移行する。碗・皿・鉢などは文様や器形にバリエーションがみられる。また、量産品は少なく高級品が多い。その他には調度具があり、蓋物・瓶類・香炉など豊富な器種組成である。

② 18 世紀代

17 世紀後期～18 世紀前期

本時期の資料として出島和蘭商館跡 2 号土坑がある。計測分析資料ではないがその組成は、産地別組成は貿易陶磁器がさらに減り、国産陶磁器が主体となる。前代に引き続き肥前磁器が多く、これに肥前陶器が続き、上野・高取焼、中国製磁器、ベトナム磁器、京焼系陶器と続く。用途別組成は食膳具が半数以上を占め、これに調度具、調理具、貯蔵具と続く。

肥前陶器は肥前磁器に次いで多い。器種は食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢、貯蔵具の甕・瓶類、調度具の神仏具など豊富な組成である。食膳具は肥前磁器が大半を占めるなかでこれに次いで多く出土する。また、この時期から長崎県現川焼窯の食膳具を含む。この他に播鉢と甕については、各用途別組成をみると前代に引き続いて独占する。上野・高取焼は、甕は出土しないが、それ以外は肥前陶器と器種組成が共通する。但し、各器種の組成をみると肥前陶器を上回るものではなく、あくまで肥前陶器を補う程度である。京焼系陶器は本時期から出現する。出土量は他の産地と比べるとごく僅かである。主な器種は丸碗・火入れなどで、色絵を施すものである。

中国製磁器は前代より減少し、器種は皿・碗が出土する。ベトナム磁器は前代と大差ない。鉢が中心で、スタンプ印で文様を施す製品が目立つ。他の遺構からは東南アジア焼締陶器が出土するが、17 世紀代の伝世品である。肥前磁器は、食膳具の碗・皿・鉢、調度具

の化粧具・神仏具などが出土する。品質は有田町で生産された高級品 8 に対して、長崎県波佐見周辺の諸窯で生産された量産品 2 と、高級品が多い。

18 世紀後期

本時期の良好な遺構はなく各地点の状況をみると、産地別組成は肥前磁器を中心とし、肥前陶器、上野・高取焼、京焼系陶器、中国製磁器がある。用途別組成は食膳具が多く、調度具、調理具、貯蔵具と続き、前代と大差ない。

肥前陶器は前代に引き続き、調理具の播鉢、貯蔵具の甕を中心とし、食膳具の鉢、貯蔵具の瓶類、調度具の灯火具なども僅かにあり、本時期から土瓶が一定量出土する。上野・高取焼は、甕以外は肥前陶器と器種組成が共通し、その量比も前代と変化ない。

中国製磁器は皿・鉢がある。清朝磁器も含むが伝世品も多くある。京焼系陶器は色絵製品を中心に出土する。肥前磁器は前代に引き続き豊富な器種組成である。碗・皿などの食膳具を中心に、神仏具・化粧具・文具などの調度具が出土する。品質は有田町で生産された高級品が多く出土するが、長崎県波佐見町周辺の諸窯で生産された量産品も前代より増える。

③ 19 世紀代

万才町遺跡土坑 1 は 19 世紀中期の一括廃棄土坑である。産地別組成は土師質土器 1 %、肥前陶器 2 %、京焼系陶器 7 %、中国製磁器 1 %、ヨーロッパ磁器 16 %、肥前磁器 73 % にわかれる (第 166 図)。用途別組成は食膳具 62 % が多く、これに調度具 23 %、調理具 15 % と続く (第 167 図)。

肥前陶器は前代より比率を下げ、調理具の土瓶 16 % のみである。しかし、同時期の遺構からは食膳具、貯蔵具が出土し、甕については依然として高い比率を示し、一定量は保持すると考えられる。京焼系陶器は本時期から急増する。本遺構では土瓶が 58 % と高い比率を示すが、同時期の遺構からは食膳具の碗、調度具の火入れが出土する。

中国製磁器は、肥前磁器と比べると比率は低いが生膳具の碗・皿・散蓮華が出土する。多くは清朝磁器だが、16 世紀末～17 世紀前半の明末清初の製品も含む。肥前磁器は食膳具を中心に出土する。その組成をみると肥前磁器 77 %、ヨーロッパ磁器 22 %、中国製磁器 1 % と (第 168 図)、依然として高い比率である。また、蓋物、壺 (花瓶?) などの調度具も一定量含む。ヨーロッパ磁器は皿が出土し、手描き製品もあるが、多くは銅版転写製品である。これは 18 世紀末から出土するが、多くなるのは 19 世紀に入ってからである。

産地はイギリス、オランダ産に分けられるが幕末に近づくほどオランダ産が多くなる。この他に、ドイツ炆器塩釉壺がある。

④ 小結

長崎の資料は土師質土器を省く、限られた陶磁器のみの分析結果だが、江戸時代の貿易都市を感じさせる組成である。

17 世紀代は前期～中期までは、貿易陶磁器が全体の 70%を占め、国産の陶磁器は僅かである。貿易陶磁器の中心は中国製磁器で、景德鎮窯の食膳具の皿を中心とし、蓋物や合子などの調度具も目立つ。磁器はこの他に、福建・広東産の製品やベトナム磁器もあるが景德鎮窯と比べると比率は低い。貿易陶磁器は他に東南アジア陶器がある。タイ産、ベトナム産などの貯蔵具が主体である。

国産の陶磁器は、17 世紀初頭は肥前陶器、17 世紀前期からは肥前磁器が多く、国産陶磁器は少ないながらも地元産が中心である。また、志野焼や織部焼など「桃山陶器」に分類される懐石具や茶器、備前焼鉢・播鉢、丹波焼播鉢など中国・近畿・東海地方の陶器なども僅かに出土する。しかし、これら産地については、この後は 19 世紀代まで出土例は途絶える。

17 世紀後期に至ると、貿易陶磁器の出土量が一気に減る。正保元年（1644）中国の清朝の王朝交替に伴う内乱により中国磁器の輸出が減少したためと考えられる。出土する貿易陶磁器の器種組成は変化なく、中国製磁器の食膳具を中心とし、東南アジア陶器の貯蔵具などである。この他に、肥前陶器、上野・高取焼などがあり、これらは播鉢・甕類では高い比率を示すが、皿・鉢などの食膳具、調度具は肥前磁器より比率は低い。

18 世紀代に至ると、貿易陶磁器はさらに減り、それに反して肥前磁器、肥前陶器などの国産陶磁器は比率を上げる。

肥前磁器は食膳具を中心とするが、調度具も多く、神仏具・化粧具・文具と豊富な器種組成である。また、品質は 80%が高級品だが「くらわんか手」と呼ばれる量産品も含む。肥前陶器は前代と大きな変化なく、調理具の播鉢、貯蔵具の甕は独占で、それ以外は肥前磁器を補足するような組成である。さらに、肥前陶器の中には現川焼も出土し始める。この肥前磁器、肥前陶器の組成は 18 世紀以降大きな変化はない。この他に、京焼系陶器が 17 世紀後期から出現する。器種は色絵碗、色絵火入れなどで、すべて色絵製品であることが特徴である。比率は 5%未満と僅かであるが、18 世紀以降、この組成が続く。

貿易陶磁器は先に述べたとおり、18世紀に入るとさらに激減する。主な産地は中国製磁器、ベトナム磁器、東南アジア陶器である。中国製磁器は食膳具が多く、調度具は僅かに出土する。17世紀代と比べると出土量は激減するが、他の貿易陶磁器と異なり、少ないながらも18世紀以降も出土し続ける。ベトナム磁器は印判手の製品が出土し、18世紀初頭までは一定量出土するが、それ以降はほとんど見られない。東南アジア陶器は17世紀代と同様に甕・壺などの貯蔵具を中心とするが伝世品が多く、その比率も10%以下まで減少し、18世紀後期以降はほとんどみられない。

19世紀代は、18世紀代と大差なく肥前磁器を中心とするが、貿易陶磁器も一定量出土する。貿易陶磁器は中国製磁器が主体だが、この時期からヨーロッパ磁器が現れ、次第に増加するが、肥前磁器や中国製磁器の比率を上回る組成にはならない。

以上のように、長崎の資料は貿易陶磁器、肥前磁器などの高級品が中心である。これは長崎という貿易都市の意味合いが大きいと考えられる。ただ、実質は在地土器や在地陶磁器がそれ以外に出土することはわかっており、それが18世紀以降、高級磁器より比率を上げること確認している。しかし、このような貿易陶磁器が出土する例は西日本ではないのも確かであり、今回の分析データは貿易都市を示すと考えられる。

3 佐賀（第159図）

江戸時代の肥前国の範囲は、現在の佐賀・長崎（対馬・五島を省く）両県を含む。長崎の状況は先に述べたが、ここでは佐賀県の状況を検討する。

佐賀県の近世遺跡は、先にも述べたが肥前陶器、肥前磁器などの窯跡の調査が中心であり、消費地の調査は佐賀城跡及びその周辺集落で主に行われているが、限られた調査条件のためか、遺跡の変遷やその特徴がわかっていない。

そこで時期別に遺構を選別し、その様相を検討する。17・18世紀代は計測分析できなかったが、19世紀代の資料は分析できたため、その結果も含めて検討する。

① 17世紀代

本時期の組成を示す遺跡は少ない。佐賀市の寺小路遺跡は佐賀城の南東部に位置する中世から近世の集落跡である（第159図-4）。そのうち2区SK2006は16世紀末～17世紀前期の廃棄土坑で、そこからは土師質土器、瓦質土器、肥前陶器などが出土する。用途別組成は食膳具と調理具を中心とし、貯蔵具、調度具が続く。

土師質土器の主な器種は皿である。灯火芯を残すものが多く、灯火具として主に受容する。瓦質土器は鍋と火鉢が出土し、このうち鍋の器形は浅鉢形を呈するもので中世から継承されるもので、焙烙は出土していない。肥前陶器は皿を中心とし、碗が僅かに出土する。食膳具以外に片口・播鉢・甕・瓶類などが同時期の遺構から僅かであるが出土する。

これら以外に瀬戸美濃陶器鉢、備前焼播鉢などの東海、中国地方の製品も含まれる。瀬戸美濃陶器は「桃山陶器」に分類される織部焼の懐石具である。本産地は他の遺構でも量産品の出土例はなく、他に懐石具と思われる志野焼鉢が出土することから、主に高級品を受容したと考えられる。備前焼播鉢は、中世から佐賀県の遺跡で多く出土するが、肥前陶器播鉢が生産し始める17世紀には減少する。

② 18世紀代

寺小路遺跡 SD2002 は18世紀前期～後期の溝跡である。産地別組成は肥前陶器を中心とし、これに肥前磁器、土師質土器が続く。用途別組成は食膳具と調理具を主体に貯蔵具、調度具が続く。

産地別組成で多く出土するのは肥前陶器で、食膳具、調理具、調度具、貯蔵具と豊富な器種である。器種別の状況は、食膳具は碗・皿・鉢が出土し、碗・皿については肥前磁器の方が高い比率である。調理具の主な器種は播鉢・片口・土瓶・鍋類で、このうち播鉢が一番多い。貯蔵具は甕で壺は出土しない。調度具は香炉・瓶類がみられ、香炉の装飾は陶胎染付、刷毛目など多種にわかれる。瓶類は仏花瓶と想定できるタイプのものが多く、このことから肥前陶器の調度具は神仏具が中心であった。肥前磁器は食膳具が中心である。碗の器形は「くらわんか手」碗が目立つが、半球碗や腰張碗などの小型碗も一定量出土する。皿はU字高台器厚皿が中心であるが、口径20cm近いU字高台皿も僅かに出土する。この他に調度具の蓋物、瓶類も僅かにみられる。土師質土器の主な器種は皿で、口縁部に灯火芯を残すものが多く、主に灯火具として受容する。他に、調度具の火鉢があるが少ない。これら以外に瓦質土器、京焼系陶器が出土し、瓦質土器は調理具の鍋・鉢で、在地産と考えられる。京焼系陶器の器種は碗である。出土量は数値には示せないがごく僅かである。外面に色絵を施したもので、碗以外の出土例は他の遺跡でもない。

③ 19世紀代

本時期の資料として佐賀城跡、西中野遺跡（第159図-5）がある。この中で西中野遺

跡では 19 世紀代に属するいくつかの遺構を計測分析することができた。その資料を中心に述べる。

19 世紀前期～中期

SK3002 は廃棄土坑である。産地別組成を見てみると土師質土器 22%、瓦質土器 20%、肥前陶器 18%、京焼系陶器 3%、肥前磁器 37%にわかれ（第 172 図）、18 世紀代の寺小路遺跡と大差がみられない。用途別組成は食膳具 38%、調理具 16%、貯蔵具 2%、調度 44 具%と食膳具・調度具の比率が高い（第 173 図）。

土師質土器の器種は皿・焙烙・焜炉類・ミニチュア土製品が出土する。これらは胎土の色調、成形から在地産と考えられる。皿は灯火芯を残すものが多く、主に灯火具として受容する。また、調度具組成をみると灯火具は本産地のみで（第 177 図）、これが主産地と思われる。焙烙は調理具組成を見てみると土師質土器焙烙 16%、肥前陶器播鉢 28%、肥前陶器行平 27%、肥前陶器土瓶 24%と一定量出土する（第 175 図）。本器種は 18 世紀代では出土量が僅かであったため、この時期から増加することがわかる。肥前陶器は、食膳具の碗・皿・鉢、調理具の播鉢・土瓶・土鍋・徳利、貯蔵具の甕、調度具など豊富な器種が出土する。このうち調理具は 51%が肥前陶器の煮沸具でこれらを主に受容する（第 175 図）。徳利の大きさは器高 20cm の 1 升瓶タイプが多い。

肥前磁器は食膳具を中心に出土する。その組成をみると肥前磁器 78%、京焼系陶器 10%、土師質土器 8%、肥前陶器 8%と他の産地と大差がみられる（第 174 図）。碗の器形は端反碗、「くらわんか手」などの中碗が多く、蓋を伴うものは少ない。また、寺小路遺跡では小碗が出土していたが SK3002 からは小丸碗が出土するが中碗に比べると少ない。この他に肥前磁器の猪口、小坏が僅かに出土する。同時期の SK3002 では寺小路遺跡の 18 世紀代の遺構ではなかった化粧具が僅かであるが出土しており、新たな器種が増える。品質は、同時期の SD3008 からは鍋島焼皿が出土する例もあるが、大半は量産品である。

また、肥前陶器・肥前磁器については、製品の特徴から陶器は武雄や嬉野、磁器は有田の製品と共通するが、釉調や文様の特徴などから佐賀県以外で生産された同じ技術的系譜を引く製品の可能性が高いと考えられる。

19 世紀前期～後期

SD3007 は溝跡である。産地別組成では土師質土器 12%、瓦質土器 9%、軟質施釉陶器 1.5%、肥前陶器 39%、京焼系陶器 2%、中国製磁器 0.5%、肥前磁器 36%にわかれ（第 172 図）、肥前陶器が肥前磁器を上回る。これは SK3002 と比べて土瓶・鍋類などの煮沸

具の比率が上がることと、器高 20cm 以上の徳利の急増によるためである。用途別組成は食膳具 44%、調理具 28%、貯蔵具 1%、調度具 27%にわかれる（第 174 図）。

土師質土器の器種は皿・焙烙・火鉢・焜炉類・ミニチュア土製品があり、調度具を中心とする。その組成を見てみると土師質土器灯火具 10%、土師質土器焜炉類 10%、ミニチュア土製品 10.2%、土師質土器火鉢 6%と、本産地で 40%近くを占め（第 177 図）、調度具の主体である。焙烙は調理具組成で 12%と前代より比率を下げる（第 175 図）。これは施釉陶器の煮沸具が増加するためである。瓦質土器は火鉢・焜炉などの調度具のみ出土する。肥前陶器は前代に引き続いて豊富な器種が出土する。食膳組成をみると、肥前磁器 78%、肥前陶器 14%、京焼系陶器 6%、土師質土器 3%、中国製磁器 0.5%と肥前磁器に続くが大差がある（第 174 図）。器種は碗・皿・鉢類があり、特に鉢類は口径が 25cm 以上を呈す大鉢が増加する。調理具は播鉢・土瓶・鍋類などで、調理具組成では肥前陶器土鍋 37%、肥前陶器土瓶 28%、肥前陶器播鉢 20%、土師質土器焙烙 12%、軟質施釉陶器土瓶 3%と（第 175 図）、煮沸具が本時期から急増する。また、播鉢についても地元産のみである。貯蔵具は甕で、これも陶器は肥前陶器に限られる。京焼系陶器は色絵丸碗・平碗が僅かに出土する。

肥前磁器は食膳具、調度具がみられる。このうち食膳具は肥前磁器が 65%と大半を占める（第 174 図）。器種は碗・皿が多く、器形にバリエーションがみられる。調度具は前代に比べると比率を上げる。神仏具 5%や化粧具 7%などが新たに出現し増える。品質は「くわんか手」などの量産品が多く、有田町で生産された高級品は僅かである。

④ 小結

佐賀県の資料をみたが、今回取り上げた資料以外の資料も含めてまとめる。

17 世紀代は、17 世紀前期までは在地土器及び肥前陶器を中心という組成で、これに瀬戸美濃陶器の食膳具や備前焼播鉢などの東海、中国地方の製品が若干含まれる。集落跡では中世の土器が出土する一方で、佐賀城跡では上記の産地以外に中国製青花がみられ、集落跡とは異なる組成を示す。

17 世紀中期から後期は組成がわかる資料は乏しいが、佐賀城跡をみると食膳具は肥前磁器、貯蔵具や調理具は肥前陶器が中心になり、17 世紀前期にみられた瀬戸美濃陶器の食膳具や備前焼の播鉢は減少する。

18 世紀代は、産地は肥前陶器を中心とし、肥前磁器、土師質土器がこれに続く。用途別

組成では食膳具、調理具、貯蔵具が続き、調度具はごく僅かである。

土師質土器の器種は皿・火鉢があり、皿は各地で高い比率を示す。皿は灯火芯を残すものが多いため主に灯火具として使用したと考えられる。肥前陶器は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具と豊富な器種組成であり、各用途別組成で高い比率を示すが、食膳具については肥前磁器が多い。このなかで鉢類については肥前陶器が多い傾向にある。調理具の播鉢は肥前陶器が独占する。貯蔵具は甕と瓶類で、陶器甕では肥前陶器のみで、地元の産地を主に受容する。調度具は、寺小路遺跡では灯火具は出土しなかったが、同じ佐賀城跡周辺に位置する西中野遺跡でも灯火具は土師質土器のみである。しかし、佐賀城跡では肥前陶器の灯火具が出土しており、集落跡と城下町跡では受容に差異があった。灯火具以外に香炉や仏飯具などの神仏具や瓶類があり、これらは佐賀県下で多く出土する。

肥前磁器は食膳具を中心に出土し、寺小路遺跡に限らず、他の遺跡でも共通して食膳具で高い比率を示す。主な器種は碗・皿である。どちらも品質は「くらわんか手」が広域かつ多量に出土するが、高級品の比率は集落跡に比べて佐賀城跡などの城下町跡で多い傾向にある。また、食膳具以外の神仏具や化粧具などの調度具も集落跡では5%未満であるが、佐賀城跡ではそれより高い比率を示す。

19世紀代は、西中野遺跡の組成では18世紀代と同様に肥前陶器が依然として半数近い比率を示すが、肥前磁器の比率が上がり土師質土器を上回る。この他は変化なく、瓦質土器、京焼系陶器が続く。用途別組成は食膳具が高い比率だが、調理具が比率を上げる。これは土瓶や鍋類などの煮沸具の増加によるもので、これら以外に貯蔵具、調度具も18世紀代より比率を上げる。

肥前陶器の組成は、18世紀代と大差ないが、食膳具は肥前磁器碗・皿の急増により同器種は僅かとなる。それ以外には土瓶や土鍋が各地で増加する。ただ、寺小路遺跡や西中野遺跡の煮沸具は肥前陶器に分類したが、その多くは肥前以外の地域で生産したものと考えられる。製品の特徴から福岡県小石原中野窯の製品の可能性が高く、近郊の製品を受容することがわかった。調度具は灯火具・神仏具が中心で、佐賀城跡では灯火具もみられるが、周辺部の集落跡でも僅かに出土し始める。土師質土器の皿は城下町跡では減少するが、集落跡は変わらない。その一方で、火鉢や焙烙などは共通して各地で増加する。瓦質土器、京焼系陶器は18世紀代と大きな変化はない。

肥前磁器は、碗・皿を中心とすることは18世紀代と変化なく、それに加えて遺跡によって高級品の比率が異なることも前代と同様である。その一方で、量産品の多い集落跡で

も器種にバリエーションがみられ、この変化が肥前磁器の急増の要因と思われる。また、神仏具や化粧具の出土量も佐賀城跡などと大差がなくなる。

4 福岡（第 159 図）

小倉城、長崎、佐賀県を中心の土器・陶磁器の組成を見てきた。福岡県下でも良好な一括廃棄土坑がある。そのなかでいくつかの資料を計測分析することができ、未計測な資料も実見し、それら土器・陶磁器を以下に検討する。

① 17 世紀代

17 世紀前期

本時期の良好な資料は城下町に集中する。**博多遺跡**は、江戸時代は筑前、福岡県福岡市に所在する（第 159 図 - 3）。博多遺跡は、古代から海外貿易の窓口として古代から中世にかけて繁栄する。16 世紀、堺へ海外貿易都市機能が移行すると急速に勢いはなくなるが、江戸時代は筑前黒田藩の城下町として栄える。発掘調査も古・中世が中心であるが、近世の資料もいくつかある。

博多 89 次土坑 33 号は 17 世紀前期～中期の廃棄土坑である。計測資料ではないが産地別組成を見てみると、土師質土器、肥前陶器、上野・高取焼、肥前磁器などで、このうち半数近くあるのが肥前磁器で、これに上野・高取焼が続く組成である。用途別組成は食膳具が中心で、これに調理具、貯蔵具、調度具が続く。

土師質土器は皿・焙烙が出土する。皿は灯火芯を残すものは少なく、主に食膳具として受容する。焙烙の器形は難波分類の A 類が出土し、近畿産のものが出土する。上野・高取焼は、食膳具の碗・皿、調理具の播鉢・片口、貯蔵具は甕・壺、調度具の香炉など豊富な器種組成がみられる。特に播鉢は肥前陶器も出土するが、本遺構では 80% 近くあり、本産地が主体と思われる。肥前陶器は、食膳具、調理具、貯蔵具、調度具が出土し、これも上野・高取焼と同様に豊富な器種組成がみられるが、あくまでも上野・高取焼を補足する状況である。但し、甕についてはほぼ独占する。肥前磁器は食膳具の碗・皿が中心で、これを主に受容したと思われる。この他に小坏・鉢などが出土する。

② 18 世紀代

18 世紀前期

博多遺跡の第 96 次 18 号・19 号土坑は 18 世紀前期～中期の遺構である。これも計測資料でないが産地別組成を見てみると肥前磁器を中心とし、土師質土器、肥前陶器、上野・高取焼が出土する。用途別組成は食膳具が多く、これに調理具、貯蔵具、調度具が続く。

土師質土器の器種は皿・焙烙・焼塩壺・灯火具・焜炉などが出土する。皿は灯火芯を残すものが多く、主に灯火具として受容する。焙烙の器形は難波分類の D 類に類似するがその特徴から在地産と思われる。上野・高取焼は食膳具の碗・皿・播鉢・灯火具を中心に出土し、このうち播鉢は前代に引き続きこれが独占する。肥前陶器は碗・皿・播鉢・灯火具が出土する。このうち灯火具は 17 世紀代から博多遺跡では出土するが、多くなるのは 18 世紀に入ってからである。18・19 号遺構では受けをもつタイプであるが、同時期の遺構からは受けをもたないタイプも出土する。甕については本時期でも肥前陶器が独占する。肥前磁器は食膳具の碗・皿が中心で、その量は前代より増加している。この他に両遺構から化粧具が出土する。

18 世紀後期～19 世紀前期

本時期は、黒田城跡でいくつか良好な資料がある。黒田城跡 2 区 2 号井戸（第 159 図 - 2）の産地別組成を見てみると、土師質土器 9%、瓦質土器 1%、備前焼 1%、肥前陶器 10%、上野・高取焼 27%、京焼系陶器 6%、肥前磁器 46%にわかれる（第 178 図）。用途別組成は食膳具 61%、調理具 17%、貯蔵具 2%、調度具 20%と食膳具を中心とする（第 179 図）。

土師質土器は皿・焙烙・焜炉類が出土する。このうち焙烙は調理具組成では土師質土器焙烙 23%、この他に肥前陶器播鉢 7%、上野・高取焼播鉢 55%、上野・高取焼土瓶 8%にわかれ（第 181 図）、鍋類はこれのみで陶器鍋はまだない。肥前陶器は食膳具の碗・鉢、調理具の播鉢、調度具の瓶類など豊富な器種組成がみられる。各用途別組成の状況から上野・高取焼を補う様相を示す。上野・高取焼の器種は、食膳具の碗・鉢、調理具は播鉢・土瓶、貯蔵具は甕、調度具は瓶類が出土する。その中で、播鉢は先の通り上野・高取焼播鉢 55%、肥前陶器播鉢 7%と大半を占める（第 181 図）。また、土瓶であるが、おそらく福岡県小石原中野窯の製品の可能性が高い。京焼系陶器は食膳具の碗が出土し、他の産地に比べると少ない。器種・装飾は色絵丸碗である。肥前磁器は食膳具の碗・皿・鉢、調度具の紅皿・仏飯具・仏花瓶・段重が出土する。このうち食膳具組成を見てみると 58%を示し、主体であることがわかる。碗は丸碗を中心とし、広東碗・筒型碗・小広東碗など豊富な器種組成である。皿は大皿がなく深皿が多い。

この他に、同時期の遺構から備前焼徳利、堺・明石焼播鉢、瀬戸美濃陶器鉢、中国在地陶器播鉢・甕が出土するが少ない。

③ 19世紀代

この時期に至ると、城下町以外の資料が増加する。ただ、年代幅があり、一括性にかける資料が多い。その中で黒崎宿場町遺跡を中心に見てみる。

黒崎宿場町のSX17は、天保11年(1840)の火災処理土坑である。大量の瓦に混じって土器・陶磁器が出土する。産地別組成は土師質土器10%、瓦質土器5%、肥前陶器7%、上野・高取焼38.1%、京焼系陶器2%、肥前磁器37%、瀬戸美濃磁器0.9%にわかれ(第178図)、肥前磁器と上野・高取焼が拮抗する。用途別組成は食膳具47%、調理具15%、貯蔵具20%、調度具18%という組成である(第179図)。

土師質土器は焙烙・焼塩壺・甕・灯火具・焜炉が出土する。焙烙は調理具組成で25%とやや比率が高い(第183図)。器形は難波分類のD類に類似するが在地産と思われる。甕はこの時期から佐野焼が出土する。瓦質土器の器種は調度具の焜炉、貯蔵具の甕などで、これらは小倉城跡の組成と共通する。肥前陶器は食膳具の碗、貯蔵具の甕が出土する。甕は貯蔵具組成をみると、上野・高取焼53%、肥前陶器30%、土師質土器12%、瓦質土器5%と、上野・高取焼甕とは大差がある(第182図)。

上野・高取焼の器種は食膳具の碗を中心とし、皿・鉢などがある。碗は食膳具組成をみると肥前磁器碗35%、上野・高取焼碗19%、京焼系陶器碗4%、肥前陶器碗2%と肥前磁器碗とは差異があるが、その他の陶器碗とも差異がある(第180図)。上野・高取焼碗は、肥前磁器碗と比べると小振りであり、喫茶碗の可能性が高い。播鉢は調理具組成をみると上野・高取焼43%のみで(第181図)、同時期の遺構でも本産地以外は少ない。調度具は灯火具が出土する。他の同時期の遺構では神仏具の香炉や仏花瓶が出土する。京焼系陶器の器種は色絵丸碗である。同時期の遺構からは調理具の土瓶・鍋類も出土する。肥前磁器は、食膳具の碗・皿を中心とし、器形は「くらわんか手」碗・広東碗・端反碗などの中碗が多い。皿も「くらわんか手」の中皿が中心で大皿は少ない。その他に鉢・そば猪口がある。食膳具以外では化粧具の紅皿、神仏具の御神酒徳利が僅かに出土する。

この他に、同時期の遺構から備前焼徳利、堺・明石焼播鉢、瀬戸美濃陶器鉢、萩焼碗、中国在地陶器播鉢・甕、瀬戸美濃磁器碗が出土するが少ない。

④ 小結

福岡県の近世遺跡は、小倉城跡では広域かつ重層的に調査しており、江戸時代を通しての土器・陶磁器の変遷を掴むことができるが、それ以外の遺跡では難しい。その中で、単発ではあるが博多遺跡、黒田城跡・黒崎宿場町跡などで土器・陶磁器の変遷を雑駁ではあるが掴めた。

傾向としては、豊前、筑前などの城下町跡、町屋跡は、小倉城跡と土器・陶磁器組成が共通する。特に、備前焼、丹波焼、瀬戸美濃陶器、京焼系陶器などの中国・東海・近畿の製品の出土状況は同様である。

17世紀代は、各地での産地別・用途別組成ともにほぼ共通する。産地別組成は土師質土器、上野・高取焼、肥前磁器を中心とし、これに肥前陶器が続く組成である。用途別組成は食膳具を中心とし、調理具、貯蔵具、調度具と続く。

土師質土器は皿と焙烙、瓦質土器は火鉢がみられ、これらは在地産と考えられる。但し焙烙については17世紀前期までは近畿産の製品も流入する。上野・高取焼は食膳具、調理具、貯蔵具、調度具と豊富な器種が各地で出土し、用途別組成で高い比率を示すことから、地元の製品を主に受容することがわかった。ただ、食膳具は肥前磁器、貯蔵具の甕は肥前陶器が高い比率を示す。肥前陶器は17世紀後期に近づくほど比率は下がるが20%台を各地でキープする。器種組成は上野・高取焼と共通し、甕以外は上野・高取焼を補足する程度である。肥前磁器は食膳具を中心し、博多遺跡と黒田城跡を比較した場合、出土量、文様のタイプなどは博多遺跡が豊富である。

18世紀代は城下町跡を中心に良好な一括廃棄土坑が増える。産地別組成は土師質土器、肥前磁器、上野・高取焼を中心とし、これに肥前陶器が続く組成である。用途別組成は食膳具を主に、調理具、貯蔵具、調度具が続く。これら産地・用途別組成は17世紀後期と大きな変化はみられない。

土師質土器、瓦質土器は陶磁器が増加するなかでやや減少する。器種組成に大きな変化はないが、焙烙は集落跡での出土例は少ない。上野・高取焼は豊富な器種組成で、肥前陶器も上野・高取焼を補足する程度であるが、前代に引き続き甕の出土例は多い。肥前磁器は食膳具を中心とし、調度具の神仏具・化粧具が18世紀前期から僅かであるが比率を上げる。この他に、京焼系陶器、中国在地陶器が新たに出現する。京焼系陶器が出土するのは城下町跡に限られる。製品は共通して色絵碗・火入れや鉢類も出土する。一方、中国在地陶器は、城下町跡に限らず集落跡でも出土し、器種は播鉢・甕などであるが量は少ない。

19世紀代に至ると、宿場町跡、集落跡で出土量が増える。また、産地・用途別組成も変化がみられる。産地別組成は肥前磁器が依然として高く、これに上野・高取焼が続く。土師質土器、肥前陶器、京焼系陶器は前代と組成に大きな変化はないが、新たに、ごく僅かであるが堺・明石焼、萩焼、瀬戸美濃磁器が加わり、さらに備前焼、瀬戸美濃陶器が復活し豊富な産地別組成となる。用途別組成は食膳具に調理具が近接するという変化がみられる。

肥前磁器は18世紀代と変わりなく、食膳具が中心でこれに調度具が出土する。食膳具組成で依然として高い比率であることから、肥前磁器の出土量には大きな変化はないと思われる。上野・高取焼は比率を上げる。前代と同様に豊富な器種組成であるが、土瓶・灯火具などの比率が上がり、これは城下町跡では顕著に現れるが、宿場町跡や集落跡でも出土量は増えるものの、肥前磁器と拮抗する状況にはならない。その他に、瀬戸美濃陶器、萩焼、中国在地陶器、瀬戸美濃磁器が各地で出土するが、京焼系陶器については城下町跡に大きく偏りがある。

このように、福岡県では小倉城での土器・陶磁器の組成と共通し、江戸時代を通して地元の上野・高取焼が高い比率を示すが、播鉢以外は上位になることはなく、他の産地と競合する。